
魔法大戦リリカルなのはWizarS 2nd

かぜのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法大戦リリカルなのはWizards 2nd

【Nコード】

N6983W

【作者名】

かぜのこ

【あらすじ】

「通りすがりの“魔法使い”だ。覚えておけ、魔導師」――少女は失った過去と再会し、遙か彼方から訪れた邪悪なる存在との戦いに身を投じる。……その光り輝く魂に秘めた、黄金の力とともに。

――今、世界を揺るがす“魔法大戦”の幕が開かれる――
※本作はArcadia様にも投稿しています。

1・1 (前書き)

斯くて彼らは将来の神秘を知らず、
太古のことどもを解することもなし。
おのれに何が起こりたるかを知らず、
将来の神秘よりおのれの魂を救うことなし。

『死海写本』より一部抜粋

神々が住まい、光と闇の勢力に分かれて闘争を続ける世界——“主八界”。

八つとも、十四とも言われる世界の内の一つ、第八世界“ファージ・アース”。

我々が住む地球によく似た、しかしまったく異なった世界の“下”には、“裏界”^{フアーサイド}という名のもう一つの世界が存在する。

エミュレイター、侵魔と呼ばれる、いわゆる悪魔の類^{たぐい}が住む闇の領域——その一面に、無限に広がる蒼い海原があった。

元来、裏界とは、あらゆる物理法則が通用せず、極度に歪曲された混沌の空間だ。

故に、空間の様相は、そこに在る^あエミュレイターの意志によって決定される。

この蒼海にたゆたう蒼銀の宮殿は、近頃この裏界に新しく名を連ねた若き魔王の領域だった。

“母”より受け継ぎし力で、裏界の住人たちに自らの存在を認め、知らしめた、人にして人ならざるモノ。

その出自に由来して、彼の者はこう呼ばれる——

——“裏界皇子”と。

「ふうん……」

縦長の豪華なテーブルの端、椅子に腰掛けるのは銀髪金眼の可憐な少女。細い足を優雅に組み、おなじみのポージングで紅茶を嗜んでいた。

「で、ホントに“そこ”へ行けばプラーナが手に入るわけ？」

かちりとカップをソーサーに戻し、訝しげに瞳を細める。

「まったく疑い深いな、君は。言っただろう？ 一世界あたりのプラーナの純度は低いけど、世界の総数はこちらよりも遙かに上。全体で見れば大したものだ。

邪魔なウィザードや管理神連中もないから、好き放題の入れ食いうハウハ。君にも悪い話じゃないと思うけど」

テーブルの対岸で相對するのはこの蒼い宮殿の主――黒髪蒼眼の少年。少々うんざりした様子で嘆息する。

その面立ちは未だ幼さは抜けきっていないものの、じきに立派な美丈夫へと成長することは間違いない。

「……………そもそも、あたしはあんたたちと組むのが嫌なのよ」

正論を前にして、少女は無然として面倒くさそうに頬杖を突く。マナーのなっていない仕草に少年は一瞬、不快感を覚える。

それを言葉に乗せ、挑発。

「大事の前の小事。いつもそんなだから、ウィザードに返り討ちにされるんじゃないか」

「……………あんだだって他人のことが言えないじゃない！」

「否定はしないよ。君ほどじゃないけどね」

「ぐ……っ」

「この間は、真行寺命に叩っ斬られたんだろ？ あれ、それとも緋室灯に撃ち抜かれたんだっけ」

「うぐ、ぐぐっ……」

「で、どうするのさ。手伝うの？ 手伝わないの？」

射殺するような銀色の視線を柳のように受け流し、少年が決断を迫る。もつとも、内心は冷や汗ダラダラだったりするのだが。

「いつ、いーわよ、やったやろうじゃないのっ!？」

やけっぱち気味に言い切ると、少女は立ち上がり、背もたれにかけてあったポンチョを乱暴に羽織る。

「この“蠅の女王”を味方に引き入れたことっ、たっぷり後悔させてやるから覚えてなさいっ!」

どこか焦点のズレた捨てセリフを残し、少女はしゅんと姿を消した。

「……………。そこは後悔させちゃ駄目だろ、おい……」

そんな虚しいツツコミは虚空に消えて。

まあいいか。思考を切り替えた少年は、蒼いグラデーションを自らの領域に視線を向ける。

“力”は得た。準備もまあ、万端。発生したイレギュラーが気になるが、それもまた一興。

人生とは、何が待ち受けているかわからないからこそ楽しいのだ。

「……例えカミであろうとねじ伏せて貫き進むのみ、ってね」

愉しそうに小さく笑みを漏らし、少年は思考の海に落ちる。

彼の胸中に浮かぶのはただ一つ。

故郷に残した自らの半身、自分の居場所。愛しい少女の記憶――

――

「君」が、どれだけ綺麗になっているのか……本当に楽しみだよ」

――これは、“運命”の名を持つ少女と、白き“羽根

”を継ぐ少年が綴る、愛と勇気と希望のものがたり――

魔法大戦リリカルなのはWizard S

Magical war fair of the

Satan and Pluto

#1 「夜、来る」

4月の中ごろ。

とある日、とある放課後。

場所は日本、某県、海鳴市。

桜の香りがわずかに残る、すっかり見なれた住宅街をとぼとぼと歩く。

晴れ渡った空からは、憎らしいくらいにさんさんと太陽の光が降り注いでくるけれど、私ことフェイト・テストロッサ・ハラオウンの気持ちは、反比例するかのように曇りに曇っていた。

「はぁ……」

春は、キライだ。

冬……というか、十二月と同じくらいに憂鬱になる。

五年前、今ではかけがえのない親友たちと出逢った思い出の詰まった季節だというのに、私は毎年、密かに陰鬱な気持ちを持て余して、原因不明のやるせなさにため息をつく。

春はキライ。冬もキライ。

いつもは目を背けていられる、私のナカの、欠けたナニカをまざまざと見せつけられているようで……。

“あのひと”に捨てられて、拒絶されたことを思い出すからかもしれないし、もっとほかに理由があるかもしれない。

ともかく、私は春がキライだ。

「……はぁ」

もう一つ、ため息。

今日は特に最悪だった。

せっかくオフの日だというのに——といっても、“お仕事”のない日にすることなんて、私はほとんど知らないけど——、これはない。なにかのいじめだろうか、とくだらない想像をしてしまうのもしかたないと思う。

「たい焼き、売り切れだなんて……ひどいよ。そんなのないよ……」

私の大好物、とらやのたい焼きが、誰かに買い占められてて一個も残ってなかったのだ。

たかがたい焼きと侮るなかれ。情緒不安定だと自覚するほどの私の精神安定剤代わり……といえば、どれくらい大事なものかわかってもらえるはず。

たしかにあそこのたい焼きは、ほっぺが落ちるほどとってもおいしくて、余所のととは比べものにならないけど、材料がなくなるくらい買い占めるなんて非常識すぎる。どこのアラブの石油王の来日かという話だ。

「——はあ……」

カスタードのたい焼き、食べたかったなあ……。

* * *

あてもなくぶらぶらしているうちに、いつの間にかいつもの公園に来てしまった。

ごく普通のブランコに小さな砂場、サビが目立つ遊具……広さはそれなりにあるけれど、どこかもの悲しいこじんまりとした印象の公園。

たい焼きを食べるとき、私はここでひとりと決めている。親友に

も教えていない、私だけのヒミツの場所。

唐突に、ざあっと春一番には遅すぎる強い風が吹き荒れた。

「っ」

反射的にまぶたをつむる。

びゅうびゅうと吹く風の音が遠ざかっていく。

ややあって、ゆっくりと開いた私の視界に飛び込んできたのは、夜のように真っ黒なくせつ毛の男の子の後ろ姿。

インディゴブルーのパーカーの上に、黒革のライダーズジャケットを羽織っていて、クリーム色のカーゴパンツの裾を無骨なデザインの黒いコンバットブーツに突っ込んでいる。

とても、男の子っぽい服装だ。

背丈は私よりも拳二つ分くらい高くて、すらりとした体型は無駄なく引き締まっている感じ。

同じ年か、ちょっと年上くらい、かな。

「あ……」

——なぜだか私は、“彼”から目を離すことができなくて。

まじまじと観察されていることに気がついたのか、その男の子が振り向く。

「——っ」

びっくりしたように見開かれたのは、蒼い海みたいな深いプラネットブルーの瞳。

いつか見たような、はじめて見たような、ほっとするような、とても懐かしい感じのする色。

浅黒く日焼けした精悍な顔立ちと合わさって、どこか頼もしい雰

囲気を漂わせている。

数瞬、見つめ合う。

磁石の両極がくつつくみたいに、視線が離せない。――離したくない。

引き込まれるような蒼い瞳と、ボサボサの黒い髪がミスマッチで、なんだかちよつとかわいらしかった。

「こんにちは」

よく通る声。穏やかな響き。

男の子は、にこりと社交辞令的に微笑む。

とくんと高鳴る胸。……なんだか負けたような気がしてくやしい。

「こ、こんにちは」

軽くどもりながら返事。

ふと、その男の子が腕で抱えている紙袋が目についた。

そ、それは……、まさか……っ!?

私が違う意味で視線を奪われていると、男の子は何食わぬ顔で紙袋から予想どおりもの――ほかほかのたい焼きを取り出して、頭の方からぱくりとかぶりつく。

……すごく、おいしそう。

「ん?」

男の子が手を止めて、じっと見ていた私のことを見返す。

慌てて視線を外すけど、どうにも“彼”とたい焼きが気になってしかたがなくて、つい、ちらちら見てしまう。

すると、男の子はさっきの微笑と違う……こう、“あくま”的な笑みを浮かべた。

「たい焼き、欲しいの？」

うっ……。

し、知らない人から物をもらうなんて、子どもみたいにみつとも
ないマネ、中学三年生にもなってできるわけない。

できる、わけ……。

できる……。

……………。

ふらふらと揺れる、おいしそうなたい焼き。視線は釣られてゆら
ゆら。ゆらゆら。

私の大好物。今日はもう、食べられない——

「……………」

とつとう誘惑に屈して、私はこくりと頭かぶりを振る。

「ふふっ、そっか。じゃあ、どうぞ」

男の子はたい焼きを差し出しながら、してやったりといったずらっ
子な笑顔をこぼして。

——私はそれが、とても“彼”らしい笑顔だと思った。

＊ ＊ ＊

ベンチに男の子と並んで座って——なぜかいつも私が座るところ
だった——、もらったたい焼きをかじる。

当然、私はしっぱから。頭から食べちゃうなんてかわいそうだ。
もぐもぐ。もぐもぐ。

やっぱり、たい焼きはおいしい。でもどうしてだろう、今日は普

段よりもずっとおいしく感じる。

「……」

夢中になっていて気がつかなかったけど、隣に座っている男の子は私を観察しているみたいだ。

普通、見ず知らずの人にそんなふうに見られたらいやなものだけど、“彼”からの視線に不快感はない。

むしろ、胸がぽかぽかして安心する。なんだか不思議。

「あ、あの……」

「うん？」

とりあえず、不思議に思ったことを聞いてみた。

「どうして、私にたい焼きわけてくれたの？」

「そりゃあ……すぐく物欲しそうにこっちを見てたから、かな」

苦笑混じりに言われて、かああつと頬が熱くなる。

……もしかして食い意地が張ってる、とか思われちゃったかな。

「まあ、それは冗談……でもないけど、俺の分はもうたくさんあるからね」

一人称に少しの違和感。なんだかちよつと、似合わない。

「それに、君みたいに綺麗な女の子と一緒に食べられるなら、こっちからお願いしたいくらいだよ」

「っ！？」 き、きれいだなって、そんなこと……」

ストレートな言葉、さっきとは違う意味で顔が熱くなる。

うれしいとか、はずかしいとか、くやしいとか……私の感情は、瞬く間にぐちゃぐちゃで。自分でもコントロールできない。

そんな私の様子を楽しそうに見ていた男の子は、不意に席を立つ。

「つと、そろそろ行かないと。短気な連れが怒るんだよね。残りは、君にあげるよ」

「えっ、いいの？」

「いいよ。いいものを見せてもらったお礼だから」

「あ、ありがとう」

「ん、じゃあ……またね（・・・）」

そんな意味深なセリフを残して、黒髪の男の子は気まぐれな風みたいに唐突に去ってしまう。

私は“彼”の背中を少し寂しく感じながら見送り、不思議とぽかぽかした気持ちであったかなたい焼きを存分に味わう。

「あつ、名前、聞きそびれちゃった……」

はじめて逢った、もう逢えないはずのひとなのに——それがひどく残念に思えて。

……またね、か。

“彼”が残したことばを、心の中でつぶやく。

「また、逢えたらいいな……」

カスタード味のたい焼きをはみながら、暮れ始めた茜色の空を仰いで、私はそう願った。

1・2

新暦71年 4月29日

ミッドチルダ臨海第8空港。

普段、ビジネスマンや家族連れなどの旅行者でごった返している空の玄関は、今や真っ赤な炎に包まれている。

休暇中、幼なじみで親友、八神はやての元に訪れていた私と、もうひとりの親友、高町なのはは、突如起こった大規模火災に遭遇した。

時空管理局の局員としても、ひとりの人間としても指をくわえて見ているわけにはいかない。私たちは現場に直行して、取り残された民間人の保護に奔走していた。

「！」

だいたい、二メートルくらいの高さの廊下。

前方に、床に伏せ、苦しそうに息をしている藍色のロングヘアーの女の子を発見した。

駆けよって、抱き上げる。

「だいじょうぶ？ ごめんね、遅くなって」

「あ、あの、妹が、スバルがつ……！」

「妹さん？ ん……だいじょうぶ、その子も保護されたみたいだ」

「よかった……」

安心したように涙をこぼした女の子。

突然、前方の壁が爆発。

私たちのいる通路へ勢いよく這い出してくる赤々とした炎。咄嗟に障壁を展開、熱を遮断して保護した女の子を守る。

ガス管かなにかが火災の熱で破裂したのかもしれない。ここも長くは保たないみたいだ。

早く要救助者であるこの子連れて、退避を――

「っ!？」

ぞくりと、背中に冷たいモノを差し込まれたような寒気――ううん、怖気を感じた。

反射的に振り向く。そこは、さっき爆発で開いた大穴。

奥に、よくないモノがいる――戦いに関してだけなら、鋭いと自負している直感が訴えた。

炎の中で揺れる影。人の形にも見える“ナニカ”。

「う……っ」

炎の中から這い出た“ソレ”は、半透明のヒトガタ（……）。無機質で構成された歪な形をしているけれど、人間でいうところの頭部に当たる場所はスライム状の原形質の塊。うねうねと不気味にうごめいて、キモチワルイ。

今まで感じたことのない異質な魔力と、この世のものとも思えない不気味な姿。混沌が形をなしたような物体に生理的嫌悪がこみ上げて、身体が一瞬硬直した。

“ソレ”は、そんなことはお構いなしと、ゆらりと機械的な動作で接近してくる。

見かけによらず、その動きは速く鋭い。

「くっ！」

この子を守らなきゃ、と後の先で一気に距離を詰める。

刃物のようになってる左腕が振り上がり、下ろされる。

——だけど、遅いっ！

刃をバルディッシュの穂先で受け止め、逸らす。体勢を入れ替えて、腰をひねる。

バルディッシュをへハーケンフォームに。スタンモードで――

「やあああっ！」

一気に薙ぎ払う！

胴を魔力刃で引き裂かれた“ソレ”が、糸が切れた操り人形みたいにガクガクと小刻みに身体を振動させながら、数歩後ずさる。

ヘドロに手をつ突っ込んだみたいなの、すごくいやな手応えに思わず顔をしかめてしまう。

残心を忘れたツケ。“ソレ”は、何事もなかったかのように動き始める。

再度繰り出された刃。刺突。

「うっ！？」

なんとか魔力刃の腹で受けるけど、内心では混乱。

さっきの一撃、完璧に決まったはずなのに。人間なら昏倒してもおかしく……、

——もしかして、“人間”じゃないから……！？

「キャアアアッ！」

まとまりかけた思考を吹き飛ばす悲鳴。鏑迫り合ながら視線を動

かせば、保護した女の子を襲う異形の姿が。

もう一体！？　っ助けなきゃ！

でも、目の前の“ソレ”に邪魔されて、近づけない。

そうこうしているうちに、奇妙な刃が彼女に迫る。

——瞬間、一陣の蒼い風が私の横を通り過ぎた。

「えっ？」

私を押さえ込んでいた“ソレ”は、瞬く間もなく真つ二つに断ち斬って。女の子を襲っていた“ソレ”が、まばゆい蒼銀の光に焼き尽くされていた。

燃え盛る紅蓮の炎に映し出される人影。
すっ、と人影がかがむ。

「怪我はないか？」

「は、はい……」

「それは重畳」

「あ、あのっ、ありがとうございますっ」

ぺたりと座り込んでいた女の子と目線を合わせ、安心させるようなやさしい声色で声をかけ、人影がゆっくりと立ち上がる。

ぱさり。衣擦れの音。

「……非殺傷設定、か。それじゃあ“コレ”は倒しきれない。次からは気をつけろ」

よく通る、凜々しい声。

左腕に蒼白い光で形作られた刃を纏わせ、右手には同じ色の光がちらつく。

人影は、黒い髪の男の人だった。

くせの強い前髪から覗く冷たい蒼の瞳が私を射抜く。

明ける前の夜空に似たネイビーブルー……濃紺のバリアジャケットは、スーツとコートを合わせたよう。ダブルのボタンや、ベルトのバックルは絢爛なゴールド、手甲など一部の意匠は鮮やかなブルー。背中に三重の輪。白いシャツの首もとには蒼い色のおしゃれなネクタイ——まるで“悪魔”だと、私は思った。

「あなたは……？」

訊くまでもない。“彼”は、あのと時の男の子だ。

なぜだろう。冷たい雰囲気も、服装だって全然違うのに、私は確信を持って断言できた。

「通りすがりの“魔法使い”だ。覚えておけ、魔導師」

「……っ」

けれど、返ってきたのは冷たい言葉。

魔導師。それが、私を指し示す言葉だと理解した途端、ずきりと胸の奥に痛みが走った。

あの子にはやさしい感じなのになんで？　なんて思っていない。……思っていないもん！

もやもやした自分の気持ちに困惑する。

「——む」“彼”が小さく唸る。その途端、床の亀裂から黒い蒸気のようなモノが吹き出した。

奇妙な蒸気から、さっきの“ヒトガタ”が現れる。
その数、25。

警戒してバルディッシュを構えると、女の子を小脇に抱えて一息に近寄ってきた“彼”が言う。

「お前はこの子を守っているといい。“アレ”を滅ぼすには邪

魔だからな」

「えっ……でも——」

ぽかんとした表情をしている女の子をそっと床に下ろした“彼”は、私の言葉を無視して向き直る。

ゆらりと揺れる肩。

次の瞬間、“彼”は野生の獣のようにしなやかなストライドで廊下を疾走した。

両腕に纏わせた蒼白い刃が閃く。

踊るように、舞うように、淀みなく繰り出される斬撃。接近戦タイプの魔導師である私から見ても、少し嫉妬してしまうくらい見事な攻防一体の剣舞により、次々に“ヒトガタ”が黒い砂へと変わっていく。

「いちいち斬り刻むのも面倒だな……」

半分ほど減らしたところで、“彼”は飄々とした風につぶやく。すると“彼”からとても強い魔力が解き放たれた。

——っ!?

感じ取れる魔力は、規格外な親友たちのそれを易々越えてしまうほど膨大で。

こんなの……、ありえない……。

「神威の洗礼、その魂で受けろ」

ゆっくりと掲げられた左腕の光刃が、魔力を吸って大きく延びる。まっすぐに振り下ろされた光。しゅんつと風を断つ音。

次の瞬間、数え切れないほどの蒼い光が縦横無尽に走り、ズタズタの細切れにされた“ソレ”の中心で“彼”は悠然とたたずんできた。

「――光に抱かれて眠れ」

紡がれた言葉。露を払うように振る左手と、弾ける魔力光。それを引き金に、過剰すぎるダメージを受けた“ヒトガタ”が消し飛んだ。

――そして、見つめ合う私と“彼”。沈黙が広がる。

「……」

「……っ」

ややあって、“彼”はいたずらっ子のように微笑んで、空間に溶け込むように姿をにじませた。

転移魔法！？

「っ待って！」

伸ばした手は届かず、“彼”の姿は闇に消えて。

「またね」の意味がわかったような、わからないような――そんな中途半端な気持ちは宙ぶらりん。

無意識のうちに私は、胸元のネックレスをバリアジャケットの上から強く握りしめていた。

＊ ＊ ＊

第97管理外世界“地球”、海鳴市のとあるスーパーマーケット。夕食時の前とあって、店内は買い物客でごった返している。

聖祥大附属中学の制服を身につけた茶髪の少女が、若奥様風の金髪女性と連れ立って買い物をしていた。

トマトを手にとって選ぶ、茶髪の少女――八神はやての表情は冴

えない。

ぼーっと、あまり新鮮ではなさそうなトマトを眺めている。

「はやてちゃん、どうしたの？ 何か心配事？」

その様子を心配に思った連れの女性――シャルが問いかける。

「ん？ あー、心配事いうかなあ……」

気のない生返事。

「フェイトちゃん、最近さらに目に見えて元氣なくな……」

「フェイトちゃん？ ああ……もうそんな時期だっけ」

納得したように頷いて、シャルが頬に手を当てた。「四月と十二月のフェイトはどこか危うい」のは、仲間内の間ではある意味、暗黙の了解だった。

もともとどこか陰りのある少女なのだが、この時期は特に酷く、笑顔など愛想笑いくらいしか見せない。以前はそれを心配してみんなで――特になのはが――、何とかしようとあの手この手を試したのだが、彼女は一向に持ち直さず、今では腫れ物に触るような扱いになってしまっていた。

「せやねん。この前、ミッドで大きな火災があったやろ？ あのあと、」夢は自分の部隊を持つことや！」って話をしたんやけど、上の空で「そうなんだ、がんばって」て……反応淡泊すぎて、少しへこんでしもたわ」

はやてがずーんと暗い雰囲気を漂わせる。

「うーん、でも、そこまで沈んでるのは近年稀に見るんじゃないかしら？　なのはちゃんが大けがしたときもそれなりに冷静だったし」

きゅうりを手に取りながらシャルが言うと、はやては腕を組んで難しい表情をした。

「せやね。なんか理由があるんやと私はにらんどるんやけど……まさか、男かつ！？」

「まさかあ。フェイトちゃんに限ってそれはないわよ」
「あはは、やっぱそうかあ」

自分のバカな予想をシャルと一緒に笑い飛ばして、はやては夕飯の買い物に意識を切り替えた。

＊ ＊ ＊

帰り道。

他愛のない雑談を交わしている時、ふとシャルが真剣な表情で周りを見回した。

はやてが怪訝な顔をする。

「シャル、どうしたん？」

「はやてちゃん、魔力反応。結構、近いかも」

「！——ほんとや。んゝ……、でもなんや変な感じやな、これ。

まあ、ええわ。見逃すわけにもいかんし、行ってみよか」

シャルの指摘でようやく異常を感知したはやて。何か起こってのことだと、連れ立って不可思議な魔力の発信地へ向かう。

そこは土管が積まれただけの殺風景な空き地だった。

某国民的青狸のマンガで、よく舞台になる空き地をイメージする

とわかりやすいだろう。

警戒しつつ、空き地の真ん中あたりまで進む二人。不自然な魔力を微弱に感じる以外、特に変わった様子はない。

「しかし、なんも変なところないなあ」

「……あっ」

シャルが上を見上げ、「ん？」とはやての視線が釣られる。

そこには、複雑なルーン文字と三角形が中心に描かれた、円状の青い光を放つ魔法陣。はやてが見たことのない様式だ。

不意に弾ける魔法陣から、何かが落ちてくる。はやては呆気にとられて反応できず。

「ぶぎゃっ!」「きゃ!」

何か――白い帽子をかぶった白い服の少女にはやては押しつぶされ、奇妙な声を上げた。

「ああっ、ごごごご、ごめんなさいっ!?!」

他人を押しつぶしていることに気づいた少女が、大いに慌ててはやての上から降りる。

「だ、大丈夫? はやてちゃん?」

「うー……、シャル! なんてこういうことがあるて言うてくれへんの! お嫁にいけへんようになったらどないするん!?!」

「だ、だって聞かれなかったから」

涙目でシャルに文句を垂れるはやて。シャルも別な意味で涙目だ。

すると、あわあわと二人の様子を眺めていた白い帽子の女の子がとても驚いた顔をして声を荒げた。

「っ、リオンⅡグンタ！ アゼルⅡイブリスっ！ ……じゃあ、ないですよね、あれ？」

これが、“夜天の王” 八神はやてと“元魔法使い” 志宝エリスの初めての邂逅……。

——そして、次元にたゆたう世界の全てを巻き込む大事件の始まりだった。

2・1

第八世界“ファー・ジ・アース”。

“狭界”と呼ばれる次元と次元の狭間にたゆたう絢爛なる宮殿――アンゼロット城、その執務室。

本来の主である某世界の守護者の趣味通り、優雅で豪華な内装の部屋で忙しなく動く人影。留守中の主に代わってここに間借りしている、巫女装束の女性――赤羽くれはだ。

今日も今日とて、はわはわと鳴き声をあげながら、人知を越える書類の山と必死に格闘している。

とんとんとん。

ドアをノックする音が響く。

「あ、どうぞー、入ってー」

書類から視線を上げたくれはが応える。

「失礼します」

ドアを開いて入室したのは、真紅のロンギヌス制服に身を包んだ、藤色の髪の少女――志宝エリスである。

この春、高校を卒業したにしてはやや童顔で幼児体型なスタイルは彼女の密かな悩みの種だ。

「くれはさん、ご用ってなんですか？」

力を失い、ウィザードではなくなったエリスだったが、尊敬する先輩であるくれはの補佐という仕事に誇りを持っていた。「力」はなくても、世界は守れるんです！」がここ最近の彼女の口癖。

ちなみに、エリスのここでの役職は“赤羽くれは専属第一秘書官”兼“特殊部隊グリーンティー永世名誉隊長”である。

「うーん……。用があるというかなんというか……」

エリスの質問に表情を曇らせたくれは。明瞭快活な彼女にしては珍しい歯切れの悪い言葉。

「あの……？」　どうということかとエリスが小首を傾げる。

『説明しましょう』

二人の間に、突然、魔法陣のディスプレイが展開した。

そこに映りだされていたのは、銀髪白皙の美少女。ゴシックロリータ調の黒いドレスを纏っていた。

「はわっ!？」　「あ、アンゼロットさん？」

『はい、お久しぶりです、エリスさん。お元気そうで何よりですね。くれはさんもお仕事頑張ってるようで、わたくしとてもうれしいですわ』

銀髪の美少女――アンゼロットが二人へ至極にこやかな笑顔を向けて、挨拶をする。彼女のこの清々しい笑顔が油断ならないと知るエリスは内心、身構えた。

「あの、アンゼロットさん。説明って？」

続く問いに、待ってましたとアンゼロットが口を開くが、

『こ』

「はい！」

条件反射的なスピードでエリスがそれに応える。

『……エリスさん、そのネタはもういいんです』額に指を当て、頭痛を感じるような仕草をしたアンゼロット。

「えっと、じゃあ「私の質問に、はいかイエスで答えてください」の方がよかったですか？」

さらに畳みかけられた言葉。それが天然なのか計算なのかはわからないが。

思いもよらぬ攻勢に、アンゼロットがぼかーんとアホの子な顔になった。かなりレアな表情である。

二人のやり取りを見ていたくれはなどは「強くなったね、エリスちゃん」と、涙をハンカチで拭っていた。

『な、何やらとてもふてぶてしくなりましたね、エリスさん。………
というか、話が進まないのです、説明、初めてもよろしいですか？』

「あ、はい。お願いします」

すぐさま再起動を果たしたアンゼロット。咳払いをして、説明を開始した。

『単刀直入に言いますと、エリスさんには主八界の外に消えた、とある魔王を追跡していただきたいのです』

「えっと、いろいろ引っかかる場所があるんですけど、とりあえ

ず、どうして私なんですか？」

言外に、「非戦闘員にそんなことさせんな（意識）」と主張するエリス。当然の意見である。

彼女の疑問に答えたのは巫女服の先輩だった。

「そのとある魔王っていうのが、あの（・・・）シャイマールなんだよね」

「っ！」

一瞬、あからさまに顔をしかめ、嫌そうな表情をしたエリスは、彼女の言葉で自分が選ばれたあらましを瞬時に理解した。

“シャイマール”——詳しい説明は割愛するが、その名はエリスにとつて浅からぬ因縁を持つものだ。

そして、つい先頃突如として姿を現したシャイマールを名乗る裏界魔王は、度々ファー・ジ・アースに現れては愉快犯的に事件を起こしている。

ヒトを小馬鹿にしたような言動、交戦しても適当に撤退する手際、人間の心理と社会構造を巧みに突いた小細工など、驚異的なタフネスとバイタリティを誇る“蠅の女王”に勝るとも劣らない厄介さ。また、ウィザードたちの介入しづらい、一般人同士の動乱によるファー・ジ・アース征服を度々企てていることも特筆に値する。

そのため彼の魔王はすでに、世界中のウィザードたちから大いに嫌われていた。

「私が選ばれたのは、“感知”できるから、ですか？」

エリスは、シャイマールを——そして、彼の力の一部である“七徳の宝玉”の存在を感知する能力を持っている。

未だ彼女の魂にわずかに残る“シャイマール”の転生体としての

因果に由来する力だろう。

『その通りです。先ほども言ったとおり、かの大魔王は主八界の外へと進攻したようなのです』

「主八界の外の世界……というと、柊先輩が前に行ったって言う“ミッドガルド”ですか？」

以前から、主八界の外の世界について僅かながら確認されている。もつとも、ここでそれについて語る必要もないが。

『いいえ、まったく未知の世界、未開の宇宙です。別段、その世界を守る義務がわたくしどもにあるわけでもありませんが、何がしかの力をこちらへ持ち込まれては面倒です』

冷徹な面を覗かせるアンゼロットの言葉を、複雑な表情のくれはが引き継ぐ。

「でも、距離があまりにも遠すぎて、今のところ、シャイマールと近しい魂の波動を持ってるエリスちゃんしか送れないらしいんだよね。

だから、エリスちゃんには先行して調査してきてほしいんだ。いったんエリスちゃんがあっちに行けば、何とか転移できるようになるらしいからさ」

すぐに増援は送るよ、と結尾を切る。

くれはの表情は、エリスを心配する気持ちと守護者代行としての責任感の表れて複雑な様相を呈している。

「……」

エリスは無言で考え込む。

おそらく、この任務に就いた場合に自分にかかるだろう危険を予測して。

もともと彼女は賢く聡い娘だったが、この数ヶ月の間くればの秘書として激務をこなすかたわら、時にはウィザードたちを死地に送り出す役目をしてきた経験が、彼女を確実に成長させていた。

「どうする、エリスちゃん？ 現地がどんな場所かわからないし、危ないからやめても——」

「いえ、やります。やらせてください！」

くればの言葉を遮って、碧の瞳に確固たる意志の光を宿したエリスが決断した。

＊ ＊ ＊

「——というわけなんです」

はやての自宅。

広々としたリビングのソファアにちょこんと行儀よく座ったエリスが、ひとしきり説明を終えて一息ついた。
ずずず……と昆布茶で乾いたのを潤す。

なお、エリスの服装は以前着ていた白い制服によく似たデザイン
の、白いジャケットと青いプリーツスカート。髪留めのリボンも以前のように水色だ。

「はあ、ファー・ジ・アースですかあ……見たことも聞いたこともない世界です。あやしいですね、そのお話、ほんとですか？」

ふわふわと浮かぶ、体長三十センチという文字通り“小さい”水

色の髪の少女が半信半疑に言う。

彼女の名前はリインフォース？（ツヴァイ）。愛称をエルフィといい、未だ休眠を続けている夜天の魔導書の管制人格“リインフォース”を復活させる一環として、はやてが製作した〈融合騎^{ユニオンデバイス}〉だ。ちなみに、エリスは彼女を「かわいい！」といたく気に入ったようである。

「そんな疑っちゃあかんよ、エルフィ。簡単に信じてしまうんもあかんけど、頭っから疑ってかかってしもたら、ほんとうのことなんてなんもわからなくなってしまう」

「は、はいです……」

はやては我が家の末っ子を軽く窘めた後、エリスと同じくずずず……と昆布茶を口にした。

「この子——エリスちゃんの出てきた魔法陣、ミッドチルダやベルカとは全く違う様式のものだったわ。少なくとも、未確認の魔法文化を持つ世界からの来訪者、ってことは間違いないんじゃないかしら」

黄緑色のエプロン姿がやけに似合っているシャルが、自身の考察を披露する。

「それは同感や。ほんでエリスさん、これからどうするつもりなんですか？」

初対面の年上——とてもそうは見えないが。主にスタイル的な意味で——ということで、敬語っぽい丁寧な口調で問いかけるはやて。その視線は少女らしからぬほど鋭く、何かを探るようだった。エリスはそれに気づきながらも努めて冷静に言葉を発する。

「はい……。その、私、てっきり“こちら”は単一惑星でできた世界だとばかり思ってた。でも、はやてさんのお話を聞く限り、次元世界——すごく広いんですね？」

「うん。少なくとも管理外世界はここ以外に96ヶ所あると思います。管理世界は30くらいやったけ……：そんな中からヒト一人探すのは、砂漠に落ちた針を探すよりも大変ですね」

その途方もない話に、エリスはがーんと強くショックを受けて俯いてしまった。

「はう……どうしよう」しょんぼりとして涙目で呻く。

「なんやこの萌え生物……っ」はやてがよこしまな意味で呻く。

「エリスちゃん、連絡手段とかはあるの？ あるのなら、指示を仰いでみたらどうかしら」

「あ、はい。そうですね……」

言いながら、荷物に入った小さなナップザック——ファー・ジ・アースの魔法技術の粋を結集して開発された、超☆大容量の〈簡易月衣〉。開発コードは“十六次元ポケット”——を手に取り、薄紫色の折り畳み式携帯電話を取り出した。

「ケイタイ、ですか？」

「これはO—P h o n っていう、高性能の携帯電話です。異世界での使用はもちろん、条件さえ整えば過去からだって通話できるんですよ」

「か、過去て……マジ？」

「マジです」

頬をひきつらせる面々を横に、エリスはカコカコとキーをいじく

る。

手慣れた手つきで「赤羽くれは」のアドレスを開いて、呼び出し開始。

「……………」

耳を当てたまま、硬直。

スピーカーからは「現在おかけになられた番号は……」というアナウンスが続いていた。

「あ、あれっ？ ど、どうして？」

あわあわと混乱してキーを操作するエリスに、「壊れちゃってるんじゃないですか？」とエルフィが尋ねる。

「そ、そんなことは！ あ、こちらのお宅の電話番号、教えていただいてもいいですか？」

「ええですけど。えーと、————です」

教えてもらった番号を打ち込んでみると、ややあってリビングにある据え置き電話に着信。

相手は当然、エリスのO—P h o nだ。

「壊れとるわけやないみたいや。てか、ほんとにつながって驚いたわ」

「うう……」

すっかり意気消沈した藤色の髪の少女の様子を、はやてはあごに手を当ててじっと観察する。

特殊な生い立ち故か、他人の機微には聡いはやてである。今まで

のエリスの言葉や行動から、彼女の人となりを密かに分析し、信用にあたる人間なのか把握することにつとめていた。

何も不用心に不審な人物を家に招いたわけではないのだ。

結果は――シロ。

少なくとも、現時点で悪意は見えない。むしろ善意の固まりというか、とても“ふつうの女の子”だ。――もしかしたら、自分や親友たちよりもずっと。

故に、はやては言う。軽くため息混じりで。

「ほんなら、ウチにいたらええよ」

「えっ？」

そのため息はたぶん、ままならない自分の感情へのある意味での憤りの発露。だが、悪くない。はやてはそう思う。

「幸い私ら、時空管理局の人間やし、次元を渡る手だてにあたりつけられる。それに、なにより――」

なにより？　と一同が意味深に間を取るはやてが発する言葉の続きを待つ。

「こんなにかわいいヒト、ほっとくことなんて私にはでけへん！」

ぐっと拳を握り、力説するはやて。

ばばーん。何やら間拔けな効果音がエリスの耳に届き、しらーつとした空気がリビングに流れる。

庭で伏せていたザフィーラが、眠そうに欠伸していた。

第一世界“ミッドチルダ”。

多数の次元世界を“管理”する時空管理局の運営に強い影響力を持つ、ある意味で中心地とも言える世界である。

その中央区画、近未来的な建築物が建ち並ぶ首都“クラナガン”の繁華街にて。

人通り賑やかな大通りを歩く、赤みがかった茶髪をグリーンのリボンでサイドテールに纏めた、十代半ばの少女。コードモとオトナの間をさまよう瑞々しい肢体を、白と暖色系で揃えた活動的な女の子らしい服装で包む。

「ごめんね、ユーノくん。お買い物につきあわせちゃって」

彼女——高町なのはが、申し訳なさそうな表情で言う。

「いや、いいよ。僕も久しぶりに取れた休暇を持て余してて困ってたんだ」

その隣を行くのは、なのはと同年代の少年——ユーノ・スクライア。

長い白みがかった金髪を首の後ろで束ねる緑色のリボン、フレームなしの眼鏡や、押さえ目の色合いのカジュアルな装いは彼の理知的な雰囲気によく合っている。

「そういえば、こうして二人で出かけるのって久しぶりだね」
「うん、そうだね。私もユーノくんも普段は忙しいもんね」

時空管理局の教導官にして若きエースと、無限書庫司書長兼歴史学者という極めて忙しい身分の二人だ。たまの休みがかち合うことも滅多になかった。

とはいえ、出会った頃から忙しき自体はさほど変わってはいないのだが。

「ほんとほ、フェイトちゃんと来たいなって思ってたんだけど……」
「そ、そうなんだ」

フェイトの代わりというある意味で容赦のないセリフに、ユーノは軽くへこんだ。

以前からなのは優先順位では下の方——魔法ⅡフェイトⅢはやて>自分、かなり省略しているが概ねこのようだとユーノは把握している——なので慣れっこだ、と空気で思い直す。

彼のこんな性格が、なのはへの六年越しの想いが伝わらない遠因なのかもしれない。

「……フェイトちゃん、また元氣なくなっちゃって」

「4月の中旬くらいに急に機嫌が悪くなった、って言ってなかった？」

「うん。そうなんだけど、この前の火災のあとから、またすごく悩んでるみたいなんだよ。なんだか、初めて会ったころみたいに張りつめてて……」

話しているうちに感情移入したのか、自身も沈みこんでいくのは。親友であるフェイトを心配するあまり、自分まで落ち込んでしまっっては元も子もない。

「そっか……。でも、下手に触らない方がいいんじゃないかな。ほら、フェイトって周りに心配かけまいとして無理するタイプだし」

思わず出掛かった「なのはと一緒にね」という言葉は飲み込んだ。数年前、なのはが再起不能に近い大怪我をした出来事は、ユーノにとっても痛恨の記憶として残っている。

どうしてもっと気にかけてやれなかったのか。「なのはを守る」と“約束”したのに、と。

誰と交わしたのかはどうしても思い出せないが、それでもこの“約束”をもう違えないとユーノは心に決めていた。

——彼女はユーノにとって、何よりもかけがえのない人だから。

「——ユーノくん？」

「あ。いや、何でもないよ、なのは」

なのはから心配そうに見上げられて、慌てて取り繕うユーノ。暗くなった思考を無理矢理に振り払う。

せっかく、なのはとふたりきりの買い物——デートじゃないのが残念だけれども——なのだから、楽しまなくては。気分を切り替えたユーノは、当たり障りのないアドバイスを口にした。

「ともかく、今はそっとしておくしかないんじゃないかな」

「そう、かなあ……」

なのはは腑に落ちない風に表情を曇らす。

お節介な彼女はどうかやら、何もしないこと——否、何も出来ないことに不安を感じているようだった。

けれど、この問題はいつものように“お話”で解決できることじゃない。結局のところ、フェイトの、フェイトだけの問題なのだから。

ら。

「そうだよ。フェイトだって子どもじゃないんだから、あまりしつこく構っても逆によくないよ」

「うう……でも……」

なおも食い下がるのはが、二の句を継ごうとした時、

——空に、紅い月が浮かんだ。

「えっ？」

「これは……」

建築物は血のように紅く染まり、仄暗い天空には不気味な紅い満月が鎮座する。

突然の異常事態、通行人がどよめいく。

「ただの結界魔法、じゃない？ 空間を浸食するような——こんな魔法、始めてだ」

「外に念話、つながらない。遮断されちゃってるみたいだよ」

知的好奇心を刺激されたのか、やや興奮した様子のユーノと極めて冷静に対応するなのは。

優秀な魔導師である二人は敏感に感じ取っていた。

まるで“常識を犯す”ような違和感を覚えるこの現象が、いかに異常なのかを。

刹那、強大な魔力を前兆として、前方にそびえ立つ高層ビルが爆発炎上した。

頭上で起きた大きな爆発や、降り注ぐ瓦礫に恐怖し、悲鳴を上げ、群衆がパニックに陥った。

「きゃっ」「なのは！」

逃げ惑う人の波に巻き込まれ、さらわれかけたなのはの手を取る
ユーノ。そのまま手を引いて、路地裏に逃げ込む。

「あ、ありがとう、ユーノくん」

「うん」

人混みから離れ、一息。

ふと空を見上げたなのはが、爆炎の中から飛び出したふたつの
影に気がついた。

彼女の位置からでは詳細はわからないが、どうやらどちらも少女
であるらしい。そして、この騒動に何らかの関係がある可能性が濃厚
だ。少なくとも、ビルを爆破したのは彼女らに違いないだろう。

——カチリ。

そんな音を立てて、なのはの中でスイッチが切り替わる。

中学生の高町なのはから、時空管理局の魔導師“高町なのは”へ
と。

「ユーノくん、民間人の避難誘導、お願い」

なのはは、少女らしい柔和な面立ちを戦闘者としてのそれに引き
締め、首にかけた紅い宝石を手取る。

輝く、桜花の光輝。

一瞬にして白いバリアジャケット——機動力重視のヘアグレッサ
ーモード——を纏う。

その手に携えるのは“杖”。

先端は湾曲した黄金色の装飾に抱く紅玉。付け根から延びたノズ
ルや石突きも同じく黄金。取り回しやすい長さの持ち手は、持ち主
の装束と同じく白。

不屈の心、レイジングハート・エクセリオン。

「わかった。……気をつけてね、なのは」

ユーノの言葉に無言で頷くと、なのはは、桜色の三対の翼へアクセルフィンを靴に生み出して、紅い空へと飛び立った。

#2 「Darkness」

紅い天上。

地上で、蟻の子を散らすように逃げまどう人々を尊大に見下す二人の少女。

ひとりは、ほっそりとした肢体を紫色の制服らしき装束で包み、南米の民族衣装を思わせるポンチョを羽織る、なのはたちと同世代に見える人形のような顔立ちの小柄な少女――ベールゼファ―。

大魔王らしく傲岸に腕を組み、眼下の人々へ虫けらを見るような

視線を送っている。ウェーブのかかった美しい銀髪が、紅い光を受けてティアラのように輝いていた。

「リオン、ヤツら（・・・）は？」

もうひとり、整ったスタイルをブルーのゆったりとしたドレスで隠す、十代後半の外見を持つ少女――リオンⅡグンタ。トレードマークである分厚い書物を広げ、読み込んでいる。

俯き加減と、漆黒の前髪で面立ちは見えづらいが、やや眠たそうな半眼と微笑の底は読めない。

「……この月匣内にはもう居ないようですね。任務完了、とでも言いましょうか」

「そう。――ったく、どうしてあたしがこんな害虫駆除みたいなマネしてんのかしら」

リオンの報告を聞き、忌々しそうにベルが吐き捨てる。

「どうしてと言われましても。そのような契約を“彼”と交わしたからではないのですか？ ……こうして人間をついでに取り込んで、ちゃっかりとプラーナも回収するつものくせに」

「……ま、それもそうね」

連れのもつともな指摘に、ベルはあっさり矛を収めた。溜まったストレスを愚痴として吐き出したただけらしい。

「さて、と。じゃあ、プラーナはいたどころかしら」

好物を目の前にした子どものように無邪気に笑い、ベルは両手を突き出した。

獲物は弱き人間たち。気紛れな魔王に命を摘まれる哀れな生け贄だ。

「顕現せよ、万物を消滅させる虚無の世界」

拡大した黒い魔力が、立方体の魔法陣を形成、人々を包み込む。

「ヴァニティーッ!?」

完成寸前だったベルの口上を遮るように、下方から桜色の光芒が迸った。

「……誰よ? あたしの邪魔をする不届き者は?」

発動間際の魔法を丁寧に霧散させ、光を軽く回避したベル。高飛車なセリフを発したその表情は、不愉快そのもの。

「――時空管理局です! その子たち、直ちに魔法の行使を停止して投降を!」

急速に上昇してくる白い装束を纏った少女――なのはに、殺気を込めた鋭い視線を注ぐ。

「なにあれ」

「……さあ?」

顔を見合わせるベルとリオン。魔王にして人外たる彼女らが、ヒトの都合や道理に従うはずもない。

そんなことなど知る由もないのは、二人に向かって言葉を投げかけ続ける。

「あなたたち、この現象についてなにか知っているなら、お話聞かせて」

「……なるほど。大魔王ベル、この人間、“彼”の言っていた高町なのはのようですよ」

お得意の書物から“秘密”を読み取ったりリオンが言う。

名乗ってもいない名前を言い当てられて、びくりと身体を硬直させるなのは。もっとも、彼女とて管理局ではそれなりに名の通った魔導師なのだから、そういう経験もあるのだろうが。

「ふうん、この子が……」

虫けらか塵芥でも見ているかのように凍えきっていた金色の瞳がにわかに興味を帯び、薄く細められた。

新しい玩具を見つけて喜ぶ童女のごとく、ベルはなのはの総身を絡みつくような視線で眺める。

「……っ!？」

妖しく光る金色の瞳。

なのはは、寒気を感じ無意識に身体を震わせた。

彼女の感じた悪寒の正体は、自分の心の奥底を見透かされているような、言い知れぬ強い不快感。“蠅の女王”と渾名されるヒトならざるものの圧倒的な存在感に、白き少女は飲まれていた。

「リオン、あんたは先に帰ってなさい。あたし、この子とちょっと遊んでいくから」

「わかりました。……ですが、お戯れはほどほどに」

「大丈夫、殺しはしないわ。殺しは、ね」

絹糸のごとく柔らかな銀髪を掻き上げ、酷薄な笑顔をこぼすベルに軽く釘を刺すと、リオンは踵を返した。

「あっ！ 待って、まだお話を――」

「あら、まだあたしが居るじゃない。失礼ね」

飛び去るリオンを追い縋ろうとするなのはの進路を阻むベル。ばさりとポンチョがはためく。

「……あなたの名前、聞かせてもらってもいい、かな？」警戒感を露わにしつつも、なのはは自らのスタイルを崩さない。

「ええ。今は気分がいいから、特別に名乗ってあげる」少女の見た目に不釣り合いな人外の色気を纏い、ベルは艶やかに唇を歪める。

「我が名はベールⅡゼファー。あまねく空飛ぶものを統べる、“蠅の女王”」

華奢な痩身から噴出する、地獄の底のような禍々しい魔力。想像を絶する膨大なそれはあまりの高密度に半物質化し、漆黒の炎となつて紅い空を灼く。

「ベール……、ゼファー……」

黒い炎の奥に潜む魔力とは違う強大で異質な力を、漠然とだが感じ取ったなのは、どこか脅えたように“少女”の名前を繰り返す。不屈の心を自称する彼女ですら、ソレ（・・・）と相對することによって本能が抱いた恐怖を隠すことは出来なかった。

無理もない。妖艶に微笑する“蠅の女王”を前にして、畏怖を覚えぬ人間など居はしないのだから。

「覚えておきなさい、高町なのは。今から、あなたを壊す者の名よ」
「……っ!？」

猛烈なプレッシャーを発するのは、理不尽と破壊の権化。
科学の世界に降り立った古き神のひとはしら一柱。

「さあ、一緒に遊びましょう?」

——甘美な声とともに、深淵の闇が、全てを飲み込む“虚無”
が解放された。

2・3

「ふうん。けっこう速いのね」

紅く染め上げられた空にソプラノの声が響く。

突き出した片手から投射した“虚無”の矢——ヘディストーションブラスト」が、高速で飛行する白い影へと迫る。

白い影——なのはは、桜色の翼をはためかせ、それを難なく回避する。その動きはベルの言葉通り、経験と天賦の才に裏打ちされた見事な戦闘機動だった。

「これは犯罪行為だよ、おとなしく停止して！」

「ふん。そんなの、あたしの知ったことじゃないわ」

「誰かを傷つけたりすることは、いけないことなんだよっ!? 私
の話を聞いて！」

言葉が走り、桜色の光条と漆黒の虚無が幾重にも交錯した。

両者はつかず離れずの距離を保ち、幾度となく魔法を撃ちかける。数え切れない爆光が紅い夜闇に爆ぜ、輝き、連なった。

「人間風情が魔王^{あたし}に説教垂れるなんて、いい度胸してるじゃない。それはともかく」

急制動、急加速で砲撃をひらりひらりと躲しながら、優雅に虚無の矢を連続で放っていく。

その間も、銀色の眼は白い魔導師^{まなこ}を捉え、その裡を観察し続けて

いた。魔王の前に虚飾は許されない。“心”を偽る誤魔化しなど通用しない。

「――いい加減、自分を誤魔化すのは止めたらどう？ 高町なのは」

「……なんのこと？」

「ああ、やっぱり気づいてないんだ。……だとしたら、あなたとんだ道化だわ。滑稽ね」

「それって、どういう――」

意味深な言葉で惑わすように、魔王がクスクスと愉しそうに唇を歪める。

意図がわからず困惑する少女を無視して、ベルは眼下の逃げ惑う人々目掛けて光の奔流を何気なく撃ち放った。

着弾した閃光が爆ぜ、大音量と灼熱の炎を撒き散らす。

「なっ、どうして……!？」

突然の凶行に頬をひきつらせたのはが、彼女にして珍しい激怒の感情を込めた視線を、人形じみた容貌の少女へ向けた。

「あーらら、大変。あれで何人の人間が死んだのかしらね。あたし的には全滅だとあたりをつけてるんだけど、あなたどう思う？」

怒気を含んだ眼差しを鼻であしらい、ベルは自らが起こした虐殺をまるで賭け事かゲームのように語る。

あまりの怒りに歯を強く噛み締め、なのはは目の前の“悪魔”を睨んだ。

『――大丈夫だよ。落ち着いて、なのは』
「ユーノくん？」

怒りで我を忘れかけていたのはに、慣れ親しんだ声が念話で届く。同時に、噴煙を斬り裂いて、暖かなグリーンの魔力光で構成された大きな魔法陣が姿を現す。

ベルの放った砲撃を阻んだのは、民族衣装風のバリアジャケットを纏ったユーノであった。

『多重障壁を張って防いだんだ。まあ、ほとんど破られちゃったけどね』

少し自嘲気味にユーノが言う。自慢のバリアを破られたのが悔しかったのだろうか。

「ucci」自らの魔法が防がれたことに小さく舌打ちしたベル。忌々しそうにユーノを見やる。

『下のことは気にせず、なのはなのはの思うように、思いつきり戦って。いつも通り全力全開、でね』

『うんっ』

いつもの調子を取り戻したなのはが柔らかく破顔する。長らく忘れていたユーノがサポートしてくれる有り難みを再認識して。

ふたりのどこかほのぼのとしたやり取りに焦れたベルは、音もなく滑るようにしてなのはに肉薄する。

「ほらほらっ、仲良くお喋りしてる余裕なんてないわよっ！」

掌に形成した直径十センチの黒い球体、ヘヴオーティカルショットを射出する。

桜色の羽を散らしてなのはが急上昇。入れ替わるようにビルに着弾した球体は、いったん消失した後、空間の歪みを創り出し、外壁

を大きく削り取った。

『マスター、この領域にはまだ民間人が多数残っています。大規模な魔法の使用は控えてください』

『うん、わかってる。物理干渉は切ったまままでいくよ』

その破壊の爪痕を視界の隅に置きながら、なのはは相棒と念話で言葉を交わす。

そして、猛スピードで追撃してくる銀髪の少女を眼下に収め、魔力を解き放つ。

「レイジングハート！」

ロードカートリッジ。排出された空葉莢が落下していく。

りん、と涼やかな音が鳴り響き、なのはの足下にミッドチルダ式の魔法陣が閃いた。

「アクセル――、シュートっ！」

彼女の周囲に光のファイアが生成されていく。デバイスを指揮棒のように振りかざし、それに併せて総勢25個の光弾が射出された。光の尾を引き、桜色の魔弾へアクセルシューターが四方から高速でベルに殺到する。

「ふふっ」

魔弾の檻に囲まれたというのに、余裕の態度を崩ずもしないベルは、魔力を発露しそれらを追い払うように片手を薙ぎ払う。

吹き荒れる純粹魔力の暴風。

それを無造作に、何気なく叩き付けられたアクセルシューターは、

何とも呆気なく破裂して爆発した。

「そんなっ!？」

「こんな空っぽ（・・・）な豆鉄砲で、このあたしを捉えられるなんて思わないことね」

自らが信頼する魔法が、いとも容易く破られたことに動揺を隠せない魔導師を、魔王が嘲笑う。

圧倒的優位に立つ者の余裕と、弱者をいたぶる嗜虐心。慢心、油断、侮りとも取れるそれはしかし、大魔王を名乗るに相応しい絶対強者にしか許されない風格だ。

「っ、だったら!」

後方に下がrittつ、なのははへバスターモードへに変形したレイジングハートを射撃体制で構える。穂先の下部の機構が二回コッキング、空薬莖を同じ数だけ吐き出す。

収束する魔力。広がる魔法陣。震える大気。

なのはの発露した魔力の量に「人間にしては結構やるじゃない」とベルは感想をこぼした。

そして、小悪魔的な表情で両手を頭上に掲げる。

溢れ出す魔力。高速で構築される術式。鳴動する空。

そこから繰り出されるのは彼女たち（・・・）の代名詞――

「デイベイイイインッ!」

「デिवヴァイン!」

なのはとベル、異音同意の言葉を紡ぐ。

「バスターアアアーーッッ!」

「コロナッ!!」

桜の魔法陣を纏う、金色の穂先から放たれた桜色の砲撃。
紅い三連魔法陣から生まれた、黄金に輝く大光球。

ふたつの魔法が、ふたりの間で激突した。

光球を押し止めるように、曲線に沿って桜色の光が迸る。

正面からの真っ向勝負。

圧迫感に表情を歪ませるなのはと対照的に、ベルは余裕を滲ませ、微笑まで浮かべていた。

拮抗はほんの数秒。

「なっ!？」

「ヘイバインバスター」の光条を押し切ったヘイヴアインコロナデイヴァインコロナの光球が炸裂する。

極大閃光魔法の直撃を受けた少女の悲鳴は、灼熱の閃光に飲み込まれ、紅の空に絢爛なる大輪の花が咲き誇った。

「だから言ったでしょう？ 空っぽ（・・・）な魔法じゃあたしには届かない。ま、術式自体はそう悪くはなかったけど」

もうもうと残る爆炎を呆れたように眺めるベルは、煙の中に桜色の光を見つけた。

「あら、今で墜ちたと思ったのにずいぶんと頑丈なのね。……声だけじゃなく、そんなところまであの子と似てるなんて、ますますもって虐めたくなってきたわ」

とっさに障壁を張り巡らし、落ちたる太陽の輝きを辛くも防いだのは。しかし、鉄壁を誇る彼女の魔法障壁をもってしても、ディ

ヴァインコロナが内封する大魔力と大熱量には耐えきれなかったのか、バリアジャケットの所々が焼け焦げている。

その表情は多大なダメージの苦痛に歪み、険しい。

「レイジングハート……物理干渉、オンにして」

『しかし、それでは――』

「あの子の魔法と撃ち合うには、それしかないよ」

そう言っ、なのはは相棒の意見を制した。

ベルの魔法に撃ち負けたのは、“非殺傷設定”――魔力ダメージによる昏倒・制圧を目的とした一種のリミッターが原因だと、歴戦の武装隊員であるなのはの経験が告げていた。故の命令。

『……』

「レイジングハート、お願い」

レイジングハートの優秀な人工知能が、主の判断がもっとも合理的だと肯定する。それと同時に、なのはとともに歩んだ時間で培った感情と呼べる“何か”が、一抹の不安を感じていた。

『……Yes my master。火器管制、物理干渉オン』

だが、デバイスである“彼女”が主の指示を拒否する意志など元よりない。

一拍、間を置いて、レイジングハートが非殺傷設定から物理干渉――言うなれば、殺傷設定へと切り替わる。

「へえ……やっ、と、本気で遊んでくれる気になったのね。うれしいわ」

「こんなの遊びじゃない。ただの暴力、悪いことだよ」

「あら、お遊戯じゃない。殺す覚悟も死ぬ覚悟もなく、分不相応な力を手に入れて粹がってる小娘^{あなた}にはお誂え向きのゲームだと思うけど？」

「そんな覚悟、私はいらないっ！」

なのはが強く叫び、やれやれと魔王が肩をすくめた。

「だからダメなのよ。あたしにはわかるわ、あなたの矛盾が、あなたの歪みが……あなたの抱えた“闇”が手に取るように。

ふふっ、あなたみたいに変んだコ、あたし、けっこう好きなのよ？
かわいらしくって……グチャグチャに壊したくなる」

艶やかに、妖しく。

ベルは嫣然と腕を組み、なのはの心を抉り出そうと言葉を次々に弄する。

心に染み渡り、纏わりつき、深みに誘う蠱惑的な甘い響きの声音——それはまさに、数々の伝承に名を残す人間をたぶらかし、闇に落とす闇の呼び声。

「そんなこと、知らない！ ベルちゃん、覚悟して。私なりのやり方で、お話を聞いてもらうから！」

決然と宣言し、なのははレイジングハートの穂先を一瞬だけむっとした美しき魔王へと突きつけた。

* * *

桜と黒、二条の光が激突と交錯を繰り返しながら徐々に遠方へと離れていく。

被害が出ないようになのはが誘導しているのだろう。

地下シエルターの入り口に並んだ列はもう数人で終わりそうだとユーノは胸をなで下ろした。

「よし。これで、この辺りは大丈夫かな」

避難誘導が速やかに進んだ。

ひと月にあるかないかの頻度でしかないが、管理局魔導師と犯罪者の魔法戦闘が市街地で起きることがある。そのため、クラナガン市民は比較的こういった非常事態に慣れていた。

各施設には避難設備が整備され、魔法的物理的に強い堅牢なシエルターが都市の至る所設置されているのも幸いだ。

もちろん、ユーノ自身の優れた補助能力もその一因だろうが。

「あ、あの……っ」

住民な避難が終了次第、なのはの援護へ向かおうと思案していたユーノにかけられた声。

怪訝に思い、振り向く。

声の主は身なりのいい、二十代後半くらいの女性。顔面蒼白といった様子で、心底慌てているようだった。

「どうしたんですか、何か問題でも？」

「その、娘が、娘が……っ」

嗚咽のように途切れ途切れな言葉は要領を得ない。錯綜している思考の糸を何とか繋ぎ止めて、何とか彼女は言葉を続けた。

「この騒ぎで、娘とはぐれてしまって……。どうか、探してもらえないでしょうか。お願い、します」

涙混じりに必死で懇願する女性を、ユーノは錯乱している相手を安心させるように、努めてやさしい声色で質問する。

「お子さんの姿を最後に見たのはどこですか？」

「その建物の、一階です……」

女性が示したのは目と鼻の先にそびえ立つ高層建築物。

この一帯のランドマークとしてつい最近オープンしたばかりのスポットで、下層にショッピングモールやレストラン街、上層に社長のオフィスなどが入っている一大複合施設だった。

「わかりました。後のことは僕に任せて、あなたはシェルターに避難しててください。……大丈夫、必ず見つけ出しますから」

お願いします、と何度も頭を下げる女性をシェルターへと促した後、ユーノは踵を返して、コンクリートでできた巨大な塔へと駆けて行った。

降り注ぐ怒濤のごとき火線の間隙を、ベルは縫うようにしてすり抜けていく。

余裕をにじませた表情でぐんぐんと速度を上げ、砲火の弾幕を作り出すのはへと急速に迫った。

天空に羽撃くモノ全ての支配者たるベルにとって、空はホームグラウンド——自らの領土だ。神の座から墜ち、魔王として恐れられるようになった今でもそれは何ら変わることはない。

大空の女王たる自分が、たかが人間の小娘に負けるわけがない。そう言わんばかりに膨大な魔力と武力を惜しげもなく披露する。

「っ……！」

「さっきの威勢はどこに行ったの？ さあ、もつとあたしを楽しませなさい、よっ！」

挑発の言葉を吐いたベルは、舞踏を踏むような機動の合間に漆黒の矢を撃ち放ち、距離を取ろうと後退するなのはを執拗に攻め立てる。

その冷静で老獪な攻勢は、なのはの体力と精神を少しずつ、だが確実に削り取っていく。

疲労は僅かな綻びを生み、綻びは小さな隙となり、隙は大きな致命傷を呼び寄せる。

牽制の魔法を回避させられて（……）体勢を崩したなのは目掛けて、先読みで放たれていた虚無の矢へディストーションブラストが真っ直ぐな軌跡を残して飛翔。反射的に展開された全方位

型障壁へオーバルプロテクションに突き刺さると、八つに飛散して、巨大な空間のうねりを生み出した。

「う、あぁうっ」

膨れ上がる空間の歪みの内部で、なのはが苦痛の声を漏らした。幾重にもねじ曲げられた歪曲空間の影響は障壁をものともせず、ギリギリと全身が悲鳴を上げる。

ややあつて、終息した歪みから抜け出したなのはは、ただ、と内心で歯噛みした。

魔力を注ぎ込んだ強固な障壁を張り巡らしているというのに、撃ちかけられる漆黒の魔法はそれを嘲笑うかのようなのはの身体を徐々に蝕む。

自らの防御能力に絶対の自信を持つのはにとって、長年貫き続けていたスタイル——その崩壊は精神に強い焦りの感情をもたらしていた。

負の力にて、空間そのものを操作する〈虚〉の魔法の前では、魔法的な耐性などはほとんど意味を成さない。バリアなどの障壁魔法で辛うじて軽減出来るものの、鉄壁の防御で相手の攻撃を受け止めて戦うのはには、あまりに相性の悪い攻撃手段である。

仮に、“もう一つのモード”を使用したとしても、ベルのスピードに翻弄され、防御の上から体力を削り取られてただ闇雲に殴り殺しにされるだけだ。

それをわかつているだけに、あまり得意とは言えない回避重視の戦法を取りざるを得ない。

しかし、最適と思えたその手は、言い換えれば砲撃と防御のパターンを崩され、動揺した彼女の消極的な心が生み出した逃げの一手。接近されることを嫌うあまり単調になった砲撃など、いくら撃ってもベルには障害にもならない。

「ざーんねん。鬼ごつこの鬼はちゃんと逃げなきゃ、ね？」

金色の光——“プラーナ”を限界近くまで解放して得た神速で、瞬く間になのはの懷に飛び込み、ベルは胸元に結ばれた赤いリボンにとんと右手を当てる。

(しまっ)

ぐつと一瞬だけ力を込めて、ベルは囁くように術式を発動した。

「——ヴァニティワールド」

ゼロ距離で解放された漆黒の力。

ベルの右手を起点にして、虚無の力が放射状に広がり、立方体状の魔法陣を形成。なのはごと空間を包み込んだ立方体の魔法陣は、人には聞こえない高周波のノイズを放って全てを喰らい尽くす。

〈ヴァニティワールド〉。立体魔法陣の内部に取り込んだ全てを等しく無に帰す、虚属性の最上級魔法である。

リオンに言った通り、殺さない程度には手加減していたが、その威力は絶大にして無比。“万物を消滅させる虚無の世界”の名に相応しい、破滅の力がなのはに襲いかかる。

「きゃああああっ!!」

悲鳴を上げながら、白の魔導師が紅く染まった摩天楼へと墜ちていく。

そのままとあるビルの上上に墜落。コンクリートを砕いて出来た小さなクレーターの中心から、砂煙がもうもうと立ち昇る。

「く……っ」

震える身体を叱咤して、なのははレイジングハートを支えに何とか立ち上がる。純白のバリアジャケットは見るも無惨に損傷し、口元からこぼれた紅い血が筋を作っていた。

そんななのはの目の前に、ふわりとポンチョをはためかせ、ベルが悠然と降り立つ。

「あなた、力の使い方ってものが全然なっていないわね。自分の力を過信して、得意な距離、得意な戦い方にこだわすぎよ。……どうしてこう、馬鹿魔力の持ち主ってのは揃いも揃って馬鹿ばかりなのかしら」

こめかみに指を当て、頭痛を感じているかのような仕草をして、ベルがどこぞの誰かを引き合いになのはを当て擦る。

「そんな、魔力を、持つてる……あなたに、だけは……言われたくない、よ」

「ふん、言うじゃないの」

ダメージの色濃い身体で、なのはが苦し紛れに当て付け返す。

「ま、いいわ。完全なる敗北と、絶対なる絶望の味を心行くまでたっぷりと教えてあげるから、ありがたく思いなさい」

漆黒の陽炎を巻き上がる。

ふわりと浮遊したベルの突き出した右手に黒い輝きが瞬いた。

＊ ＊ ＊

なのはがベルに追い込まれていたその頃、ユーノははぐれてしま

った少女を探してショッピングモールの廊下を走っていた。
サーチャーを散布し、特定した地点へと奔走する。

「はあ、はあ、はあ……っ。これは、もう少し、運動した方がいいかな……」

最近、仕事がデスクワーク主体だったユーノの運動不足は致命的。久々の全力疾走に痛みを訴えるわき腹を押さえてぼやく。

そんな自分が情けないと自省しつつ、曲がり角を抜ける。

「ぐすっ、ママあ……ママあ……」

少し先、一面ガラス張りの大きな窓のある廊下の床に、ぺたりとへたり込み、ぐずぐずと泣いている十歳前後の少女が見えた。

赤みがかった髪をピッグテールに結ったその少女に、初めて出会ったころのなのはの姿がだぶる。そんな益体もないことを脳裏に浮かべながら、ユーノは少女に駆け寄った。

「大丈夫？ 怪我はない？」

突然声をかけられて驚き、びっくりと肩を揺らした少女は、涙をためた黒目がちな瞳で恐る恐るユーノを見上げる。

「ううっ……ひっぐ、おにーちゃん、だあれ？」

「君のママに頼まれて、代わりに君を迎えにきたんだ。もう大丈夫、一緒にママのところに行こう」

その言葉に、少し間を置いて――おそらく、幼いなりにいろいろと考えたのだろう――、こくりと頷いた少女に、ユーノはやさしく笑いかけた。

＊ ＊ ＊

大きすぎる慢心が災いしたのか、ベルは遅延型のバインドに引っかかり、空中に張り付けにされていた。

「くっ、しまったっ!？」

「全力全開!　スターライトッ!!」

桜色の拘束具に四肢を捕らわれ焦りの表情でもがく銀髪の少女（人外）へ、なのははこの隙を逃しはしまいと金色の切っ先を突きつける。

撃ち放つのは、渾身の一撃——「スターライトブレイカー」。

きゅんと軽快な音を立てて、無数の“星”が環状魔法陣を展開するレイジングハートの先に集い、集った“星”が収束して、巨大な光となった。

直径50メートルはあろうかという桜色の光輝を前にして、ベルは驚愕で表情を染め——

「——な——んて、ねっ!」

一転、薄ら笑いを浮かべた魔王の瘦身から金色の光が勢いよく吹き出す。

その圧力に耐えきれず、ぱりんっ、とガラスが割れたような甲高い音を立てて桜色の光が粉々に碎け散った。

有り余る魔力と“プラーナ”で、力任せにバインドを破壊したベルは、ひらりと身を踊らせて巨砲の射線から離脱する。

「ブレイ————え?」

発射態勢に入っていたなのはは啞然として、目を見開く。

臨界点を越えた大量の魔力は、対象を見失ったとしても留めることなどではしない。

放射された桜色の巨大な魔力の塊は、ベルが捕らわれていた位置を通り、遙か後方にそびえ立つ40階建ての高層ビルに向けて一直線に走っていった。

＊ ＊ ＊

少女を連れ、転送魔法でここを離れる準備していたユーノは、ふと視線を窓の外にやる。

「ッ！！」

そこにあっただのは、紅い空の下、遠方からとても馴染み深い見慣れた色をした光の柱が、ユーノたちが居るビルへと直撃コースを取って突き進んでくる光景。

その極太の光に込められた膨大な魔力に、ユーノの背筋が凍りつく。

（なのはのスターライトブレイカー！？ 転送——ダメだ、間に合わない！！）

足下には、きよとした顔をして見上げてくるいたいけな女の子。

出逢った頃の想い人の姿が重なって、ユーノの目の前が真っ赤に染まる。

「くそっ！！」

転送魔法を即座に破棄して跪くと、少女の頭を抱え込み、限界まで魔力を注ぎ込んだ最大強度の多重障壁を張り巡らす。

刹那、世界そのものが揺れるような甚大な衝撃波が彼らを襲う。極大砲撃の余波で、多重障壁は簡単に碎けて。

中層階は消し飛び、支えを失った上層部が一気に崩落を開始する。重みに耐えられなくなった鉄筋や、コンクリートが雪崩のように降り注ぎ、緑の防御膜の中で身を縮めるユーノの視界を覆った。

＊ ＊ ＊

「あーらら、崩れちゃった」

崩れた巨大な塔を見やり、ベルが愉しそうにクスクスと嗤う。

そして、その軽薄な態度が不愉快なのか、顔をしかめるのはへと艶美な眼差しを向ける。

「あんなに派手に壊れて、人間が中にいたらどうなったのかしらね？」

「それって……」

「猪武者じゃないんだから、少しは自分の頭で考えたらあ？」

遠回しな物言いを訝しむなのはに、ベルは馬鹿にしたような猫なで声で促す。

『マスター！』

「っ！」

レイジングハートの短い警告から事態を理解させられたのはは、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべるベルを半ば無視して、弾かれたように飛び出した。

目的地は目と鼻の先。

コンクリートや鉄筋、その他いろいろな物が積み上がった瓦礫の山。微弱な生命反応を――いや、幼い女の子の泣き声を頼りにしてなのはは辿り着いた。

「ユ一、ノ……くん？」

祠のように積み重なった瓦礫の下から、紅いナニカが足下に広がっている。

引き寄せられるように歩を進めると、紅いナニカがぴちやりぴちやりと跳ね、なのはの白い靴を汚す。立ち止まった靴のつま先に、ひび割れたノンフレームの眼鏡がぶつかった。

「どう、して……こんな……」

「あなたがやったのよ」

地面に突き立つ、五メートルほどのコンクリートの破片に腰掛けたベル。すらりとした細い脚を組み、冷たく光る金色の双眸で茫然自失した少女を見下ろす。

「わたっ、私は……！」

「言ったでしょう？ あなたは分不相応な力に振り回されるだけの、ただの粹がった小娘だって」

「ちがつ、ちがう！」

「違うわい。ほら、見てみなさい」

瓦礫の奥、影になっていたところに紅い月の光が射し込む。

真っ赤な血液を止めどなく垂れ流す数年来の親友――そして、彼の血で汚れ、恐怖に泣き喚く小さな女の子がいた。

流血した彼の姿と、痛々しい少女の泣き声がなのはの心を深く突

き刺し、容赦なく決る。

「あ、あ……ああ、ああああ!？」

「クスッ、好い顔。……ねえ？ わかったでしょう？ それ（・・）は、あなたが傷つけたの。あなたの力で——あなたのその手で、ね」

なのはレイジングハートを強く抱き抱え、膝から血溜まりに崩れ落ちる。

「い、や……ちがう、ちがうの……私、そんなつもりじゃ……うそ、だって、こんな、こんなの知らない、知らないよ……。私……、わたし——」

血の気が失せた青白い顔で長い髪を振り乱し、脈絡のない言葉を壊れたラジオのように繰り返す。虚ろな青紫の瞳からは、輝きが失われていた。

「フフッ、案外楽しいゲームだったわ。機会があつたらまた遊びましょう？ ……もつとも、あなたが“ソコ”から這い上がったならの話だけど。……じゃあね——アハッ、アハハハハハッ!!」

紅い闇の中に溶けていく嘲笑だけが、色褪せ始めた紅い世界と崩れていくなのはの心に、残された。

3 - 1

本局ステーションに停泊中のアースラ、艦長室。

私の目の前、大きなデスクを挟んで革張りの高級そうなイスに深く腰掛けているのは、この部屋の主——クロノ・ハラオウン。

私の義理のお兄ちゃん、直属の上司。……昔と比べて、ちゃんと年上に見えるようになったな、と私が密かに思っているのはここだけのヒミツだ。

「兄さん、話ってなに？」

「まずはこれを見てくれ」

クロノが差し出したのは一冊のファイル。厚さはだいたい30センチくらい、資料とかをまとめたりするやつだ。

“特秘”とだけ題されたそれを手にとり、何気なく開いてみる。そこには――

「っ……!!」

なにかに食いちぎられたような惨殺死体の写真と、検視についての報告文。路地一面に広がった血液とか、バラバラに散らばったナカミ(・・・)の写った写真のあまり惨さたらしさに、一瞬吐き気を覚えてしまった。

執務官をやっていたら、人殺しの現場に出くわすことだってある。管理世界・管理外世界を問わず、魔法やロストログアを悪用する人は後を絶たないし、それを取り締まるのが管理局の仕事の一つだから。

ら。

当然、その中には快樂殺人を犯すような重犯罪者なども含まれていて、実際に私も何人か逮捕したことがある。なかなか手強かった。管理局の花形として華やかに思われがちな執務官という役職だけど、実際はすごくハードな仕事——というか、世間の“キタナイ”面を見ることが多い。

もちろん、ロストログアの探索だとかの“キレイ”な仕事だけをやり続けることもできるのだろう。でも、私はそれを良しとはしなかった。だって私は、「無様でも足掻き続けなきゃいけない」んだから、そんな弱気なことできっこない。

昔、初めてヒトの遺体を見たときは盛大に戻しちゃって、母さんたちに心配されたものだ。「無理はしないでいいのよ」とか「やっぱり他の事件を回そうか」とか。私は、それじゃ管理局にいる意味がないって反発して、変にえり好みせずいろいろな案件を担当させてもらっている。おかげでけっこう危ない目にもあったけど、どうにかこうして無事でいられてるから結果オーライだ。

閑話休題。

私の情けない過去はとりあえず置いて、そんなわけで私はこういうものに慣れてるつもりだった。

——でも、これは、ちよつと……

「この資料って、いったいなんなの？」

問いかけると、クロノは渋顔を作る。

「半年ほど前から次元世界全域に渡って頻発している、無差別連続殺傷事件……その捜査資料の一部だ」

「……そっか。それで最近、本局とか地上本部が騒がしいんだね。私に見せたってことはこの事件、アースラが担当？」

「いや、そうじゃない。ただ、この件に以前、フェイトが遭遇した

と言っていた濃紺色のバリアジャケットの男が関わっている可能性が出てきたんだ」

どきり——、心臓が高鳴る。

ここ数日、頭の片隅でずっと考え続けていた、どうしても気になつてしかたがない、名前も知らない蒼い男の子。

あの大火災のあと、“彼”と“ヒトガタ”のことは報告書にまとめて提出していた。

黙っているわけにもいかないし、二重の意味でなにかわかるかもしれないと思つたからだ。

幸い、バルディッシュのレコーダーに交戦記録が残っていたからよかったけど、普通だったらあんなもの信じられるわけがないと思う。

「現場で何度かその男の姿が目撃されていてね。局員とも交戦したらしいが、かなりの使い手だって話だ。もっとも、どこの誰かはまだわかっていないが」

「……………」

私は、不意に出た“彼”の話題に起きた内心の動揺を押し隠して、手元の資料に視線を落とす。

「えっと、場所は……第22管理世界？　ここ、治安、かなりいいところだよな。こういう事件って起きなさそうところなのに」
「そうだな。そこ以外にもいくつかの管理世界、管理外世界で似たような事例が報告されてる。……上の方も本腰を入れて捜査するつもりらしいな」

ようやくだが、と不満そうな表情で皮肉混じりに言葉を切る。
兄さんは、常々管理局の動きの重さに不満を感じているみたい。

たまの家族揃った団欒の時間にまでグチグチ言い出して、お母さんにすごい笑顔で叱られてたな。

時空管理局ぐらいの巨大な組織になれば、その巨体に見合って動きはとても鈍い。——正直、管理局の体制は限界にきているんじゃないかと思う。

慢性的な人材不足、なくならない次元犯罪、本局と地上部隊との軋轢——現場で働いていてひしひしと感じる閉塞感……破綻の足音。だけど、いまさら立ち止まることはできない——私は戦う以外に、生きる方法を知らないから。

「……フェイト、そんなにまじまじと見るくらいなるならその資料、持って行ってもいいぞ」

報告文を読んでいると、兄さんが呆れたような言葉をもらした。私、そんなにまじまじと見てたのだろうか？

「いいの？」

「かまわないよ。どうせそのつもりで用意したコピーだからね。あ、でも、あまり人には見せないように」

「うん、わかってる。内容が内容だしね」

特になのはとかには見せられないかな。……なのは、こういうスプラッターなのって見慣れてないだろうし。

そういえば、今日はなのは、お休みだって言ってたっけ。いくつが残ってた書類を仕上げたかったから、お買い物の誘いは断っちゃったんだけど。

『クロノくん、フェイトちゃん！』

突然、アースラのメインオペレーター——エイミィのひどくあわ

てた声が艦長室に響いた。

このパターン、なんだかすごくいやな感じだ。

『なのはちゃんとユーノ君が大変なのっ！ 急いでブリッジに上がって来て！』

ああやっぱり……。そう、どこか冷静な私がつぶやいた。

#3 「FLY INTO THE NIGHT」

首都クラナガン。

管理局傘下の市内最大級の規模を誇る総合病院にて。

報告を聞いて本局から飛んできた私は、手術中のランプが点灯した集中治療室（ICU）の前のベンチで、力なくうなだれる無二の親友の姿に言葉を失った。

「な、なのは……？」

近づいて、おそろおそろ声をかける。

「フェイト、ちゃん……」

ゆっくりと顔を上げたなのはの面もちに、さらに絶句。

つぶらで黒目がちなアメジストの瞳を真っ赤に泣きはらし、瞳孔は濁ったように焦点が合っていない。そして表情は曇りきっていて、いつものひまわりのような笑顔はどこにもなかった。

「ユーノくんが……、ユーノくんが……」

経緯は大まかだけどここに来る途中で聞いてるから、なにも言わない。なにも聞かない。

「わたし、私が――」

「……なのは」

「違う、違うの。そんなつもりじゃなくて……私はただ、負けたくなくてっ！　だけど……だけど……っ！！」

震える自分の肩をぎゅっと抱きしめ、なのはは誰に言うわけでもなく独白する。うつむき加減で垂れ下がった前髪が濁った瞳を隠していた。

「なのはっ！」

完全に錯乱して、放っておいたらどうにかなってしまいそうな親友を強く抱きしめる。

腕の中で震える身体が小さく思えて。――なのはって、こんなに

弱々しかったんだ。

……でも、当然か。なのはほんとに魔法なんて無縁の、女の子だったんだから。

戦いとはなんの関わりもない、どこにでもいるような普通の女の子だったのに、いつの間にかそれしかできなくなってる。そして、身も心もボロボロになるまで戦って――

「う……、うう、あ――、あああああ……」

声を張り上げ、子どもみたいに泣きじゃくるなのはに、私はただ無言で、胸を貸してあげることしかできなかった。

* * *

ちょうど本局に用事があって来ていたというはやてが合流して、二人で廊下のベンチに並んで座る。……なのはひどく錯乱してたから、鎮静剤を打ってもらってすぐそばの空き病室で眠ってる。

ユーノが命がけで守った女の子が、無事にお母さんのもとに帰れたのは幸いか。

「……なのはさんも、ユーノさんも、心配です」

「せやね……」

膝の上で不安そうに見上げているエルフィの髪を、はやては優しく撫でる。その表情は、どんよりと曇っていた。

でもきつと、私だってはやてと同じような顔をしているに違いない。

「ユーノの容体、どうなの？」

「意識不明の重体やて。シャルと主治医さんの見立てやと、今夜

あたりが峠やそうや」

手術は少し前に終わってるけど、まだ面会謝絶で予断を許さない。はやての護衛で付き添っていたシャルは、ユーノの治療に当たってくれている。

「はあ……。これで私ら、三人揃って仲良く札付きやな」

「はやて、不謹慎だよ。冗談でもそんなこと言わないで」

「ごめん。あんななのはちゃん見とったら、なんや調子狂ってしもて」

「それは、そうだね……」

あんな壊れてしまいそうなのはの姿を見たのは初めてだ。

三年前、大けがしたときだってあれほどひどくはなかった。当時執務官資格取得の試験を控えていた私は、あんまりなのはが冷静だから逆に動揺してしまったくらいだ。

ふと、思う。“あのひと”の事件のときの私も、そうだったのかな、って。

「なのは、どうなるんだろう。処分、ただじゃすまないよね」

「まあ、変に甘いとこのある管理局やし、正当防衛の上での事故ってことでお茶濁して、降格と謹慎……悪ければ、教導隊からの不名誉除隊もありえるやろな」

はやてがため息混じりに考察を披露する。

たしかに、実際の戦闘の様子は見てない——レイジングハートは検分のために回収されてる——から詳しいことはわからない。

だけど、あの（・・）なのはが殺傷設定を使われるまで追い込まれたっていうのは、情状酌量の材料になるだろう。

でも、それって……、

「ちょっと、軽すぎない？」

思ったことを素直に口に出すと、はやてがぼかんとした顔で私を見返した。

「なに？」

「いやあ、フェイトちゃんの口からそんなセリフが出るとは思わへんかったから。フェイトちゃんて、なのはちゃんのこと、全肯定やないん？」

それはすごく心外だ。はやては私のこと、なんだと思ってるんだろう。

親友だからこそ、いさめなきゃいけないことだってある。なのはが大けがしたとき、自分のことにいっぱいいいっぱいで気づいてあげられなかったのは苦い記憶だ。

「……私だってこんなこと言いたくないよ。だけど、罪には罰――、それって、私たちが一番よく知ってることじゃない？」

時には間違いだと面と向かって言ってあげるのも、やさしさだと思うから。

大好きな人に嫌われるのはいやだけど、大好きな人が間違うのはもっといやだから。

もう、失いたくないから――

「たしかに。まったくもって否定できひんわ」

同意して、はやてが自嘲気味に笑った。

私は知ってる。はやてが今も“闇の書”の被害者の人たちのところ

ろへ、頭を下げて回っているってことを。

はやてはむしろ被害者側なのに、「家族のやったことやから。私が責任とらなあかんのや」と気にした素振りも見せない。

昔から、はやては強い。芯がしっかりしているというか、したたかというか。しなやかで、折れない毅さがある。

そういうところ、見習いたいなと思う。

——私は、どうなのだろう。

“あのひと”の遺した技術——人造魔導師、クローンの違法製造については気にかけているけど、不思議とそれほど強いこだわりも感じない。

というか、目の前のことにいっぱいいでそんな余裕、今の私にはないっていうのが本音のところだ。

……ああ、そうだ。前に、違法な研究施設を調査したときに保護したあの子は元気にしてるだろうか。最近は忙しくて顔を出していないから、ちょっと心配だ。

余裕ができたら行ってみようかな——って、それがないんだった。

「はあ……」

「ため息つくと幸せが逃げるよ、フェイトちゃん」

なのはこのこと。

なのとは戦った誰かのこと。

兄さんから聞いた事件のこと。

……そして、“彼”のこと。

わからないことだらけで、濃い霧が立ちこめたように見えない真実に、私は思わずため息をもらした。

青い間接照明で照らされた、薄暗いアースラのミーティングルーム。

長いテーブルにつくのは私や兄さん、エイミーなどのアースラの主要人員と、それから、はやても。本来は別部署に所属してる彼女がいるのは、今回の議題の関係者というだけじゃなく、なんでも私と兄さんに相談したいことがあるんだとか。

……ところで。

前々から思っていたんだけど、どうしてここってこんなに薄暗いんだろう？ 目が悪くなっちゃうんじゃないかな。

「みんなもう聞いてると思うが……なのはの処分が決まったそうだ」

私を始めとして、みんな一様に沈痛な面もちになる。

結局、なのはの処分はおおむねはやての予想通りだった。違うのは、除隊じゃないのと無期限謹慎なだけ。

除隊処分じゃなかったのは、きつと管理局の慢性的な人員不足のせいだろう。その本音を隠すための無期限謹慎、なのかな。

もっとも、渦中のなのははまだ取り乱しててそれどころじゃない様子だったけれど。

「それで、その時の交戦記録が回ってきた。なのははアースラの関係者みたいなものだから、上も気を使ってくれたんだろうな。――エイミー」

「うん。ちょっと待ってね」

兄さんの指示を受けて、エイミーが目の前のコンソールを叩くと、テーブルの中心に備え付けられたプロジェクターが作動して、半透明なスクリーンが展開。

「……………」

レイジングハートのAIから抽出された戦闘記録がスクリーンに映り出される。

なのはと激闘を繰り広げているのは、見た目、私たちと同年か少し年下くらいの女の子。ウェーブのかかったきれいな銀髪と、人形のように整った面立ち、そして、らんらんと光る小悪魔的な金色の瞳はともかわいらしいけど、同時にどこか作り物めいててなんだか怖い。着ているのは紫の……制服、だろうか。

……。

この子と戦って、私は勝つことができるだろうか。機動力はたぶん上、魔法の火力では負けてそう。近接戦は……だめだ、映像だけじゃ判断できない。

「この魔法、なんや見たことある気がするな」

はやてがぼつりともらす。

なのはのデイベインバスター——このときはまだ非殺傷だったみたいだ——を、いとも簡単に押し返した小さな太陽。ミッドのともベルカのとも違う、未確認の術式で構成された未知の魔法。

その金色の輝きに、私ははやてと同じく強い既視感を覚えた。すごく懐かしいような、でもぜんぜん違うような、不思議な感覚。

このカンジ、どこかで……。

「——だな」

「そうだね。フェイトちゃんはどう思う？」

「えっ？」

既視感に戸惑い、もやもやしてはつきりしない記憶の底をさまよっていた私の意識は、名前を呼ばれたことで現実に戻される。顔を上げると、私を呼んだエイミィをはじめ、この場にいたみんなの視線を一斉に集めてしまっていた。

どうしよう。考えるのに夢中でなんにも聞いてないや。

たらりと額に汗が流れる。

「えっ、と……ごめん、聞いてなかった。もう一度おねがい」

とりあえず、素直にあやまった。

しょうがないなあ、と苦笑いするエイミィに、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「アースラのエースに、この映像を見た感想を聞かせてほしいな」と。で、どうなの？」

「うーん……魔法についてはたぶんみんなと同じ見解。この子の口振りからなのはのこと、あらかじめ知ってた感じかな。遭遇したのは偶然みたいだけど。——あと、これはただのカンなんだけど……シグナムたちみたいに、見た目通りの年齢じゃないかもしれない」

まどっている独特な雰囲気とか、コケティッシュな仕草とか、やけに洗練されてる戦い方とかはどう見ても同世代には思えない。まだ、ヴォルケンリッターのようなプログラム体だって方が納得できる。

「なるほど。確かに、この少女——ベールゼファーからは、戦闘能力にしてもそうだが、何というか……言葉にしがたい異質な印象

を受けるな」

「連れの黒い髪の子は「大魔王ベル」って呼んでたよね。通り名にしてはかなり仰々しいけど、なんかそれっぽい感じするかも」

私の考えに賛同して、兄さんとエイミィがそれぞれ意見を出し合うけど、それはあくまで推論で。彼女たちの目的や、素性をはつきりとさせるような決め手にはならない。情報が足りなすぎる。

「未確認の術式を用い、Sランクの空戦魔導師を空で圧倒する戦力の“魔王”、か。……現時点ではこれ以上はわからないな。とはいえ、実際に破壊活動を行っている以上、放置している訳にもいかない」

少しくたびれたような声色で言葉を切る兄さん。今回の件で、いろいろと奔走してるから疲れてるのな。

でも、兄さんの言うとおり、わからないからと言って、このまま手をこまねいているなんてこと、できない。

冷静に見えるかもしれないけど、私だって、なのはがひどい目に遭わされて頭に来てるから。

心は熱く、頭はクールに、だ。

「……ちよつと、ええかな？」

ひじを突き、組んだ手で口元を隠すという、ちよつと悪役チックなポーズ——なんだかそれがすごく似合ってる——で、じっと沈黙していたはやてが、口を挟む。

私たちの視線を引きつけたあと、もったいぶったようにはやては続きの言葉を紡ぎ出した。

「私——、ちよつと心当たりがあんねん」

＊ ＊ ＊

「ごめんなさい、お買い物につきあわせちゃって」

地球。

水平線に沈みゆく太陽に照らされた商店街。オレンジ色の光を受けて延びる三人と一匹の影。

食材の詰まった買い物かごを小脇に下げたエリスが傍らを歩く、桃色の髪をポニーテールにした長身の女性と、赤い髪をおさげにした十代前後に見える少女に恐縮した様子で言葉をかけた。

なお、エリスの服装は若草色のエプロンドレス——いわゆる、メイド服——（本場英国式）だ。

この服は、特殊部隊グリーンティーの制服で、一流のウィザードが一本一本に魔力を編み込んだ糸を丹念に編み込んで作り上げられたオーダーメイドの特注品である。その高い対魔力たるや凄まじく、魔法的な加護を失ったエリスにはお誂え向きな一品と言えるだろう。とはいえ、どう見ても普通の商店街にはそぐわない格好なのだが、そこはファー・ジ・アースの秋葉原に並ぶ人外魔境海鳴市、驚くほどメイド服が風景に馴染んでいた。

「いや、いい。我らは主はやてからお前の護衛を任されているのだしな」

長身の女性——シグナムが、以前よりもいくらか柔らかくなった面差しを客分の少女に注ぐ。

「そーそー、細かいことは気にすんなくて。エリスの作った料理、けっこううめーし。まあ、はやてほどじゃねーけどな」

早速、餌付け……もとい、手製のお菓子を振る舞って仲良くなった、おさげの少女——ヴィータがシグナムに同意する。はやてと比較した評価は彼女なりの照れ隠しだ。

エリスの持ち込んだ話をフェイトやクロノに相談するため、本局へ向かったはやてと入れ違いで帰宅した二人。当初は不振人物であるエリスに警戒していたものの、今では彼女の人柄と持ち前の明るさにすっかり打ち解けたようだった。

「そうだな。志宝のおかげで正直助かっている。私もヴィータも食事は作れないのでな」

「……お二人はお料理できないんですか？」

苦笑混じりに言うシグナムに、エリスが不思議そうに首を傾げた。

「そうだが？」

「ヴィータちゃんとはともかく、シグナムさんは家事とか得意そうな感じがして」

「……？　なんでそう思うんだよ？」

「こう、「夢は新妻っ」というか。エプロンが似合いそうです」

「はあ？」

少々ズレたエリスの発言に呆れ顔をしたヴィータが、ふと隣を歩く話題の人物を窺う。

「そ、そうか……」

そこには、クールな表情を装っているものの、わずかに頬を染めて口元をゆるませた——端的に言えば喜色を隠し切れていない同胞の姿。どうやら、「エプロンが似合いそう」と言われたのが余程うれしかったらしい。

シグナムの見た痴態に、ヴィータは頬をひきつらせた。

「あー……そ、そうだ！ 今日の夕飯でなんだっけ？」 妙な空気を変えようと、ヴィータが無理やり話題を変える。

「あ、今夜はハンバーグです」

「ほう、それは楽しみだな」

三人の前をとてとて歩いていた子犬モードのザフィーラが、言いながら振り返った。

「ザフィーラさん、喋れたんですね」

「む……」

抗議するように唸ったザフィーラのリアクションに、三人はクスリと声を合わせて笑いあう。

とその時、ぞくりと肌が粟立つのを感じエリスが視線を上げる。

いつの間に現れたのだろうか、行く手を塞ぐように年の頃4、5歳の可憐な白いワンピースを着た少女が佇んでいた。

金色の見事な巻き髪を揺らし、ぞっとするほど美しい微笑を浮かべている。

「月匣……—あなたは、」

微笑する少女が背負うのは、真っ紅に輝く真円の月。

「ルー||サイファー！ どうしてここにっ!？」

戸惑いと驚愕を含んだエリスの叫びが紅い世界に木霊する。

「これは異なことを訊く。そちは我らを追って、わざわざこのよう

な場所^{せかい}までやって来たのではないのか、志宝エリス」

「それは……」

至極真つ当なセリフを呆れ混じりに吐く少女——ルー||サイファ
ーが、銀色の瞳を薄く細めた。

「エリス、下がってろ！」

瞬時に展開した騎士服を纏い、戦槌グラーファイゼンを構えるヴ
イータが、最大級の警戒心を露わにして前に出る。

シグナム、ザフィーラも同様に——ザフィーラは人型に——エリ
スを庇うようにして、神の造形とも呼べる愛らしい容姿と、強烈な
プレッシャーを振りまく少女に相対した。

「コイツ……」

「はい。彼女は、ルー||サイファア。裏界魔王の中でも最強最悪の
エミユレイター——“金色^{こんじき}の魔王”です」

まるで「説明ご苦労」とでも言うかのように満足げな表情のルー
へ、シグナムが愛剣レヴァンティンの切っ先を突きつける。

「異界の魔王よ。何が目的で我らの前に現れた？ 事と次第によっ
ては——」

「何が目的、か。ククッ」

白刃を前にして、ルーはくつくつと不気味に笑みを漏らす。

「何がおかしいんだよ！」

そのはっきりしない態度に、元々沸点の低いヴィータが激した。

「いや、そなたらの故郷には“平和の使者は槍を持たない”という諺があるのであろう？ おっと、これは小話の落ちだったか」

いつか、自分がなのはに放った言葉をかけられて鼻白むヴィータ。当時、その場にいたザフィーラも不可解なルーの言動に眉をひそめる。

「フツ。何、そちに少々借りがある故、我自ら出向いたまで。ただの戯れ、魔王の気まぐれぞ」

「借り、だと？」

シグナムの疑問には答えず、ルーは瞳を閉じて言葉を発した。

「エイミー」

「ここに」

彼女の左隣の空間がヴンと歪み、その中から、現れたのは褐色の肌を漆黒のエプロンドレスで隠した二十代の女性。短めの三つ編みにした赤い髪をヘッドドレスで止め、柔和な面立ちをフレームのない丸眼鏡が彩っている。

彼女――“誘惑者”エイミーは、面識あるエリスに向けて軽く会釈をした。

「アゼル」

「いるよ、ルー」

続いて、右側に発生した歪みから、病的なまでに豊満な白い肢体を漆黒の帯、ではなく、フリルのついた白と青のドレスで包んだ灰色のショートヘアの少女――“荒廃の魔王”アゼルⅡイブリスが物

憂い表情で現出する。

帯を巻いた左の手首にはめる真っ黒な腕輪には、手の平サイズのデフォルメされたファンシーな蠅のマスコットが揺れていた。

「エイミーは青い狗を、アゼルは紅い小娘を抑えろ」

「かしこまりました」

「うん……この“軀”のお礼は、ちゃんとするよ」

指示を受け、テキパキとした所作で歩み出るエイミーと、陰鬱な表情のまま腕輪をショートスパに変じるアゼル。

ザフィーラとヴィータが構え、攻撃に備える。

「さあ、我が光にて滅びよ」

「――!!」

眼前に差し向けられたルーの左腕から、パキンと甲高い音を立てて、深紅に輝く、七枚の羽根がその偉容を赤き月の下に晒した。

海鳴の、平々凡々な街並みは今や深紅に染め上げられ、天に届くほど高い粉塵の柱が幾つも立ち昇っていた。

それを引き起こした純白の“羽根”を操るのは、“金色の魔王”の異名を取る大魔王ルー・サイファー。可憐な相貌を王者のごとく鋭利に変え、容易く倒れそうな指を指揮者のように情緒的に振り乱す。

その白魚のような指の動きに併せて、5メートルを超えるまで大型化した七枚の“羽根”が紅い光跡を残して大地に落下する。

目標は、護衛対象^{エリス}を小脇に抱え、建物の屋根の上を走り、逃げ回る烈火の騎士シグナム。

圧倒的な質量と莫大な魔力が込められたそれらは、次々に紅月の浮かぶ天空から降り注ぎ、建造物を無慈悲に叩き潰していく。

この月匣内に、彼女たち以外の人間が誰一人囚われていないことは幸いだったと言えるだろう。

「シグナムさん！ ヴィータちゃんとザフィーラさんは――」

「喋るな、舌を噛む！」

引き離され、それぞれ強大な魔王と今も交戦しているであろう二人を心配して声を上げたエリスを、蛇腹剣ヘシュランゲフォルム＜のレヴァンティンを巧みに操るシグナルが咎める。

紫色の魔力を帯びた連結刃が唸りをあげ、頭上から迫り来る巨大な羽根にぶち当たり、その軌道を変えた。

その様子を上空で浮遊しながらルーは、侮蔑の眼差しで見下ろし

ている。

「……ふん」

奮戦するシグナムの姿を見やり不愉快そうに鼻を鳴らした。

小手調べとしてけしかけた“羽根”のことごとくが避けられたことで、彼女の大きすぎるプライドに火が着く。

——そも、今回の来襲として彼女の私情が多分に含まれた報復行動である。

彼女の眷属——弟にして息子が、“こちら側”に来てしまったのは彼女がシグナムに敗北したことが遠因だ。それは、山脈よりも高いプライドを持つルーにとって許容出来ない事象であった。

故の、報復。

もつとも、現し身とシグナムの力量差を見誤った自身の慢心による敗北だったという事実は、思考に上ることすらなかったが。

「……疾くケリを付けるか」

気まぐれに呟いて、ルーは空間を歪めて転移した。

* * *

一方、先制攻撃で分断されたヴィータも苦境に立たされていた。遠雷のような耳をつんざく轟音を聞き入れて、シグナムとエリスに合流しようと試みる。

「——ッ」

「くっ！」

しかし、無音の気合いとともに漆黒の刃が横合いから走る。横薙

ぎ一閃。

穂先の根本に付いた場違いなマスコットが、身を反らすことで辛くも避けたヴィータの目の前を過ぎていく。

「ダメ、行かせないよ。あなたの相手はわたし」

振り抜いたショートスピアを軽く回し、アゼルはその切っ先をたまらず距離を取ったヴィータに突きつけた。

薄幸の美少女といった風情を醸し出す陰鬱な印象を与えるアゼルの面立ちは、普段とは打って変わり、ほんの僅かだが勇ましさを漂わせている。限定的とはいえ、自らの忌まわしい“力”が抑制され、自由を手に入れたことがよほどうれしらしい。

「くそっ、おまえの声、なんかやりずれーな！」

ヴィータが困惑顔で悪態を吐く。どこかの誰かにとてもよく似た声色に、調子に狂わされているようだった。

「そんなこと言われても……。生まれたときからこの声だったんだけど……」

消え入るような声で言い返すアゼル。彼女の“能力”を抑制する特殊な魔導具――魔殺の帯が巻きついた脹ら脛が盛り上がり、体内に内蔵された機械的な噴射口――ヘロケットブースター――が露出。一拍置いて、青白いアフターバーナーを盛大に噴き出した。

「はあああっ！」

速度を上げ、呐喊する。

突き出された穂先と、展開された紅いシールドと衝突。激しい火

花を散らす。

「くっ！　——このっ！」

「っきゃあっ」

突撃を真っ正面から受け止め、往なして弾き返したヴィータが、お返しにグラーフアイゼンを振り上げる。体勢を崩したアゼルは応できない。

「お返しだ！　アイゼン！」

カートリッジロード。葉莢が飛び、グラーフアイゼンの穂先が変形した。

「ラテーケン——、ハンマーッ！！」

ハンマーヘッドに付いた推進機構が噴射剤を吐き出し、重力と振り下ろしによって加速したスパイクの一撃がアゼルに迫る。

「……っ！」

スパイクの切っ先が何とか身を引いたアゼルの胸元をかすめ、彼女の纏うドレスを大きく切り裂いた。

「あ……っ」

レースの上質そうなドレスは、身体の中心線に沿ってバツサリと断ち切られ、その切り口からは黒い帯に押し込められて窮屈そうな乳房が露わになっている。

「ちっ、ハズしたか！」

「……っ！」

「……ん？」

悔しげに歯ぎしりするヴィータは、相手のただならぬ様子に首を傾げた。

「……これ、アルに作ってもらったお気に入りなのに……」

服が損傷したことがショックだったのか、うるりと瞳を潤ませてしょんぼりするアゼル。

空中だというのに体育座りで座り込み、「どうせ、あたしは孤独……」と呟いて、器用に指で地面——あくまでも空中だが——にの字を書き始めた。

「え、あ、あれ？」

その周囲の生氣まで盛り下がりのような落ち込みように、いい知れない罪悪感に襲われるヴィータ。声がどこかの誰かさんに似ている上に、アゼル自身どこか庇護欲を掻き立てる雰囲気を持っているから無理もない。

「えっと、その、わりい。」

「うう……っ……許さない！」

「なっ、ちゃんと謝ったじゃんか！」

キッと視線を上げたアゼルは、ヴィータの抗議などお構いなし——彼女も一端の魔王であるからには当然だが——で、ロケットブースターを再度展開、突撃体勢に入る。

「エネルギー――」

気を取り直したヴィータ。「ちっ」と舌打ちし、弾丸を数発生成、戦槌で叩いて打ち出す。

〈シュワルベフリーゲン〉。ベルカ式では珍しい誘導弾系の中距離射撃魔法である。

「――全、開……ッ！」

突撃するアゼルに殺到した魔弾はしかし、槍に内蔵された加速フィールド発生機構が生み出すエネルギーの膜に阻まれた。

「――くっ!!」

一筋の流星となったアゼルが、ヴィータの展開した真紅の魔力障壁に突き刺さった。

* * *

「やあっ！」

「おおおおッ!!」

エイミーの伸縮自在の伸びる手脚を駆使した格闘が、ザフィーラの繰り出す大砲のごとき鉄拳とぶつかり合う。

剛と柔。二種類の拳撃が幾度も交差した。

ザフィーラが鉄をも砕く右のストレートを打ち放てば、エイミーがしなやかな両手から四連の突きを繰り出す。

一進一退の攻防。共に主に使える身であることの矜持に賭けて負けわけにはいかないと、互いに一步も譲らない。

「シッ！」

顔面を狙うひねりの加わった強烈な正拳を、首を傾げて避けるエイミー。しかし、避けきることが出来ず、鉄拳が三つ編みをかすめて数本の髪を消し飛ばし、僅かに切れた頬には紅い血が一筋流れた。エイミーの眼鏡に隠れた大粒の青い瞳が、にわかに剣呑な光を帯びる。

「――はあああッ！」

とんと空を蹴って、バックステップで間合いを取り――刹那、裂帛の気合いとともに、鋭く踏み込まれる震脚。腰溜めに構え、放たれた両の掌底が、硬直してがら空きになっていたザフィーラの胴へと突き刺さる。

ドン、と鈍い音が辺りに響く。

魔王の大魔力を笠に着た超重量の一撃に、さすがのザフィーラも一瞬悶絶した。

「……ッ、見かけに寄らず……っ！」

「一流のメイドたるもの、ご主人様を護るためならば時には牙を剥くことも厭わないのです」

笑顔を浮かべ攻勢を強めるエイミー。身体を大きく沈め、刈り取るように鋭い下段の蹴りを放つ。エプロンドレスの裾が翻り、黒いストッキングが覗く。

「ぐ、ぬ……！ くっ、どこのゴム人間だ！」

鞭のようにしなる脚払いをぐぐり抜け、高度を上げたザフィーラが吐き捨てた。

「あら、万病を癒す霊薬を飲めば、これくらいのことは出来るんですよ？」

「嘘を吐けっ」

「まあ、本当ですのに」

ザフィーラが踏み込み、距離を詰めようと突進する。

拳に迸る青い魔力。

狙うは渾身の一撃。

迫る縦の守護獣の巨体にもエイミーは笑顔を崩さず、冷静に腕を振り上げ、指先が紅く輝くルーンを空中に描き出す。

「スファイア！」

「ぬっ！」

眼前に巻き起こる凄まじいまでの風。その圧力に阻まれて、ザフィーラは近寄れない。

たたらを踏むザフィーラ。その隙を逃すエイミーではない。

空間が波打つ。「水よ！」掌の中にテニスボールサイズの水球が現れた。

「――貫け！ アクレイルッ！」

月衣から取り出した水球を圧縮、硬質の水弾――ヘアカレイル――が射出された。

数トンに達する衝突エネルギーが込められた水の柱がザフィーラに襲いかかる。

「ぬっ――、ぐおおおおッ!？」

大量の水に押し流され、眼下の街並みへと墜落していくザフィーラを視界の隅に入れ、「うん、イけるイけるっ！ ……なーんて」
とのたまうエイミーは、クスクスと笑顔をこぼしてスカートの裾を直した。

＊ ＊ ＊

心配そうな表情で空を見上げるエリス。彼女の瞳に映るのは、空を覆い尽くして燃え盛る二色の炎。

紫色の烈火を飲み込み、黄金の獄炎が全てを焼き尽くした。

「があ……ッ」

「シグナムさん！」

響き渡るエリスの悲鳴。

全身火達磨で、エリスの側の民家に叩き落とされたシグナム。その衝撃で、半壊する二階建ての建物。

周囲を衛星のように回る三つの火球と、紅い燐光を放出する七枚の白き“羽根”を引き連れて、悠然と黄金の魔王が光臨する。

「……志宝エリス、そちは其処で黙って見ておれ。“光”を失った
そちには最早、出来ることなどありはしないのだからな」

鋭い視線と辛辣な言葉が、シグナムに駆け寄ろうとしたエリスを制す。

ピクリと肩を揺らしたエリスは、しかし、歩みを止めず、倒れ伏したシグナムをルーから庇うように立ちふさがる。

「……何のつもりだ」

「戦う力はなくても、盾になることくらいならできます！」

「――退け。そちとて死ぬのは怖かろう」

「死んでしまうのは嫌です。でも、“仲間”が傷つくのはもつと嫌だから」

決然として、迷いも躊躇いもない真っ直ぐな翠緑の眼差しと、絶対的なカリスマを漂わせる白銀の眼差しが交わる。

「そうか……。ならば望み通り、共に滅びよ」

ルーの人差し指がエリスへとおもむろに突きつけられる。

収束する魔力と強烈な光子。

まばゆい光が指先で輝き、ジジジ……と空気を焼く音を響かせる。自らを破壊し尽くして余りある閃光を前にしても、エリスは一步も退かない。

エリス自身、この行為が無謀な蛮勇だと理解している。だが、“仲間”に救われ、“仲間”と共に歩み、培ってきた信念に賭けて、この場を譲ることは出来なかったのだ。

光輝がいつそう瞬き、放たれる刹那――、瓦礫と化した天井の残骸から埃がパラパラとルーの頭上に降り注いだ。

「む……?」

ルーが眉をひそめる。彼女自慢の見事な黄金の髪が、降ってきた埃でわずかに汚れていた。

唐突に、白い光が収まる。

「興が醒めたな。エイミー、アゼル、退くぞ」

『……殺さなくていいの?』どこかでヴィータと戦っていたアゼルからの返答。「構わぬ、捨て置け」と短く告げたルーは、エリスと

倒れたままのシグナムに背を向けた。

事の推移についていけず、ぽかんと当惑するエリスを肩口から見やり、口を開く。

「志宝エリス。事の“真実”が知りたいのなら、次元の海を渡れ」

「どういう意味ですか？」

「フン。それくらい、自分の頭で考えるのだな」

「あっ、待って――！」

投げかけられた言葉に困惑を強めるエリスを置いて、天災のように気まぐれな大魔王は、最後まで気まぐれに紅い闇の中へと溶けていった。

4・1

暮れなずむ斜陽の病室。

規則的な機械音が清潔に保たれた室内に響く。

鼓動を示した機器や酸素を送り込むパイプ、栄養剤の詰まった点滴——有り体に言えば、生命維持装置に繋がれたユーノが、穏やかな表情で真新しいシートにくるまれている。

何とか峠を脱し通常の病室に移ったものの、意識は未だに戻らず、予断を許す状況にはなかった。

空気の入れ換えのために開け放たれていたのだろう、薄く開いた窓から柔らかな恵風が部屋に入り込み、悪戯なそれに煽られて白いレースのカーテンがふわりとはためいた。

気まぐれな闖入者が過ぎ去る。

「……………」

どこから現れたのだろうか。黒と青を基調としたありきたりな服で身を包む、癖の強い黒髪の少年がベッドサイドに佇み、眠ったままのユーノを見下ろしていた。

無音のまま過ぎる時間。

鮮やかなブルーの瞳に宿した鋭い光がふと緩む。代わりに浮かぶのは柔弱な闇。

「——ままならない、本当に」

誰ともなくぽつりと呟く。

その表情は、誰が見てもわかるくらいに後悔を滲ませ、沈んでいた。

彼のことを少しでも知る者がこの光景を目にしたのなら、自分の目を疑ったに違いない。

泰然自若にして、飄々とした愉快犯……それが少年が世間一般から受けている評価だ。

彼自身、“世界”に対してある種の悪意を持って接していることもその原因の一つだろうが、もともと本心を隠してなかなか表に出さない質である。この生粋のウソツキの気持ちを理解してやれる人間は、今のところ“この世界”には居なかった。

「こういうこと（……）も始めから織り込み済みのつもりだったけど、いざ現実になると……やっぱ、辛いよな」

自らの選択を悔やむように少年は唇を噛んだ。

“家族”にも見せない——いや、意地でも見せまいとしている弱音がこぼれ落ちる。

「だけど一度決めたことだ、投げ出すつもりはないさ。中途半端で諦めるのは御免だ」

例え、大切なひとたちから恨まれたとしても。例え、世界の全てを敵に回すとしても。

罪なら被ろう。咎なら受けよう。汚れ役には慣れている。

やると決めたら、最後まで諦めずに貫き通す——少年の根幹を成すたったひとつの信念。それは、“責任”という言葉で言い換えることができるかもしれない。

少年は、自らの裡に溜まった淀みを吐き出すように軽く嘆息すると、ボサボサな黒い髪を困ったようにかき乱した。

「苦情や文句は、後で好きなだけ聞いてやるよ。お前と俺は……親友、だからな」

少し頬を赤らめ、言いづらそうに視線を泳がす。その仕草には、なかなか素直になれない彼の性根がよく現れていた。

傷つき、眠り続ける友を前にして――

決意を言葉に。意志を祈りに。

黙祷するように瞳を閉じていた少年が、ふと顔を上げて部屋の入り口の方に振り向く。

近づく人の気配。

おそらくこれは“彼女”だろう――こちらはこちらで何とかフォローしなきゃなど、心に決め――と当たりをつけた少年は、陰りを帯びた弱気な本音を虚勢の仮面で覆い隠し、不敵に唇を歪めた。

そう、うじうじと悩むのは自分らしくない。

少年は、自分の好きな“自分”で居るために、華美に着飾って前を向く。何よりも大切なひとに、愛するひとに、無様な姿は見せたくないから。

どんな時でも格好付けて。見栄を張って。飄然と振る舞って。彼のそれは、すでに習性と呼べるまでに昇華していた。

「――じゃあな、相棒^{ユウ}。ゆっくり養生しろよ」

せめてもにと、親しみといたわりを込めた言葉を投げかけ、少年の姿が蜃気楼のように揺らめき、夕闇に溶け込んでいく。

それからややあって、カラカラ……と、控えめな音を立てて病室の引き戸が開かれる。

消失した少年と入れ替わるようにして入室したのは、サイドテールの少女――なのはだ。

目元には薄い隈が浮かび、あまり眠れていないことが容易に窺える。

「……あれ？」

わずかに濁った紫石英の瞳が、捉えた部屋の景色に違和感が残る。違和感の正体——それは、ベッドサイドに置かれた陶器製のシンブルな無地の花瓶に生けられた見慣れない数本の白いバラだった。たしか、あれには自分が買ってきた他の花が生けていたはずなのに、となのはが不思議そうに首を傾げた。

「——誰か、お見舞いにきてくれた……のかな」

実際に見舞い客が居たことなど当然知る由もない彼女は、とりあえずそう自分を納得させ、ここ数日で定位置になってしまったベッドの横の丸イスに腰掛ける。
ふう、とこぼれた息。

「……………」

これで何度目になるかわからない、自分の失策に対する強い自責の念に苛まれる。

どうしてあのか、戦ってしまったのか。どうしてあのか、非殺傷を切ってしまったのか。どうしてあのか、周囲への注意を怠ってしまったのか。どうしてあのか、スターライトブレイカーを選んできたのか。

どうして、どうして、どうしてどうしてどうして——

——どうして私は魔導師たまたかいを続けてる、の？

自問の先に答えはない。あるのは深い後悔だけ。
ザリ……となのはの脳裏に嫌なノイズが走る。フラッシュバック

するのは紅い記憶。

真っ紅な空。

真っ紅な月。

真っ紅な街並み。

そして、真っ紅に染まった ■■■ ———

「——ッ!!」

少女らしい、年相応の瑞々しい身体がカタカタと音を立てて震え出す。噛み合わない歯を無理矢理に押しつけて、震える肩を両手で強く抱きしめて。

溢れ出したどす黒い衝動を抑えると、厭な記憶を振り払うようにかぶりを振る。そして、未だ目覚めない幼なじみの穏やかな横顔を辛そうに見つめた。

「————……ねえ、ユーノくん。私、どうしたらいいのかな……?」

依然、意識の戻らないユーノに——そして、とても近くに居た、だけど今は居ない“誰か”に助けを求めるような呟きは、辿り着く場所を失い彷徨う。

陽光は、建ち並ぶ高層ビルの上に沈み——

街に、夜の帳が落ちる。

開け放たれたままの窓から、まだ少し肌寒い風が、夜闇と一緒にそっと静かに忍び込んだ。

#4 「Dance of a white wing」

『……足掻いているのね。出来損ないの人形らしく、無様に』

——— かあさん。

『それで、私が喜ぶとでも？ あなたに、あの子との記憶を穢けがされたこの私が』

——— かあさん、母さん。そんな顔しないで。笑いかけて。

『本当に、あなたは馬鹿。大馬鹿者ね。私の言葉を唯々繰り返すだけの哀れなお人形。……今更、死人の記憶にすがりついて、戯れに遺した言葉に拘って、一体、何の意味があるのかしら』

——— 母さん、母さん。違う、違うよ。あの“言葉”は私に残った、最後の絆だから。

『……………。あなたのそういうところ——大っ嫌い』

「――母さんっ、待って！」

――自分の叫び声で、目が覚めた。

見慣れない天井。起きたばかりで鈍りきった頭は軽く混乱。

まとまらない思考と感情とが、ぐるぐる、ぐるぐると際限なく私のなかで駆け回る。終わりの見えない追いかけっこで頭の中は支離滅裂、めまいがする。目の前がくらくらして、まともなことをなにごとで考えられない。

「はぁ、はぁ……はぁ……はーっ」

息が切れる。のどが渴いていがらっぽい。

鈍い身体にムチを打ち、ベッドサイドの水差しの水をコップに注いで一気に飲み干した。

「んぐ……ぷはっ」

……少し、気分が落ち着いた。

脂汗をたっぷり吸った黒のタンクトップが、肌にべったり張りついていてすごく不快だ。キモチワルイ。

再び、ベッドに身体を投げ出す。自分の荒い息づかいも今は耳障りだった。

「……。また、あの夢……見ちゃったな」

いつからか見始めたおなじみの夢。未だに引きずってる“母さんの夢”。

アリシアのことや、私自身の生まれのこととかは吹っ切った……つもりだ。誰の言葉かは忘れちゃったけど、「自分らしくありのま

まで生きていけばいい」と思うから。

だけど、それとこれとは別の問題。

あの慌ただしくも忘れられない日々から、ハラオウンの家に引き取られてから六年。まだ六年だ。

——六年という歳月は、長いようで短い。少なくとも、私にとっては悲しい記憶と折り合いをつけるのにも、愛情を整理するのにもぜんぜん足りなくて。

私はまだ、“母さん”のことを愛してる。忘れられるわけなかった。

「……」

悪夢にかき乱された感情の濁流が、徐々に収まっていく。

汗が浮んで、前髪が張り付いた額に手の甲当てた。少しだけひんやりとして、気持ちいい。

このまままどろみを楽しむには夢見がよくなくて。……まだちょっとぼんやりとした頭で、ここがどこか思い返してみる。

（——ああ……そっか……私、いまアースラから離れてるんだったっけ）

はやてが偶然保護したという女性から事情を聞くために、地球へと迎えに行くことになったアースラ。私は、それには同行せず——迎えに行くだけなのだから必要ないだろうと判断した——、単身、みんなと別れて「連続殺傷事件」が頻発している第22管理世界へと向かっていた。

そしてここは、定期便の次元航行艦——もちろん、管理局の職員向けのものだ——の中で、この部屋は私に割り当てられた船室だ。今回みたいに単独捜査することたまにあるから、ひとりでフネに乗るのもなれっこののである。えっへん。

……別に、この件は私が担当しなきゃいけない案件というわけじゃない。だけど、この事件がなのはのことに繋がっているような、そんな予感がしたから――

……ううん、違う。それは言い訳だ。傷ついた親友をダシにした、身勝手に汚い言い訳。

私はただ、他人に任せているのがいやなだけ。ただ、あの蒼い眼の男の子を追いかけたい、もっとお話したい、もっともっと彼のことが知りたい――そんな自分本位の望み。利己的な自己満足。幼稚な執着心。

これじゃまるで“恋する乙女”みたいだ。

「……あれ？」

恋？

あれ？　これって恋なの？

私、あのひとに恋してるの？　あのひとのことが好き――

「つつっ!!」

こ、こんな恥ずかしい思考はカットっ！

やにわに熱くなった顔を枕にぼふっと押しつけて、そんなことなにと取り繕う。なんだか胸がすぐドキドキしてるけど、そんなんじゃないもんっ！　違うったら違うもんっ!!

――……というか、私はいったい誰に向かって取り繕ってるんだろう。よくわからない。

まったく、なんなんだろう。あの火災の現場……じゃなくて、公園でたい焼きをもらってからこっち、調子は狂いっぱなしだ。

でもそれが、心地いいと思ってる私もいて――
ずるい。理不尽だ。

むーっ……なんかむかむかしてきた。

「あーっ、もうっ！ 止め止めっ、さっさと起きよっ」と

ぐるぐると考えてても仕方ない。ぐんっと気持ちいつもより勢いよく上体を起こした。

寝返って乱れた髪を手櫛で適当に撫でつけ、振り返る。ベッドの宮に置いてある簡素な置き時計で時間を確認。

……。到着予定時間まで、まだかなり間があるかな。

なにげなく視線を胸元に落とす。パジャマ代わりのタンクトップが、すっかり大きくなって自己主張している胸の谷間にべったり張りついていた。……。肩凝るし、腕が振りづらいからちよっとジャマなんだけどな……。

まあ、それはともかく、

「シャワー、浴びてこよう……」

のそりとベッドから出て、立ち上がる。「んーっ」と軽く伸びをしてこわばった筋肉をほぐした。

さてと、熱いシャワーを浴びて汗を流して、混乱しっぱなしの頭をリセットすることにしよう。

——現地に着いたら、調査をがんばらなくちゃなんだから。

第97管理世界“地球”、衛星軌道上。

隠遁用の光学迷彩を展開して停泊中のアースラ、談話室。

ベンチに座り、くてつとテーブルに突っ伏す藤色の髪の子、志宝エリス。服装はこちらに來た時と同じ、白いジャケットと青のプリーツスカートだ。

エリスの話し相手は、彼女の案内役を仰せつかった青いちびっこ、リインフォース?。

「はあ、緊張した……。うまく私の話が伝わってればいいけど……」

「エルフィはちゃんと説明できてたと思うです、エリスさん」

「ありがとう、エルフィちゃん」

まさしく人形みたいなリインフォース?が、落ち込み気味のエリスを励まそうとテーブルの上でぴょんぴょんと飛び跳ねている。その愛らしいさまにエリスは思わず頬を緩ませた。

——アースラが地球に到着したのはルーIIサイファー以下、裏界魔王たちが退いた少し後のことだった。

そのままアースラに保護されたエリスは、クロノらの前ではやてにもした自らの素性やこちらの世界を訪れた経緯などを説明。さらに、フェイトがシャイマールと遭遇した際の記録や、なのはとベルの交戦映像——エリスは“蠅の女王”までこちらに來ていたことに、ひどく驚いていた——を確認照合、それから会議室を追い出され——いったん席を外すように言われたただだが——、今に至る。

「それにしても……シグナムさんやヴィータちゃん、それにザフィーラさんが無事でよかった」

「とーぜんですっ。ヴォルケンリッターは夜天の書があるかぎりふめつなんですからっ！」

あれだけ痛めつけられたというのに、さすがというべきかシグナムたちは特に命の別状はなく現在は雪辱に燃えつつ療養中だ。

仮に消滅級の大ダメージを負ったとしても、夜天の魔導書が健在な限りは問題にならない。“家族”を傷つけられたはやての心情は別にするとしても。

「夜天の書……。エルフィちゃんのお姉さん”だっけ。いいね、姉妹って」

今もはわはわ頑張っているであろう、くれはの姿を脳裏に浮かべながらエリスが微笑む。

「はい、エルフィのお姉ちゃんです。……まだ、会ったこともお話したこともないですけど」

夜天の魔導書の修繕はすでに、一部を除いて完了している。

ほぼ全ての機能は回復し、“闇の書”として次元世界に災厄と破壊を振り撒いていた面影はもうどこにもない。

しかし、肝心の管制人格リインフォースは目醒めず、その原因は未だ不明。夜天の魔導書本体を再生させる際に作ったはやてのコネに名を連ねる“その道”の専門家たちもお手上げだった。

「でも、きつと……いつかきつとお姉ちゃんに会えるって、エルフィは思うです」

未だ見ぬ姉の姿を夢に見て、小さな妖精は小さな胸を力強く張って見せる。

「だから、お姉ちゃんが起きるまで、エルフィがはやてちゃんやみんなを守るんですっ!」

「……そっか。会えるといいね」

「はいですっ」

それ以上は何も言わず、ただ、とてもやさしく、とても柔らかい笑顔をこぼしたエリスは、私も負けてられない、と決意を新たにした。

そんな時、ぷしっと空気を抜く音を鳴らして談話室の自動ドアが開く。

「ちわー、三河屋でーっす」

「あ、はやてちゃん」

「会議、終わったんですか？」

「……うん、まあ、そうやけど。で、個人的にもう一度、シャイマールとやらの映像見せてもらわへんかなと思って」

ボケをあっさり流されて恥ずかしくなったのか、軽く赤面したはやてが苦し紛れに用事を口にする。

若干口調が砕けてるのは、はやてがエリスを仲間として認識したからだろう。エリスの方は依然として敬語だが、それは彼女の性分だから仕方がない。

「もちろんいいですよ。ちょっと待っててくださいね……」

はやての希望を受けて、エリスはテーブルの上に置いてあったナップザックに手をつ込み、ごそごそと手探る。

ややあって、中から取り出されたのは縦20センチ、横30センチほどの白い長方形な物体——ウィザード向けの携帯情報端末ピグマリオン、その最新モデルだ。

パタリとそれを開いたエリスは、収録されている映像データを呼び出すべく鮮やかなタッチでキーボードを叩く。ちなみにデスクトップは土鍋に入った子猫の画像であった。

「ほほう、手慣れたもんや」

「お仕事の関係でこういうことはよくやってるんです。一日数百件の事務処理をしてたら自然と……」

「それは……ご愁傷様としか言われへん」

「壮絶ですう」

「五時前のオフィスは毎日戦場と化すんですよ。みんな定時に帰りがたがるので」

「わかるっ、わかるわ。管理局もそうやもん。お役所仕事はこれやからあかんね」

「残業代も出ないんですよ？ 最近、お肌も荒れぎみで……ぐすん」

「夜更かし疲労はお肌の大敵、乙女の大敵やな。……あれ？ なんや前にこんなフレーズ聞いた気がするわ」

年頃の少女がするには世知辛すぎる世間話をはやと交わしながらも、エリスの指先は一向に澱まない。どう見てもマルチタスク的な技能を獲得してるあたり、言葉通りに相当な修羅場を潜ってきたことが窺える。

ご近所トラブルから国家の存亡、果ては世界の危機まで、世界の各地で多種多様な事件が日常茶飯事的に頻発するファー・ジ・アース。当然、それを統括する立場にもなれば舞い込む仕事量は目も眩むほどに膨大だ。

くれはの秘書を始めた当初、各ウィザード組織との折衝、事件の後始末、会議向けの草案の作成、お茶汲みなど——次々に舞い

込む仕事にてんてこ舞いで目が回る思いをしたのはいい思い出、とエリスは密かに回想して苦笑する。

カリカリとハードディスクが駆動音を鳴らし、収録されたムービーの再生が開始した。

「出ました――ってあれ？」

間の抜けたエリスの声。

液晶ディスプレイには、バラの意匠が施されたゴシックロリータ調の黒い衣装を着た二十代前半の女性が、アップテンポな歌を大観衆の前で熱唱している姿が映り出されていた。

「……なんともかわいらしいひとやね」

「はやてちゃんはやてちゃん、エルフィもこんなゴスロリドレスが着てみたいですう」

「ええよ。あとで作ったるな。……それにしても、すごい歌唱力や」

艶やかな黒髪と、金と紫のオッドアイがひどく神秘的。激しい曲調の歌を歌い上げる声はさながら天使のようで。一同、しばしその歌声に耳を傾ける。

「――きゃ！？ ま、間違えちゃったっ」

思わず歌声に聴き入っていたエリス。ようやく精神の再構成に成功し、慌ててキーを操作、ムービーを停止させた。

同じく聴き入ってしまったはやてが、怪訝そうな顔をして問いかける。

「で、今んは？」

「えーっと、ファー・ジ・アースの日本で活躍中のアイドル、露木

椎華さんの武道館ライブの映像ですね」

私、大ファンなんです。自分のうっかりを誤魔化すように舌をちよろっと出す。その仕草にはやてが萌えていたのは些細なことだ。

「それはともかく、こっちが正解です」

改めて、ムービーが起動。

ごく一般的な黒い学ラン姿の黒髪の少年が、軽薄な作り笑いを浮かべて何かを告げている様子が映り出される。

「大魔王シャイマール。二つ名は“裏界皇子”。公爵級エミューレイター相当として登録されてます。同じ名前の魔王と区別するために、アルもしくはアルⅡシャイマールと呼ぶ裏界魔王もいるみたいですね」

映像の横に、簡単な情報をまとめて記したテキストが流れる。

「ふむ……着てる服はちゃうけどやっぱり同じヒトや。——これが、“魔王”なあ……。私と同年くらいのちよつとカッコいい男の子にしか見えへんけど」

考え込むように、顎に手を当てるはやて。目を細め、じっと映像の中の少年を観察する。ほんのわずかな既視感に苛まれながら。

「魔王の見た目に騙されちゃだめですよ。たまに9歳くらいの姿で現れるので、一部では“シヨタ魔王”なんて呼ばれてるくらいですから」

映像が切り替わる。

エリスの言葉通り、小学生くらいの腕白そうな男の子が七枚の白い盾状の浮遊物体を巧みに操り、ウィザードたちを圧倒している。両手をポケットに突っ込んだ余裕綽々の態度が小憎たらしい。

「たしかにシヨタや」

「私、そういうのどこがいいのかよくわからないですね。男の人はもっと頼りがいがあるっていうか、渋い感じじゃなきゃ」

「おお、気が合いますなあ。こう、大人の魅力あふれたダンディーなおじさまって、ええよね」

「お髭なんか生やしたりして」

「そーそー。白いぱりっとしたタキシードと……」

「シルクハットにステッキ？」

数瞬、顔を見合わせる二人。

そして、ガシツと無言で手を固く握り合う。自らの趣味を周囲の友人たちに理解してもらえず、肩身の狭い思いをしていた彼女たちは、ようやく見つけた同志に心の中で感涙した。

「ふたりそろってオジン趣味ですねー」

「なにか」「言ったんか、エルフィ？」

「な、なんでもないですう」

天然腹黒と真っ黒子だぬきの凄みの効いたコンビネーションにたじろいだちっこいの。小動物みたいな素早さでピグマリオンの影に隠れた。戦略的転進である。

「そうや、エリスさんから見たあの火災現場の映像の感想とか聞かせてくれへん？」

「そう、ですね……。あんなに簡単に表に出てきたことが驚きです」「そうなん？」

「一番最近の事例では、某国テロリストに最新の細菌兵器と偽った偽物を渡して、それを盾に占拠されたイージス艦の叛乱を影から幫助したとか。鎮圧のために投下される寸前だったっていう強力な特殊爆弾で、首都圏の破壊をもくろんでたらしいですね」

「それなんて亡国」

「基本的に、人間をそそのかして起きた物事を離れたところから傍観するのを好むみたいです。敵対する両方の勢力に荷担して紛争を起こさせてみたりとか。武器や資金の横流しとかもしてるかもしれないね。」

それから、姿を表に現しても、意味深な言葉を言ってウィザードの皆さんをおちよくるだけですぐに逃げちゃうんですよ。……私、そういうずるいやり方って、男らしくないと思うんです」

溢れる不快感を隠そうとせずエリスは眉をひそめ、件の魔王のことを語る。

温厚な彼女らしからぬ陰悪ぶりに、はやては何かしら因縁でもあるのだろうかと首を傾げた。

「なにが目的なんか、決め手になりそうな情報はないなあ」

「すみません、お役に立てなくて」

「ええ。エリスさんがおらんかったら私ら、今以上になんもわからへんかったんやもん。感謝しとるよ」

気遣いの言葉。

エリスは彼女の真心を感じ、最初に出会ったのがはやてでよかったと思う。

感謝の念で胸がいっぱいになったエリスは、ふと、まだムービーが映り続けている液晶の方に視線を向ける。その映像に、違和感を覚え――違和感が一つの“仮定”をエリスにもたらした。

「あと、もうひとつだけ……」

「もうひとつ？」

はつきりしない様子に、はやては続きを促すようにオウム返しする。

少し間をおいて、自分の考えをまとめるエリス。確信にはほど遠い、だが、不思議と腑に落ちる——そんな、口に出すにはまだ早い推理の一端を言葉に変えた。

「——あの映像を見て、彼がなぜこの世界にやってきたのか、仲が悪いはずのベールⅡゼファーがどうして協力的な姿勢を見せているのか……それからルーⅡサイファーが残した言葉の真意が少しだけ——ほんの少しだけ、わかったような気がします」

「……？」

液晶画面の中では、ウィザードたちと協力するようにして、黒髪の魔王が巨大でグロテスクな竜を思わせる“ナニカ”と激戦を繰り広げていた。

第22管理世界“ハイダ”。

本星の赤道半径は6355・819キロメートル、月に相当する衛星“イオス”——先住の言葉で侍女の意——を持ち、全体の体積のうち72・7%が海という水の惑星だ。

私の故郷、地球と比較すると少しだけ重力が弱く、一日の長さもそれに比例して短い。

気候は温かく穏やかで、地球、日本でいうと初夏に近いかな。海が多いのに、湿度は不思議と低くて一年を通して過ごしやすい。政府もそのことを理解しているらしく、世界をあげて観光業の発展に力を入れているみたいだ。

そういうわけもあって、このハイダは、管理世界中からたくさん観光客が訪れて賑わう管理世界有数のリゾート地だった。ハワイやグアムなどの保養地を想像するとわかりやすいかもしれない。

……まあ、お仕事で訪れている私には関係のない話だけでも。——でもいつか、“みんな”でこういう場所に遊びに来れたらいいな。

午後。地平線に帰る準備をはじめた太陽の暖かな光が、空から降り注ぐ。

たくさんの人がひっきりなしに行き交う大通りに面したおしゃれなカフェテラス。目の前の、木製のテーブルには甘くておいしそうな苺のミルフィーユと、薄い湯気上げるミルクティーが置かれている。

午前中、ずっと歩き回って疲労のたまった身体にはぴったりな糖

分補給タイムだった。

ハイダにやってきてはや二日目。

初日は、管理局の支部に顔を出したりしなきゃだったから、今日が調査の本格スタートだ。

とりあえず、午前中は事件現場——惑星全体じゃなく、都市部、特にリゾート地を中心に集中していた——を直に見て回ってみた。

「現場百遍」っていうし。

そういえば、挨拶をしに行ったとき、こちらの捜査責任者の人にとっても歓迎されたのには驚いたな。どうも捜査に進展がなくてあちらも困っていたらしい。

観光地で連続殺人事件なんてイメージダウンもいいところだから、ここの政府から早くなんとかしろとせつつかれてるみたい。とはいえ、私みたいな一介の執務官にあまり過度な期待をかけるのもどうなのかな、と思う。

「……」

さくりとフォークでミルフィーユをひとかけら切り取って。

それをそのまま口に運ぶ。

もぐもぐ。もぐもぐ。

「うん、おいし♪」

甘酸っぱい、苺とクリームの味が口いっぱいに広がって、ほっぺがゆるむ。きっと今の私の表情は、見るに耐えないほどにゆるゆるだと思う。

おいしいものは好きだ。

おいしいものを食べてると、ちゃんと生きているんだって実感できるから。……キレイな食べ物も、もちろんあるけれど。

——そう思う理由は、自分でもよくわからない。

産まれたばかりのころ、正直私の食事環境があまりよくなかった。リニスがなくなってからそれはそれが顕著で、ジュエルシードの探索をしていた当時は心身ともに追いつめられてて、それどころじゃなかったし。

だから、おいしい食べ物を食べたエピソードの記憶が強く残っているんだろうなって、自己分析している。まあ、思い当たる節はないんだけど。

「……」

ミルフィューに舌鼓を打ちつつ、横目で何気なく道行く人たちを観察する。これは、執務官の仕事をするようになってからの癖だった。

どうやら私はその……他の人よりもヒトを見る目が鈍いらしい。昔、クロノに注意を受けたことがある。「フェイトは人を信じすぎるところがあるな。もう少し、他人を疑うことを覚えた方がいい」と。

当時は誰か疑うなんてことイヤだって思ったんだけど、こうして管理局の仕事をしているうちに、それじゃだめなんだと気がついた。執務官資格試験を二度落としたのも半分はそのあたりが遠因——もう半分は、なのはの事故で動揺をしてたから——だ。

捜査官としては致命的な欠点。それを補うために、こうして普段から人間観察に勤しんでいるというわけ。……役に立ってるかどうかは自分でもちよっと疑問だけど。

「あむ。……………」

最後のひとかけらを口に放り込み、ゆっくりと味わいながら視線を踊らせる。

人気の行楽地とあって、道行く人たちはさまざまだ。

——やさしそうなお父さんと美人なお母さんに囲まれて、屈託のない笑顔を浮かべた女の子。幸せそうな家族連れ。

——背の高い、頼りがいのありそうな男の人と、彼に甘えてひどくきれいな表情をする女の子。お似合いなカップル。

「……っ」

——ズキリ。

胸の奥の方にうずきのような痛みが走った。

原因は、わからない。

「……はあ」

なんだか私、近ごろ感傷的すぎてる気がする。

もともと、極端なマイナス思考なのは自分でもよく理解してるけど、これは少し……異常だ。

いけないいけない、と気分を切り替えるべくティーカップの縁に口をつけ、ミルクティーを流し込む。

……んっ!?

「甘……っ!？」

しまったっ。シロップ、入れすぎた……。

これじゃまるで、リンディ母さんの入れたお茶みたいだ。

いくら私が甘いものの好きだからって、そこまで落ちぶれてないよ。人間、止めたくないもん。

「……あう」

なんだか幸先のよくない出だしに、一抹の不安を感じざるを得な

私だった。

* * *

「ご注文の品は以上でよろしいでしょうか」

「うん。どうもありがとう」

ぺこりと頭を下げて、バックヤードに帰っていくウェイトレスさんの後ろ姿を見送りながら、私はうまくいかない不甲斐なさにため息をついた。

今日は、ハイダに滞在できる最終日。

こちらに来て数日、現地の人への聞き込みとかサーチャーの広域散布など、いろいろと手を尽くしてはみたものの、行楽地とあつてか人の入れ替わりが激しく、これといった手がかりは得られなかった。

そこで私は悪足掻きの前の腹ごなしに、レストランで早めの夕食をとることにしたのだった。

明日の朝一番の便で、本局に戻らなきゃならない。そろそろアースラも帰ってきてる頃だろうし、そもそも今回の単独行動は私の個人的なわがままなのだから、あまり長い時間は居られない。今夜が最後のチャンスだ。

……やっぱり、一人で全部こなすの、無理があるのかなあ。クロノとエイミイみたいに、補佐官をつけてもらったほうがいいのかもしれない。あとで兄さんに相談してみよう。

あっと、早く夕飯を食べてしまおう。冷めちゃったらもったいないもんね。

「んゝ……いい香り、おいしそう」

頼んだメニューは、デミグラスソースのかかったオムライス。ラ

イスをオムレツで包み込むタイプのものだ。

私にとっての縁起ものを食べて、今夜の捜査で手がかりが掴めるようにとこれを選んだ。

ちなみに、訪れた先々でオムライスのおいしいお店を探すのが、私の密かな楽しみのひとつだったりする。いわゆる食べ歩き、というやつで、ほかにもおいしいお菓子のお店もチェック対象だ。

——く、食いしんぼうじゃないもんっ！

「いただきます」

まず手を合わせて、作ってくれた人に感謝する。食事の作法の基
本。

そして、黄色い山をスプーンで崩し、たくさんの具材の味がとけ込んだソースといっしょにすくって、ぱくり。

ん……味はまずまず、かな。とりあえず、本局の食堂のよりおいしいのはたしかだ。

って、あれ？　なんか私食べてばかり？　……まあいいか、おいしいし。

オムライスをはみつつ、窓の外を見上げる。

雲一つない夜空は黒に近い紺色。距離の関係だろうか、地球のよりも大きく見える上弦の月。

薄く散らばった星と、金色の月が宝石箱のように、きらきらきらきらと輝いていた。

ふと、やさしく穏やかな蒼と、抜き身の刃みtain鋭い蒼——二種類の瞳が三日月にだぶる。

——この月を、“彼”も見てるのかな？

「！！」

私のもらした心のつぶやきに呼応するかのように、突如として配

置いていた半自立型のサーチャーが反応を示した。

魔力反応……それかなり強い。この波形は——
ゴン！

「ッ、イタッ」

勢いよく立ったから、ひざをテーブルにぶつけちゃった。
痛い……。

食べかけのオムライスが目について罪悪感。心の中でごめんなさいと謝って、伝票をひっつかむと一目散にレジへと向かった。

これを逃したら、きっと後悔する。そんな予感に突き動かされながら。

* * *

サーチャーの反応を頼りにして私がたどり着いたのは、薄暗い路地裏だった。

目の前に続く夜闇は月の明かりを拒絶するかのように深く、終わりのない底なし沼みたいだ。

「……ッ」

奥から漂う強烈な異臭に、足が止まる。

鼻を突くような鉄臭い臭気。

これは——血液だ。それも大量の。

ついに訪れたアタリに歓喜し、逸る気持ちを押し殺して、警戒心を意識的に高める。

安易な油断は隙を生み、隙は即、死につながるのだから。

「すーっ、はー……よしっ」

深呼吸して覚悟を決めて。

白いマントと軍服を模したデザインのバリアジャケットヘインパルスフォームを展開し、長年付き添ってくれている私の無二のパートナー――“閃光の戦斧”バルディッシュを右手に掴むと、無明の闇の中へと進み出た。

――そこは別世界だった。

「う……っ」

口元を空いた手のひらで押さえながら歩を進める。

むせかえるような悪臭。

壁一面にはおびただしいほどの血痕。

澱みきった空気は異質で、ここが未知の異界かなにかと錯覚してしまうほど。

足を踏み出すたびに、柔らかいナニカ（……）を踏みつぶす粘着質な感触が伝わる。肉片らしきものが辺りにたくさん散乱していて、地面は真っ赤に染め上げられていた。

資料の写真と同じ……ううん、それ以上に壮絶で、ショッキングな光景。

惨劇の現場。そんな言葉がよく似合う死の気配が充満した場所の中心に――“彼”は、居た。

「――」

ビルの谷間から差し込む月光のスポットライトを一身に浴びて、まるで夜の世界を我が物顔で闊歩する王様のように悠然と佇む、黒に近い濃紺色の衣を纏った“彼”。

相対するのは、うずくまるようにしている――人影？ 暗くてよくわからないけど、人型であることは把握できた。

突然、言霊が響く。

「灰は灰に」

歌うように。

「塵は塵に」

祈るように。

「――俺がアンタにしてやれることは、“これ”だけだ」

よく通る、凜然とした声が耳に届き、私は息をのむ。

“彼”の右手に携えたなにか――鏢の中心部分に不気味な瞳の意匠が施して、波打つような刀身に見慣れない文字を刻んだ1メートルほどの奇妙な長剣の切っ先が、天に差し向けられた。

軽く柄に添えられる左手。

蒼銀色の魔力が燐光を散らして刀身を覆う。

「だから、――――」

ささやくように発せられた最後の言葉はうまく聞き取れない。

「グウるおおオオオオオオッ!!」

身の危険を感じたのだろうか、人影が立ち上がり、地の底から響くようなおぞましい雄叫びをあげて“彼”に襲いかかる。

だけど、“彼”は動じない。

「ただ安らかに、眠ってくれ」

振り下ろされる白刃。稲妻のように鋭い一閃。

闇に咲く紅い華。

苦痛に唸り、身も凍る断末魔の声。人影が崩れ落ちる。

私は、“彼”が人影を断ち斬ろうとしていることに気づいていたけど、動けなかった。止めることも、できたはずなのに。

——それはきつと、鮮烈なまでに光り輝く、どこか懐かしい蒼銀の煌めきに魅せられていたから。

戯曲の一ページみたいなのこの場面に、割って入りたくないって思ってしまったから。

しゃんっ。指先についた爪を刀身にはわせて露を拭い、振り向く“彼”。

夜の闇よりも色濃い、艶やかな漆黒の髪と顔にかかった淡い月の光が、一見粗野な、それでいてどこことなく品のある顔つきと相まって、“彼”の容貌を高貴な悪魔のように見せている。

そして、ひどく真剣な——もの悲しい色をたたえた鮮やかな蒼い瞳がまっすぐ、私だけを見据えていた。

——金色の三日月が見守る下、私は、名前も知らない“彼”と三度目の再会を果たした。

やさしい月の光が、紺色の空から静かに落ちてくる。

私は息をするのも忘れて、黙りこくったままの“彼”と睨み合いを続けていた。

すぎた時間は、一分？ それとも十分？ ……時間の感覚がバカになっちゃいそうだ。

バルディッシュを握る手のひらがじとりと汗ばむ。

「……で、こんな夜更けに何のご用かな、“魔導師”のお嬢さん？」

ようやく“彼”の口から紡がれた言葉はおどけたように飄々としていて。子ども扱いされてるみたいでちょっとかんに障る。

いろいろな意味でぽかんとしてしまった私は、動揺を押し隠して平静を装い、言わなきゃいけないことを口にした。

「時空管理局です。この現場について事情をうかがいたい。武装を解いて、投降して」

「俺がこれ（・・）に関与しているとどうして思う？」

「これだけの状況証拠があれば十分だよ」

「さて、それはどうだろう。関係してるかもしれないし、違うかもしれない」

要領を得ない人を食ったような物言い。表情もどこか軽薄だ。

……論点をズラされてる。その手には乗らないよ。

「そんなの関係ない。あなたを拘束して、それから話を聞けばそれで済むことだ」

「ほう……」

今の返答のなにが楽しかったのか、“彼”が唇を薄くゆがめる。クツクツともらす軽薄な笑みに、私は期待を裏切られたような——そんな苛立ちを感じ始めた。

「道理だな。事実は数多あれども真実って奴はいつでも一つだ。

だがな、お嬢さん。質問して、何でもすんなり答えが返ってくるなんて思わないことだ。人間ってのは誰しもが何かを偽って生きてるんだから。俺しかり、君しかり、ね」

「なにを……」

煙に巻くような意味深なセリフに鼻白んでしまう。私のなにが偽っているっていうんだろうか。

返す言葉を脳裏で懸命に探していた私に、“彼”はにやりと人の悪い笑みを見せて、バックステップで数歩後ろに下がる。

それから、ばさりとネイビーブルーのコートがひるがえして背を向けた。

「え」

大げさに裾を振り回した“彼”は、そのまま脱兎のごとく暗闇の中に走り去る。

見事としか言いようのないその逃げっぷりに、私は呆氣にとられてしまつて。

「あっ！ ま、待って！」

すぐに意識の糸を紡ぎ直し、あわてて彼の後を追う。

視界の隅に、“彼”が斬り倒した人影——きれいに真っ二つにされた二十代後半の男性の遺体が映った。

身なり自体は悪くないから旅行客？　でも、服の端々が切れてたり解れたりしてて、浮浪者みたいだ。

そして、一番の異常は——

（——うん、今は考えないでおこう。あのひとを追いかけるのが先決だ）

余計な思考をカットして、追跡に専念する。というか“彼”、足が思いのほか早いからそんな余裕ない。

最近、さらに身体能力が上がってきた感のある親友のひとり、すずかと同じかそれ以上かも。

5メートルくらい先をひた走る“彼”。袋小路になってる行き止まりに差し掛かると、なにを思ったのか勢いを保ったままビルの側面に足をかける。

するとそのまま壁を足場にトントントン、と軽快な足取りで駆け登っていつてしまった。

「……」

あまりの暴挙にあ然とする。言葉が出ない。

なんて技量と体力の無駄づかいだろう。伊達や酔狂にも程度があるんじゃないかな？

そこで、はたと思いついた。

どうして、私は“彼”が飛べない可能性」を真っ先にあげなかったんだろう。陸戦魔導師だってこともあるかもしれないのに。

自分の不可解な思考に心の中で不思議に思いつつ、魔力を練り上げて飛行魔法を発動。バルディッシュのサポートの下、慣れ親しん

だ術式が私の身体を重力から解放し、金属質のソラレットがアスファルトを離れた。

ふわり。マントがはためく。

体勢が安定したのを確認してから速度を一気に上げて、壁面と平行に飛行。ずいぶん先まで行ってしまった“彼”の追跡を続行する。

——とと、捜査本部に報告しなきゃ。ホウ・レン・ソウは社会人の基本の“き”だ。

『こちら、テストロッサ・ハラオウン執務官。本部、応答願います』
『——はい、どうされましたか？』

急上昇しながらオペレーターを呼び出す。私が捜査中なのは伝えであるから、わりかしすぐに返答が返ってきた。

『事件の重要参考人と遭遇、現在追跡中。交戦が予想されるため、周辺区域に強装結界を展開して隔離を。それから、被害者と思われる遺体の回収もあわせてお願いします』

簡潔に事態を報告して、結界の構成を依頼。このまま“彼”を追いかけていけば、戦闘になることは明らか。

市街地での戦いがどれほど危険なことかは、なのはの姿を見て痛いほどわかってる。

『位置を確認しました。武装隊の派遣は必要でしょうか？』

『いいえ。私一人で十分です』

『了解しました。御武運を』

『ありがとう』

オペレーターの了承のあと、ややあって広がった結界空間。仕事
が速くて助かる。

相手もたぶん、閉じこめられたことに気がついていいるだろう。だけど、それに対するアクションがあるとは思えない。

もしもそのつもりなら、最初、私に遭遇した時点で転移なりなんなりで逃げてしまったはずだから。

そして予想どおり、ビルの屋上に悠然と立ち待ちかまえていた黒髪の子。風にあおられて、コートの裾がはためいている。

左手をボトムのパケットに突っ込んで、右手に持った長剣を気だるそうに担ぐ。なんだか不良っぽい。

「……………」

私の姿を確認した“彼”は、妖しく微笑すると、きびすを返して遁走を再開。獣のようにしなやかな走り、ビルからビルへと次々に飛び移っていく。

誘ってる。あからさまだ。

——いいよ。この追いかけてこ、つき合ってあげる。

「ぜったいに、あなたを捕まえるから!!」

叫び声が届いたのだろうか、少し先を疾走する“彼”が、笑みをこぼしたような気配をわずかに感じた。

＊ ＊ ＊

夜の街を駆けめぐるふたつの人影。

逃げるは、黒髪蒼眼の少年。

追うは、金髪紅眼の少女。

『P l a s m a B u l l e t 』

黒き戦斧が発した合成音声とともに生成された魔力スフィア。

「全弾——、行け！」

「ち……！」

逃げる少年の頭上から進路を塞ぐようにして、多数の帯電した金色の魔弾が雨霰のように降り注ぐ。

フェイトの放った誘導射撃魔法〈プラズマバレット〉が着弾し、その内に溜め込んだ高圧電流を炸裂、放電させて少年の行く手を遮った。

「——荒御霊」

少年は何食わぬ顔で言霊を紡ぎ、迫る電撃から軽やかなステップで逃れる。そのままの勢いで、前方を取ろうと飛来したフェイトに向け、長剣を逆手に握った右の拳を突き出した。

拳の先に生まれる闇黒の塊。

発露する莫大な魔力。彼が受け継ぎし破壊の力——その一端が、魔法を変質させる。

「ヴォーテックス！」

発動した魔法——〈ヴォーテックス〉は、その像をぶらせて無数の弾丸と化す。

神の力の片鱗を揮う〈荒御霊〉により拡大された〈ヴォーテックス・ファランクスシフト〉とでも呼ぶべき夥しい数の黒球が一斉に斉射され、金の少女に襲いかかる。

前面にばら撒かれた魔弾の大群。顔色を一瞬だけ変えたフェイトは、即座に突撃。臆することなく魔弾の中に飛び込んだ。

「くっ！　——こ、のっ！！」

弾幕にできた密度の薄いわずかな隙間。フェイトはそこを、舞うように、踊るように、微細かつ丁寧な制動と卓越した体勢制御を駆使してほぼ速度を落とさずにすり抜け、少年に迫った。

さすがにいくつかの魔弾は避けきれずにかすり、彼女のバリアジヤケットに傷を残す。

然しもの彼も、少女のあまりの無茶っぷりに瞠目し、同時に彼女が何も変わっていないことに密かな笑みをこぼした。

そんなこととはつゆ知らず。弾幕を抜けきったフェイトは、円心運動の流れる動作でバルディッシュを横薙ぎに払う。

それに合わせ、少年の携えた異形の長剣——デモニックブルームが跳ね上がった。

甲高い太刀音が鳴り響き、結界空間の静寂を破る。

「ツチ……」

「く、うっ！」

火花を散らして鬨ぎ合うバルディッシュとデモニックブルーム。顔をつき合わせるようにして、困惑と戸惑いの色を写した紅と好、奇と獐猛な光を宿した蒼——ふたつの視線が交わった。

「事情を聞かせて！」

「「話してもきくとわからないから」」

「っ！？」

芝居がかったセリフに、強い既視感を覚えたフェイトの意識に出来た一瞬の隙間——それを見逃す少年ではない。

「シッ！」

半身の状態から、腰の捻りで放たれた左の手刀。顔面を狙った遠慮も加減もない一撃を、首を傾げることで何とか躲したフェイトは、いったん後退。体勢を立て直そうと距離を取る。

「まだだ！　――走れッ！」

休む暇は与えないとばかりに少年は追撃は続く。

光子の刃へオリハルコンブレードを纏わせた長剣を、左手に持ち替えながら横薙ぎに一閃。

蒼白い魔力が鋭利な光波となって低空を滑る。

「つ、と。――って、わっ!？」

それを飛び越えることで回避したフェイトの眼に映った光波の群。袈裟斬り、斬り上げ、唐竹割り――連続して放たれた斬撃が、猛スピードで飛来した。

フェイトは、光波の嵐を前に雷速の集中で魔力を練る。

『S o n i c M o v e』

彼女の十八番、おはてへソニックムーブが発動。剣を振りきった格好の少年の目の前で、金の少女が残像を残して消え去った。

（――取った!）

一瞬にして少年の背後に回り込んだフェイトが、バルディッシュを気持ち加減気味に振り下ろす。

明確な敵対者相手だというのに、大けがをさせないように手加減してしまうのは、彼女の溢れる優しさ故だろう。

ごめんなさい。小さく呟いたフェイトの思惑はしかし、大きく外れた。

「うそ、なんで!？」

「如何に速く、眼で追えなくとも、そこに来るのがわかっていれば合わせるのなんて容易いのさ。背後に回りたがるのは君の悪い癖だな、修正しておけ」

背後から強襲する戦斧にピタリと白刃を合わせた少年は、したり顔を作り、驚愕に動揺している少女へと斬りかかる。

速度を最大の武器とするフェイトの神速を予測し、あまつさえ防いで見せた人間などまず居ない。少なくとも、初見では。

「ッ、知ったような口を!」

「知ったような口、か。なかなか面白いことを言うね」

「さっきからごちゃごちゃと! なにが言いたいの!？ あなたは
いったい——私のなんなの!？」

刃を数え切れないほど合わせ、言葉を投げかけ、交わし——フェイトはわだかまっていた感情を衝動に突き動かされるまま吐き出した。

「それを解き明かすために俺と戦っているんだろう？ ならば横着せず、俺を討ち倒して見せろ、“魔導師”ッ!」

返答は、暴風のごとき斬撃。

「違う! 私の名前は……そんなじゃないっ!」

剣圧に弾かれ、吹き飛ばされながら、フェイトが咆哮する。

主の叫びに呼応して、バルディッシュの柄の先に組み込まれた機構が可動。内蔵されたリボルバー式のカートリッジシステムが、魔力の弾丸を炸裂させる。

突き出された左手。発生するミッドチルダ式の円状魔法陣。それを取り囲む、加速・増幅用の環状魔法陣。

「私の名前は――フェイト・テストロッサだ!!」
『Plasma Smasher』

膨れ上がる金色の雷光と魔力が臨界点に達し、解放された。

フェイト愛用の砲撃魔法へプラズマスマッシャーが、一条の光芒となって闇を斬り裂く。

着弾。爆発。轟音。

「はーっ、はあ……っ」

巻き上がった粉塵が、夜風に吹かれて散っていく。

「――ククッ、やるじゃないか。こんなに早く“羽根”を使わされるとは予想外だ」

愉悦と余裕を隠そうともしない声。

雷光を遮ったのは、全てを包み込む“慈愛”の橙色を纏った白亜の大盾。

ぱきんと音を立てて、七枚の白き“羽根”へと分離する。

「……さあ、第二ラウンドの開始だ。せいぜい愉しませてくれよ？」

七枚の“羽根”を侍らせた闇色の髪 of 魔王が、その大海を思わせる蒼い瞳を妖艶に光らせた。

都市の中心を流れる大きな運河を滑るように飛翔する少年の前方に、二房の美しい金砂の髪を靡かせたフェイトが躍り出た。

同時に動いた二色の光。

魔力刃が干渉し、金と蒼の爆光がスパークを起こして巻き起こる。余波で瀑布のような水柱が立ち上がる。大量の水が、豪雨のように二人へと降り注いだ。

「ハハッ、愉しいなア！」

「くっ！」

速度はフェイトが優勢。少年が背負った白い“羽根”を全力で噴かせても、閃光の如き速さを誇る少女を引き離せない。

だが――――

「おっと、残念無念。攻撃はもっと創意工夫しなきゃ。あまり素直すぎるのも考え物だな」

斬撃をひらりとあしらい、“羽根”の一枚を足場にして急制動をかけた少年がからかい、煽る。

「っ、このっ！」

逆上ぎみに振るわれた大鎌を、少年は軽く解放した“プラーナ”で強化した運動性で難なく回避する。

幾度となく繰り返すフェイトの攻めはしかし、そのことごとくが躲かれ、防がれる。

少年は天性の勘と経験則で予測し、的確な——的確すぎるタイミングで往なしているのだ。

この不自然な攻防に苛立つフェイトは、心の片隅で不思議とそれは当然だとも感じていた。

そして何度目かの交錯。

「しつこいね、君も！」

「あなたを捕まえるって、言っただよ！」

魔力刃を弾き返し、作り出した刹那——バルディッシュがカートリッジシステムを作動させ、変形を開始する。

完成するのは金色の両刃を輝かせたバスタードソードヘザンバーフォーム。バルディッシュ・アサルトの限定解除フォームだ。

「本気で俺を墜せると思ってるのか？ 力の差くらいわかってるだろうに！」

「できないじゃない！ やるんだ！」
「っ！」

裂帛の咆哮から放たれた斬撃。

気迫と言霊が込められた強烈な一閃に、受けたデモニックブルームが少年の手中から弾かれる。

主の手を離れた長剣は、回転しながら綺麗な放物線を描いて遠方のビル群へ飛んでいった。

「——ああ、そうかいッ！」

どこか愉快そうに軽く笑みを浮かべる少年は、得物がなくなった

ことなどお構いなしに――むしろ「俺は素手の方が強い」と言わんばかりの様子で、蒼白い魔力を纏った中段蹴りを繰り出す。

「うっ！」

咄嗟に展開された魔法障壁。

10トントラックも斯くやという衝撃エネルギーの込められた蹴撃は、それなりの硬度を持っていたはずの障壁をベニヤ板のようにいとも容易く砕いた。

フェイトの腹部に突き刺さるロングブーツの踵。

「く、あ――っ」

自ら後ろに飛ぶことでダメージを軽減したフェイトは、極めて整った西洋人形のような面立ちを苦悶に歪めながら宙返る。すぐさま魔力を瞬時に高め、紫電迸る金色の球体を七つ生成。

「プラズマ――、ランサー！」

「へプラズマランサー」。フェイトが多用する射撃魔法により発生した、電撃帯びる七本の槍が一斉に撃ち出された。

「賢明の刃」

全てを見透かしたような冷たい声色。

少年の背から離れた七枚の“羽根”が青い光の刃を纏い、同数の槍を一撃の下に破壊する。

次々に起こった魔力爆発。

結界により滲んだ夜空に炎の華が咲く。

わだかまる噴煙。

突如、爆炎の中から飛び出した人影。

「はああああ——ッ!!」

最大戦速のフェイトが、大剣を下段後方に流した形で一直線に突撃。少年の懷へ飛び込もうと一気に迫る。

（ランサーは目眩ましか!）

彼女の狙いを看破した少年は、刹那よりも早い思考で最適な魔法を選択。

雷速の集中で術式が構築。

フリーになっていた右手の中に、夜闇よりもなお暗い闇の渦が創り出された。

「暗黒の雲よ、拡がり呑み込め！」

短めの詠唱を合図に掌の中の闇が一瞬だけ収縮、直後に爆発・拡大了。

「しまっ——」

少年とフェイトの間に暗幕のような雲の塊が発生する。突然、目の前に現れたそれに回避する間もなく、抗うこともできず、フェイトは飲み込まれた。

「これ……っ!?!」

フェイトの視界全てを覆い尽くすのは無明の“闇”——ヴォーテックスのバリエーションの一つ、〈ヴォーテックスクラウド〉。雲

状に変質させた闇の重圧により、飲み込んだ対象を押し潰す範囲魔法である。また、福次効果として視界遮断効果も併せ持つ。

彼女の全身に纏わりついた闇が、その脆弱な装甲を無慈悲にも削り取る。周囲に漂った漆黒の雲がジリジリと浸食し、僅かずつ、だが確実にバリアジャケットを侵していた。

（このままじゃ……）

状況を打開しようと思案するフェイトの耳に、風切り音が届く。咄嗟に掲げた大剣。闇の中でも輝きを失わない金色の刃に、高速で何かが接触する。続けざまに後方、上下左右と襲い来る何か。

「な——、きゃあっ！」

それは白い“羽根”だった。

相手の視界を煙幕で奪い、装甲を削り、さらに遠隔攻撃で攻め立てる——実に姑息で“彼”らしい、小細工を弄した戦い方と言えるだろう。

このままではじり貧だと判断したフェイトは、意を決して闇の雲から飛び抜けた。向かうは対戦者——黒髪の少年。居場所の方向は気配から概ね当たりをつけていた。

金色の閃光が闇黒の回廊を切り裂く。

開けた視界に映ったのは、さりげに造りのいい面差しを驚愕で染めた少年。

（今度こそ！）

そのまま特攻。一息に距離を詰め——横薙ぎ一閃。

ザンバーの刃が半月を描き、少年を断ち斬った（……………）。

そのあまりに軽い手応えに戸惑うフェイトは、見た。

バルディッシュ・ザンバーに斬り裂かれた少年の像がゆらりと霞むのを。その口元に浮かんだ痛みに歪む苦悶ではなく、愚か者を嘲笑う歪んだ三日月を。

「――残念、ハズレだ」

「幻術……!?!」

〈イリユージョナルスキン〉によって創り出されていた虚像が滲むようにして夜闇に消え失せる。

入れ替わりに〈不可視の神宝〉――光学迷彩で姿を隠していた少年が、幻術に気を取られた少女の死角、やや後ろに現れる。

振り返るフェイト。

七枚の“羽根”が蒼白い燐光を噴出。少年は、右足を大きく引き、左足を突き出す体勢で呐喊した。

「はああああッ!　でやあああああ――ツツ!!!!!!」

莫大な推進力を乗せた強力無比な跳び蹴りが、無防備な少女に直撃する。

全てを粉碎する古の一撃を一身に受け、金色の魔導師は悲鳴もあげられない。小規模な魔力爆発と衝撃波を残して、後方の建造物に激突した。

「か、は……っ」

衝撃で全身を強打し、フェイトの小ぶりの唇から吐息がわずかな血液とともに吐き出された。

〈エンシェントストライク〉の直撃を受け、外壁に磔はりつけにされたフェイトの前に十三枚の翼を広げた魔王が光臨する。

「んっ！ 抜けなっ、くっ」

見事に両手両足がコンクリートに埋まり、抜け出せずもがく。
装束に隠れてはいるものの、“女”の匂いを漂わせ始めた豊満な
肢体が締めつけられて、ひどく背徳的な雰囲気醸し出している。
そんな少女の姿を、悪魔のように柔らかな微笑を浮かべて眺め（
愛で）ていた少年が気取った風に口を開いた。

「初めて見たとき（…………）から思ってたことだけど——」

ぐいっと、少年の顔が近づき、フェイトがやにわに頬を赤らめる。

「君って、かわいいね」

「っっ!？」

「金色の髪も、大きな紅い瞳もすごく綺麗だ」

続けて放たれたストレートな賛美の言葉に、フェイトはかああつ
と音を立てて赤くなる。もはや耳まで真っ赤だ。

混乱を極める少女の様子に満足げな少年は、鉤爪のついた左手を
薄紅色に染まった白皙の肌にゆっくりと伸ばした。

「う、えっ、と、あ、その…………あ、あの…………」

頬を優しく撫でられ、盛大に吃るフェイト。「そういう純情な反
応もいいな。ますます好みだ」とのたまう少年の指先が、彼女の唇
から垂れた血を拭い取った。

「な、なにを言って…………」

「うん？ 何って、君がとてもキュートで好ましいって話だけど？」

「あう…………はううっ」

破裂しそうな心臓の鼓動と、湯気が出そうなくらい沸騰した頭で何が無だかわからなくなるフェイト。紅い瞳がくるぐるし始めた。

「さあ、もつと君のかわいらしい姿を見せてくれ」

「うっ……、ん……っ！」

その時、壁に埋もれていた左手が偶然すっぽ抜ける。

そのまま、反射的に――本能的に身の危険を悟ったのかもしれない――放たれた神速の張り手が、少年の右の頬を打った。

まさに雷神と言わすべき一撃である。殴られた方は紅い閃光を見たとか何とか。

「あっ！ ご、ごめんさい」

「っ……。ふふっ、からかいすぎてお姫さまはご立腹かな？ ……」
まったく、君は本当に愉しませてくれるね」

口の中を切ったのだろう、少年の唇の端から流れ落ちる紅い筋。しかし、彼は飄々とした態度を崩さず、不敵に笑むと掌を街並みに向けてかざす。

瞬間、見えない手にでも操られたかのように音もなく飛来したデモニックブルームを掴み取ると、未だ混乱収まらないフェイトに背を向ける。

「え、あ――、ま、待って！ 私、まだなにも聞いてない！」
「残念、そっちは次の機会にしてくれ。じゃあ、“またね”」

言いたいことだけ、やりたいことだけやって、自分勝手極まりない黒髪の魔王は、お得意の空間転移で闇に溶けて。

「……あなた、は——」

ひとり、取り残された少女は、彼に触れられた頬を無意識の内に、何度も何度も……撫で続けていた。

＊ ＊ ＊

ファー・ジ・アース。

アンゼロット城内の特設転送室。青い光を放つ巨大な魔法陣の前に五人の男女が集まっていた。

「というわけで、みんなには異世界に行ってもらおうと思います！」

おなじみ巫女服姿の赤羽くれはが薄い胸を張って言う。

「くれは……アンゼロットに似てきたわね」緋色の長い髪が美しい少女が、ぼそりと呟いた。

「くれはさん、エリスちゃんが先に向かってるって本当ですか！」
続くのは碧い髪碧い瞳の自称清純派。無駄にハイテンションである。

「うん、そうだよ。先に行ってみんなのことを待ってるよ……たぶん」

「ひさびさの出番ですからねー。あたし、がんばっちゃいますよっ！」

「うん。まあ、がんばって」
「あれ？　くれはさん、なんだか言葉にキレがないんですけど、なぜに？」

「いやー、じつは翠ちゃんじゃなくて別の人に頼む予定だったんだよねー。でも、治療が得意な人はみんな出払っちゃっててさ。つまり、数合わせ？」

ちなみに、自称清純派の相方は任務で不在だそう。

「がーん！ ひどい、よりにもよって数合わせだったなんてっ。あんまりですっ！ 横暴だーっ、あたしにも出番をプリーズっ！」

「翠、うるさい」

「は、すみませぬ」

緋色の少女の一言で碧色の少女は、即座に自慢のよく動く口を閉じた。

このやりとり、二人の力関係を如実に表していると言えよう。

ちなみにこの二人、不在のエリスとあわせて親友同士の間柄である、一応。

一方、姦しい女子三人を置いて、男子二人はシリアスで重い空気を纏っていた。

「相手はシャイマール、か……」灰色に近い黒髪の少年が、柔和な表情を僅かに曇らせた。かの魔王に何か思うところでもあるのだろうか。

彼の様子に緋色の少女は心配そうな視線を送る。

「……」背の高い、茶髪の青年は拳を握りしめ寡黙に決意を固める。シャイマールの側に自分が追うべき“彼女”も居るはずだから、と。

「まあ、そゆことで。じゃあさっそく転送を——」

男子二人の重たい空気を払うべく、努めて明るく号令を発しかけた。それは。その時、部屋の外から怒号が聞こえた。

「赤羽守護者代行はどこだ！？」「またいつもの発作か！」「まだ遠くには行ってないはずだ！」「探せ探せ！」

「はわっ、もう見つかっちゃった!？ はわわっ! じゃ、じゃあ、あたし、今から逃げ隠れするから、みんながんばって」

言うが否や、駆け足で突風のように逃げ去っていくくれば。四人は顔を見合わせ、苦笑する。

未知の異界に渡る直前だというのに何とも締まらない出発だ、と。

ミッドチルダ上空。

近未来的な都市群から数千キロの位置に悠然と浮かぶ巨大な結界、月匣。

その内部に、薰り高いお香の香りが漂うサロンがあった。

一見派手さはないものの、その実どれもが一流の品でしつらえた家具や調度品。趣味のいいそれらは、この空間を創造した人物の趣向がよく反映されていた。

そんな室内に、可憐な少女のドスが利いた声が響き渡る。

「――はあ？　なんですって？　もう一度言ってみなさいよ」

声の主、ゆったりとした造りのいいソファ―に寝そべり、不愉快そうに形のいい眉を吊り上げる銀髪金眼の美少女、ベールⅡゼファ―である。

「ああ、何度でも言ってやる。お前は遊びすぎだと言ってるんだ、ベル」

対するのは、こちらも不機嫌そうに細めた瞳で寝そべる少女を見下ろす黒髪蒼眼の少年。今日は学ラン風の黒い制服を身に着けていた。

「あんた、あたしに喧嘩売ってるわけ？」

金色の瞳がギラリと光る。

ベルの感情の高ぶりに呼応して漏れ出した魔力が、黒い陽炎のよう揺らめく。

二人の間に流れる剣呑な空気に、ドレスを新調したアゼルⅡイブリスがはらはらと見守っていた。大好きなベルと、それなりに友情を感じている友人が喧嘩をしていて不安なのだろう。

「俺は事実を言ったままだ。余計なことばかりして、本筋を疎かにするその癖を何とかしろ。今のままのペースだと“ヤツ”が覚醒するのは時間の問題……だよな、リオン？」

「……ええ。小物は順調に排除出来ていますが、肝心の“本体”は未だ未確認です。今までの傾向から推察するに、この次元宇宙に巣くって居るようですが……」

二人から少し離れた位置のイスに座り、何を考えているかわからない微笑を浮かべて事の推移を静観していたリオンⅡグンタが、簡潔に答える。

そのやり取りを見やり、ベルは身体を起こして鼻を鳴らす。

「ふん。そんな建前じゃなく、本音を吐き出したらどうなのよ？

……「オトモダチを傷つけられてボクは怒ってます」、ってね」

ピシ、と空気が凍りついた。

アゼルは後に、ぷちつと何かが切れる音が聞こえたと言ったとか何とか。

「ベル……お前」

凶星——それも、一番触れられたくない部分を突かれた少年は、一瞬にして殺気立ち、蒼白い殺意の炎を瞳に宿してベルを睨みつけ

る。

「ふんっ、やるってんなら相手になったげるわよ？　この軀が現し身だからってなめてんじやないわよ坊や（・・）」

ソファーから立ち上がり、いつもの腕を組むポーズで睨み返したベル。極北の視線を向けられてなお、好戦的な嘲笑を浮かべて退かない。大魔王の誇りに賭けて、若造なんぞに負けてたまるか、と言いたげだ。

二柱の大魔王が垂れ流す人外の魔力の渦に床が悲鳴を上げ、調度品が恐怖に震えるようにガタガタと揺れ出す。

室内の大気が帯電し始め、月匣全体が大きく振動し、常人なら卒倒して余りある殺気に満ちた異常空間が形成される。

もっとも、この場にただの人など元とより居はしないが。

「ふ、ふたりとも、ちょっと落ち着いて。ケンカはよくないよ」アゼルが我慢しきれず、間に割って入った。

「アゼル、あんたは黙ってなさい。このクソガキに、力の差つてのを叩き込んでやるんだから」

「はっ、ごちゃごちゃと偉そうに。餓鬼はお前だろうが、このペチヤパイ」

「ペちゃっ！？　なあんですってえっ！」

「あん？　言葉が難しすぎてわからなかったか？　なら他の言い方をしてやるよ。ナймネ、虚乳、幼児体型、抉れ胸！」

普段は割と紳士的な彼の、らしくない暴言。よほどベルに本心を暴かれたのが腹に据えかねたのだろう。

「なな、な——！？！？」

ぷちっ。

ベルの中で何か大切なもの——矜持とか、体面とか——が切れた。
というか、自ら切った。

「ここ、コロスっ、コロスわっ！ あんたはここでブッコロスっ！
！」

「やってみろよ、洗濯板！」

「むきいっっっっ！！」

「だめだよベル！」とアゼルに羽交い締めになれながら、じたばた
ともがいて「ちちか！ やっぱりデカいちちがいいのかっ！」とベ
ルは涙を流しながら、血を吐くように叫ぶ。

アゼルの豊満な胸が後頭部に当たっているのも彼女の怒りに油を
注ぐ一因かもしれない。

一触即発。

まるっきり子どもの喧嘩のようなやり取りだが、彼らは曲がりな
りにも裏界魔王。なりふり構わず全力全開で殺し合えば、惑星など
瞬く間に消し飛ぶだろう。

トサカにキて退くつもりなど端から二人に涙目なアゼル。リ
オンは収拾を図る気などさらさなく——ルーによく似た6歳くら
いの少女を伴ってサロンにやってきたばかりのエイミーは、「あら
あら」と楽しそうに困惑するばかり。

「死いいねえええっ！！」「消し飛べ！！」

怒りが頂点に達したベルと少年が、同時に大規模魔法を発動しよ
うとしたその時——

しゅらん、と澄んだ鈴の音が鳴り響いた。

「じゃじゃーん！ みんなのアイドル、超公パールちゃんのお帰り

よーっ！」

天真爛漫な声と共に現れたのは、黒目がちな黒い瞳の小柄な美少女。

小さな肢体を白い小袖に緋袴の巫女装束で包み――袴は膝上で裁ち切れ、ミニスカートのようになっていたが――、長いブロンドの髪を鈴の突いた紐で纏め、肩に届くほどの長さに垂らされている。彼女の名は、“東方王国の王女”パール・クール。この次元世界に現在来訪している最後の裏界魔王であり、“蠅の女王”ベール・ゼファー、“金色の魔王”ルー・サイファーと並び称される裏界帝国四強の一角だ。

「はー……パールちゃん、がんばっちゃってもうクタクタ。エイミー、おなかすいちゃったからなんかちょーだい。今すぐちょーだい。こう、おいしくて温かいものがないー」

部屋に流れる殺伐とした空気など知ったことかと我が物顔のパール。ドカッとイスに座って、早速わがままを言い始めた。

保有する魔力や、単純な戦闘力だけなら裏界第二位たるベルをも凌ぎ、現在の統治者にして最強のルーにすら匹敵するとの声さえ挙がるほどの彼女だが、その性格にはいささか以上に難がある。

一言で言うなら天上天下唯我独尊。独善的で気性が荒く、子どものように幼く、わがままで残虐。ベルやルーと同じ爵位は相応しくないというアレな理由で“超公”を自称するような――つまり、アホの子なのだ。

「はい、ただいま。少々お待ちくださいね、パール様」

「はやくねー」

軽食を用意するためにいったん部屋を辞したエイミーに興味をな

くしたのか、巫女服の暴君は長テーブルの上にお茶請けとして置かれていたせんべいをバリバリとかじり始めた。

一枚食べきり、指先についた醬油をペロペロと舐め。

「……あれえ？　ベルとアルってば、バカみたいなカッコでなにしているの？」

灼熱の大光球を抱え、睨み合ったままの格好で停止していた二人にかけられたのは、無情な言葉。

「……」「……」

そのマイペースぶりに、魔力が霧散し、強烈な殺気が急速に萎えていく。

「あーあ、バカらしい。やめよ、やめやめっ」

言葉通り、白けた様子のベルがもと居たソファーに戻る。安心してようやくに僅かに笑みを浮かべたアゼルが、彼女について隣に座る。

ついでにベタベタとし始めた。

一見うっとうしそうなベルだが、本気では邪険にしていないあたり満更でもないらしい。

“無差別プラーナ吸収”という災害級の能力を持つアゼルだが、こちらに来る際、とある魔導具の欠片を組み込んだへホームクルス✓の軀を仮の器にすることで、その能力をある程度抑制——代償に、戦闘力も格段に下がっているが——していた。

さすがに直接肌に触れれば吸収されてしまうものの、相手は無限のスタミナを誇るベルだ。蚊に刺された程度にしか感じていないだろう。

余談だが、裏界に居るアゼルの本体は一面の荒野の真ん中で、全

長一メートルのビックサイズ“ぽんこつくん三百二十六号”——ア
ゼルのドレスと同じく、全て魔殺の帯と同質の素材で作られた特別
製だ——に乗っかって、ふかふかしてたりする。

「ふう……ん？」

正氣に戻り、ばつが悪そうにばりばりと天然パーマ気味の髪をか
き乱していた少年の服の裾を、何者かがちょんちょんと遠慮がちに
引っ張った。

視線を落とせば、物欲しそうな瞳で見上げている紺色の髪の幼女
——もとい少女。

「テスラか。どうした？」

「わたしもおなかすいた」

彼女はテスラⅡ陽炎Ⅱフラメル。ルー・サイファー復活の媒体と
されたウィザードの少女だ。

身体を乗っ取られてしまったものの、未だにその心は残っており、
ルーの精神が不在の時などにこうして表に出てきてはその茶色の瞳
を寂しさに染めている。

なお、二人の見分け方は髪や瞳の色、そしてドリルになっていな
いヘアスタイル。

「そっか。いつも通りチョココロネでいいかい？」

「うん、それでいいよ」

儚く笑むテスラに微笑み返すと、少年は自らの月衣に常備してあ
るチョココロネを一つ取り出して手渡す。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

お礼を言い、はむはむと幸せそうに大好物をほうばるいろいろな意味で幸の薄い少女の頭を、少年がぽんぽんと軽く撫でる。ルーが彼の姉なら、テスラは妹分のようなものだ。

テスラの方はといえば、まだまだ警戒心を感じてはいるものの、それなりに打ち解けてきている。だが少年には、他に“一番”のいる彼女の心の裡に、深入りするつもりはない。せいぜい大事に扱って、「お姫様をさらった悪い魔王」という役割を楽しむだけ。

「あーっ、あたしもそれ食べたーい」

「パールあんた、今からなんか食べるんじゃないの？」

「それとこれとは別の問題っ。というわけでちょーだい」

「はいはい。――ほれ、こいつはおまけだ」

「お前のものは俺のもの。俺のもの俺のもの」、を地でいくパールらしい要求。彼もそれを重々理解しているようで、おまけにメロンパンもつけて機嫌を取る。これは単に、誑しスキルによる条件反射かもしれないが。

「おー、あいかわらず気が利くねえ。アルのそういうところ、あたし好きよ?」

「そりゃどうも」

冗談半分のパールに、こちらも本気にしない少年は肩をすくめる。気が利くのは子どもの扱いに慣れてるからだよ、とは口が裂けても言えない。口にしたら最後、消し炭にされること請け合いである。

「……私も、いただいて宜しいですか?」

「いいよ、何がいい?」

「では……メロンパンを」

同調して請うリオン。

渡されたのは、輝明学園秋葉原校の名物ふわふわメロンパン。もちろん、もっちりぎゅうぎゅうな“仕込む”方ではなく、ふわふわサクサクな“食べる”方だ。

「アゼルは？」

「じゃあ……、わたしもリオンと一緒に」

カリカリ。もふもふ。

夢中になってパンをほうばる多種多様な美少女たち。世界を滅ぼして余りある戦力が揃っているとは到底思えない光景だ。

「ん？ どうしたベル？ 君もほしいの？」

「べ、べつにいい」

意地の悪い少年の問いに、ベルは盛大に目を泳がせて興味がない風を装う。

しかし、視線は横でもふもふ味わっているアゼルの手元に釘付け。

「ベル、メロンパンおいしいよ？ 一緒に食べようよ」

「……サクサクした皮とふわふわとした中身のアンバランスさ……美味です」

「ベルがいらないっていうなら、代わりにパールちゃんももらっちゃおうかなー？」

カリもふを楽しんでいた三名からのコメント。

「うっ……ま、まあ、くれるって言うならもらってあげなくもない

わよ？」

「最初からほしいって言えばいいのに。はいよ」

「……むー。なんか釈然としないわー」

「気にするな、俺は気にしない。……って、これ久しぶりに言ったな」

プライドは目先の欲望にたやすく陥落し、不承不承な様子で焼きたてほかほかのパンにかじりつく。何だかんだ言いながら、結構おいしそうに食べるベルを見て、一同は何となく和やかな気分になる。
———そんな、近く始まる“パーティー”の前の一幕だった。

第22管理世界での後始末を終え、予定よりもずっと遅れて本局ステーションに帰ってきた私。

重い足取りでタラップを降り、発着場を通り抜け、おみやげ屋さんなどのエキナカのお店が立ち並ぶターミナルビルまでやってきた。たくさんの人で混みあった空港サロンのベンチに座って、ひと息。

「うう、疲れた……」

疲労困憊。ガクリとうなだれる。

“彼”との遭遇戦のあと、現地の捜査担当者と一緒に現場の見聞や、アレ（・・・）の処置を協議をしてるうちになんだかんだと時間をとられ……帰りの艦に乗ってる間、報告書の作成とかしてたらけつきよくほとんど寝れてない。カンテツだ。

——それに、“あんなこと”面と向かって言われたら、落ち着いて寝てなんていられないよ……。

「あ、う……」

わ、思い出したらふれられてた頬が熱くなってきちゃった。胸がどきどきしてるし。

冷まさないや。手のひらでパタパタと顔をあおぐ。

それにしても戦闘中に、か、かわいいだとか、きれいだとか、その……すっ、好き、だとか（注…それは言われてません。幻想です）——いったいなんのつもりだったのだろう。冗談にしてはたちが悪

い。本気だったらなおさらだ。どうかしてる。

でも……“彼”の言葉が、すぐうれしいって思っちゃってる私のほうが、もっとどうかしてるけど。

ともかくつ、強行軍はけっこうなれてるんだけど、あれだけの戦鬨のあとだとかかなり辛い。正直眠たい。今すぐベッドに飛び込んで、惰眠をむさぼりたい。

とはいっても、これから事の次第を報告しなきゃいけないから、おちおち休んでもいられなくて――――

「はぁ……」

思わず、ため息。

しなった気分を盛り上げようと、シャツの下に潜り込ませていたシルバーチェーンを引っ張り出して、きらきらときれいな光をこぼす金色の宝石を手のひらに乗せる。

そして、ギュッと握りしめ、胸に当ててまぶたを閉じた。

「……」

誰からももらったものなのか、いつから持っていたのかすらわからない。

……だけど、見ているだけでとてもあたたかな気持ちになって、どんなに辛いときでも、どんなに不安なときでも、挫けそうなときにだって、諦めないでがんばろうって思える――そんな不思議な力をくれる大事なネックレス。

「――ちゃん」

今まで何度、勇気をもらってきただろう。

だからかもしれないけど、なくしちゃいけない、手放したら絶対

に後悔するって感じてるたいせつなおまもり。私の宝物だ。

「――トちゃん」

……それはそうと、これからどうしよう。いったんアースラに顔を出しておこうかな？ ああ、でも、コレ（・・）を大至急ラボに持って行かなくちゃいけないし――

「フエイトちゃん！」

「ひゃいっ!？」

思案中に突然、大声で名前を呼ばれてビクツと身体がひきつる。反射的に、後ろに振り向く。

「あ、あれ、はやて。こんなところでなにしてるの？」

そこにいたのはブラウンの制服――ミッドチルダ地上本部の制服だ――姿のはやてだった。

両手を腰に当てて、あきれたような顔をしてる。

び、びっくりした。心臓がバクバク言ってるよ。

「「こんなところではなにしてるの？」ちゃうわ、まったく。艦の着いた時間はとくに過ぎとるのに、フエイトちゃんがいつになっても戻って来おへんから迎えにきたんや」

「あ、そうなんだ。ごめんね、ありがとう、わざわざ迎えにきてくれて」

「ま、フエイトちゃんがぼーっとしとるんは、今にはじまつたことちゃうしな」

いつものことや、と言葉を切ってこころ笑うはやて。

むうつ、なにげにひどいこと言われてない？

「あ、その人……」

ふと気づく。はやての少し後ろに控えて、白い帽子を薄紫色のシヨートヘアに乗せたとてもかわいらしい女の子が、私たちのやりとりを柔らかな微笑を浮かべて見守っていたことに。

「うん？ ああ、このヒトが例の“協力者”さんや」

「はじめまして、志宝エリスです。よろしくお願いします」

帽子をとって、ぺこりと軽くお辞儀した彼女——エリス。異世界からの来訪者。

このひとを見ていると、なんだか懐かしい雰囲気がある。……そうか、“彼”に似てるんだ。顔だちとか体格とか、そもそも性別違って違うのにどうしても面影を重ねてしまう。どこか神秘的な存在感、やさしげで人懐っこい表情、物怖じしない物腰、意志の強そうな眼差し——うん、やっぱり似てる。

「フェイト・T・ハラオウンです。よろしくね、エリス」

席を立ち、彼女にならって挨拶する。表情は笑顔で、言葉ははっきりハキハキと——執務官をしてて培った初対面のときのコツ。人見知りの私のせいっぱいの愛想で。

と、はやてが妙な顔をした。なんか私、変なこと言った？

「……フェイトちゃん。いちおう言つとくと、このヒト、私らより年上やで」

「えっ、そうなの？」

ちんまりしててかわいらしいから、てっきり年下だと思ったのに。いきなり呼び捨ては失礼だったよね。

「ごめんなさい、呼び捨てにしちゃって。年下だと思ったから、つい、その……」

「いいですよ、好きなように呼んでいただいて。それに、幼く見られるの、慣れてますから」

諦めをただよわせて苦笑するエリス——許可が出たので名前で呼ぶことにしよう——。なんだか、どよんとした空気を流してる。

……私、悪いこと言っちゃったのかな？

「まあ、そう思うてもしやあないな。なんせフェイトちゃんは——」

むっ、殺氣！

いつの間にか、はやてに背後をとられてたみたいだ。気配、感じなかったのに。

「こーんな、立派なモン持ってるんやから」

胸元へとやにわに伸びてきた両手をがっちりと掴んでガードする。

「つて、ありゃ、阻止されてしもた。これで通算十五勝二十二敗か。やるなあ、フェイトちゃん」

「……はやて、こういうのダメだっていつも言ってるよね？」

「ええやん、ケチケチせんと揉ませてや。減るもんやないし」

「減るよっ！　なんかいろいろと減るよっ、きつと！」

主に私の正気とか！

こんな人通りの多いところであれをやられたら、恥ずかしくて死

んじゃうよっ！

「あはは……。いいですよ、みなさん、年のわりに発育がよくて……」

「え、と、エリスさんどうしたん？」

「その点、私なんて……私なんて……ふふふっ」

うつむいて、表情のわからないエリスが乾いた笑いをこぼす。

幽霊みたいなかすれた声で、「あのロリコン、もう死んでるけど殺してやりたいです」とかつぶいてた。

な、なんかこわいよ。

#5 「夜闇の魔法使い」

本局ステーションの一角。

大きめの会議室を借り切ったの捜査会議———というか、私の報告

会みたいなのだけだ。

揃ったのはクロノにエイミィ、はやて以下ヴォルケンリッターのみんな——私がない間に新たな魔王と交戦したそうだ——、それからエリス。

報告書を兄さんに渡して、軽く情報交換したり、持ち帰ったモノをラボに届けたあと、やっとひと眠りでできたから体調は万全だ。

でも、ちょっとおなかすいちゃったから、お茶請けのマドレーヌ——エリスの手作りらしい——をばくつく。

もぐもぐ……。わあっ、これおいしい。あとでもっともらおう。

「シャイマールと、また遭遇したんだな、フェイト？」

「うん、それから少しだけ交戦したよ。……負けちゃったけど」

「そうか、テストロッサを下すほどの実力者か……」

「シグナム、すぐにでも戦いたいとかって思っただろ」

好戦的な瞳をギラリと光らせたシグナムへ、ヴィータがジト目を送る。

「い、いや、そんなことは無いぞ？ ああ、無いとも！」

「……うそくせえ」「嘘だな」「ウソですね」「ですう」

「うぐっ」

あわてて取り繕うシグナムだったけど、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル、エルフィと矢継ぎ早に畳みかけられたツツコミの前に沈黙。

「おバカなバトルマニアはほつといて。フェイトちゃん、報告よろしく」

「あ、うん」

はやてに促されたので、バルディッシュをプロジェクターにリンク。メモリに記録した映像を開始させる。ちなみにサウンドはミュートだ。あんなの、みんなには聞かせられないよ……。

あ、シグナム「主まで……」とか言って撃沈してる。

「まず、コレがラボに持って行ったモノの本体だよ」

写り出されたのは“彼”が断ち斬った“モノ”。人間の左半分に、不気味な正体不明の結晶体が寄生した……そんな物体。

「うげ、グロいなあ」「うわ、これはきつついね……」「……っ」

映像にみんなが口々に感想をもらす。

遺体は現地で検死中だけど、結晶体の一部を切り離してサンプルとして持ち帰ってきてる。その組織片は現在ラボで解析中。

「これ、冥魔——“闇の落とし子”です。やっぱり、そうなんだ……」

「エリスさん、その“冥魔”って？」

映像を食い入るように見ていたエリスが、なにかに気づいたようにつぶやく。彼女の口から出た知らない単語にはやてが疑問の声を上げた。

私も知りたい。どうやら事件解決に関わる重要な事柄のようだから。

「あ、はい、それはもちろん説明します。と、その前に……エイミイさん、これつないでもらえますか？」

「はいはい、おまかせ。互換できるプロジェクター、ちゃんと用意してあるよ」

エリスは、ナップザックから取り出した小さめのノートPCっぽい情報端末に、ケーブルを接続する。

「では、あらためて」

カタカタとキーボードを叩く軽快な音。

ヴンと機械音が鳴り、プロジェクターが再度映像を映しを始めた。

「“冥魔”、というのはファー・ジ・アース……いえ、主八界全体を滅ぼそうとしている勢力のことです」

映像には、奇妙な姿の生物と、その詳細を示したテキストが流れる。その姿形の禍々しさに私たちは揃って顔をしかめた。

……あっ！ これ、火災の時に戦ったのだ。えーと名前は……“闇の騎士”、か。

「複雑な背後関係や成り立ちについてはこの際割愛しちゃいますが、^{エミューレイター}侵魔と大元を同じとした、似て非なるものと考えてもらえばいいと思います」

のちほど詳細をまとめてプリントにしてお配りしますね、と続けるエリス。意外とちゃっかりしてるみたい。

「今回の件で一番重要なのは、冥魔が侵魔以上にやっかいだということですよ」

「厄介……どうということだ？」

すごく険しい表情をしてる兄さんの問い。たぶん、頭の中では今

後の方針とか、上層部への上申の方法とか、いろいろと考えてるんだろう。兄さんは責任感が強い人だから。

「侵魔とは、ある程度コミュニケーションがとれるんです。利害関係が成立すれば、力を貸してくれることだってあります。……エミユレイターとの戦いは、“外国との侵略戦争”と言えますね。

ですけど、冥魔相手にそんな余地はありません。ただ、全てを破壊し尽くし、全ての生きとし生けるものを闇に落とすだけ。彼ら冥魔と私たち人間は、完全に相容れない存在なんです」

実際に危機に直面してる世界の住人だからだろうか、その言葉はどこか重い。

彼女の雰囲気から、冥魔がどれだけ危険なものなのか察するのは簡単だった。

「あの映像にあった方は、おそらく冥魔によってヒトが変質した存在、“闇の落とし子”です。完全に墜ちたら最後、肉体的にも精神的にも変わり果てて、破壊衝動のまま命を刈り取り続ける……」

「そうなった場合、元に戻す手段は？」

「ありません。魂と精神が汚染されきる前に浄化するか、さもないれば……」

エリスが言葉を濁す。その続きは、わかる。わかってしまった。

ほかのみんなも同様で、押し黙ってしまふ。

私はふと思う。もしかして“彼”は……。

「そんなものがこの世界に……。なら、次元世界で多発している無差別連続殺傷事件も、その冥魔とやらが？」

「可能性はかなり高いと思います。それから、これは私の推測なんですけど――」

そう前置きして、藤色の髪の子はとても真剣な声色で言葉を紡ぎはじめた。

カツカツカツ……。リノリウムの清潔に保たれた床をパンプスの短めなヒールが打つ。

会議が終わってすぐ、私は資料の入ったケース片手にミッドチルダへ訪れていた。

目的はユーノのおみまい。それから、なのはの様子がどうにも気になったから。慰める……って言い方が悪いけど、なのはを元気づけたかった。

リズムカルに響く自分の足音を耳に入れながら、会議でのことを思い浮かべて私は思案の海に没頭する。

(……目的は冥魔の討伐かもしれない、か)

エリスの推理を要約するところだ。

シグナムたちの前に現れたルー||サイファ。そして、なのはと戦ったベール||ゼファ。

この二人はとても仲が悪く、普段は絶対に力を合わせたりしない。むしろ仲違いして、互いに足を引っ張り合うくらい——ちよつと人間っぽいかもしれない。そんな彼女たちが唯一、協力しあうのが冥魔の相手をするとき。

どちらも冥魔を目障りに思っていて、ときにはヒト——ウィザードとも共同するのだとか。

といっても、それ以上のことはわからずじまい。冥魔の排除は単なるついでで、なにか危険なロストログアを狙っていたり……もしかしたら単純に、この次元世界を武力制圧しようとしている可能性だ

つてある。

そもそも、どうして冥魔なんて存在がこの世界に現れたのかさえわかっていない。エリスもわからないそうだ。

だから、クロノは上の方に掛け合って魔王と冥魔に対するなんらかの対策を早急にとるよう、働きかけてみると言っていた。

——でも、たぶん結果は芳しくないと思う。

アースラを離れる前、兄さんがぼつりともらしてた。「この件に関して管理局の動きが鈍すぎる。まるで見えない“誰か”の意志に邪魔されてるみたいだ」と。

私もその意見に賛成だ。

ハイダでのことだってそう。現場レベルでの捜査はそれなりに進んだのに、時空管理局全体としてはやっと腰を上げた段階。仮にも執務官の私が、兄さんに資料を見せてもらいうまで知らなかったし、報道も未だにされてない。これはかなりおかしい。

普通、管理世界広域で殺人が多発しているなんて管理局の威信に関わる大きな事態なのに、動きは不自然ほど緩慢で。兄さんの言うように、何者かの妨害や圧力を受けているとしか思えない。——それも、かなり“上”のほうから。

もっとも、いち執務官でしかない私にどうこうできる問題でもないのだけれど。

それに——、

(……みんなには悪いけど、私は)

私は“彼”が、ほんとに敵じゃないのかもしれない。争わなくてすむかもしれない。

それがうれしかった。ほっとしてる。

そして、くやしくて、情けなかった。

* * *

ユーノの病室の前。

ちよつとためらったあと、軽くノックする。少し間をおいて「どうぞ」と聞きなれた……でも、いつもよりずっと力ない返事が返ってきた。

ゆっくりと戸を引く。

広々とした、真っ白な病室。

まず目に入ったのは、ベッドに横たわり、生命維持装置につながれたユーノの痛々しい姿。

そして――

「――あ……、フェイトちゃん……」

ベッドサイドの丸イスに座り、ゆらりと振り向く私の親友――かけがえのない友だち。満開のひまわりのような、春のひだまりのような笑顔がかわいらしい女の子。

だけど、今は見る影もない。

赤みがかった茶色の髪はつやを失い、輝き透き通っていた青紫の瞳も今やくず石同然……私の記憶にある彼女の姿は、まるでまぼろしか蜃気楼だったかのよう。

「えっと、なのは……」

少しこけた頬に目の下の濃いくま。無理やりに笑ってるのがわかってしまう。

やつれて焦燥しきったなのはの姿に思わずたじろぐ。

「……ユーノくんのおみまいに、きてくれたんだよね」

「あ、う、うん」

慌てて取り繕う。

声色は明るく、表情は柔らかに。なのはを元気づけにきたのだから、もっと朗らかに応対しなきゃ。

「ありがとね、フェイトちゃん」

「ううん、いいんだよ。そうだ、これ、その……捜査してわかったこととかをまとめた資料だから、気が向いたら読んでみて」

持っていたから小冊子を取り出して、紙製の花束——折り紙だらうか——の乗ったサイドボードの上に置く。あ、レイジングハート、返ってきたんだ。

なのはの返事は「うん」とだけ。あまり興味はなさそうだ。なのはと向かい合うように、パイプイスを置いて座った。

「それで、ユーノの様態……どう？」

ふるふると、力なく首を横に振るなのは。やっぱり、意識はまだ戻ってないらしい。

「そう……。ねえ、なのは」

「なに？ フェイトちゃん」

懸念だったことを思い切って尋ねてみることにする。

「なのは、家に帰ってる？ なのはの家族、みんなきつと心配してるよ？」

ここ半月、地球に帰ってない私が言えたことじゃないけど、なのはの様子はあんまりだ。ひどすぎる。

「あ、一度戻ったよ？ 着がえとか取りに行かなきゃだから」

とんぼ返りだったけどね、と世間話をするような調子でなのはが言う。つまり、それ以外は戻ってないってこと？

私は、頭がカッと沸騰するのを感じた。

「そんな……！ だめだよ、なのは。ちゃんと休んでないんでしょ？ このままじゃ、なのはが身体壊しちゃうよ！」

親友の無茶に声を荒げる。

すると、なのはは困ったふうにぎこちない苦笑いを浮かべた。

「私は……だいじょうぶだよ」

「だいじょうぶって——」

イスから立ち上がったなのは。私の言葉を背に、サイドボードに近づく。

「この折り紙ね、ユーノが助けた女の子からの贈り物なんだよ」

紙でできたピンクの花に指先で触れながら、囁みしめるような声色で独白する。

「「おにいちゃんがはやく元気になりますように」、だって。あんなに怖い目にあったのに、あわせちゃったのに……、そんなこと関係ないって笑って——」

「な、なのは……」

なのはの言葉には、痛いくらいにあふれる後悔が詰まってて。拒絶されてる、そう思った。慰めなんていらないと。

自分を責めて、責めて、責め続けてるなのはの背中中は小さくて頼りない。

「だから、私、休んでなんていられないよ……ユーノくんが、目覚めてくれるまで」

「……」

悲壮なことを悲痛な笑顔で言う親友に、私は言葉をなくして口をつぐんだ。

＊ ＊ ＊

ミッドチルダ北部、廃棄都市区画。

数週間前に起きた海第8空港の大火災に伴い、放棄および閉鎖された市街地である。

用済みとなって打ち捨てられ、今はひっそりと静寂に包まれたビル群の中心——交差点跡のアスファルトに、突如として青い陽炎と燐光を放つ大きな魔法陣が描かれた。

円陣の中に三角と三つの円を抱き、無数のルーン文字が書き込まれた複雑な魔法陣は、このミッドチルダ発祥の魔法や、ベルカ式と呼ばれる魔法で用いられるものとは全く別種の術式・術理によって生み出されたもの。

遠く因果の果て、世界線を異なる世界ファー・ジ・アースを発祥とする“夢見る神”の祝福を受けた神秘と幻想を操る魔法だ。

収まっていく光。

魔法陣のあった場所に、四人の男女が立っていた。

「……………。ここに、エリスがいるのね」

艶のある緋色の髪を乾いた風になびかせて、緋室灯が抑揚のない

声で言う。

彼女が纏うのは輝明学園の制服——紫のセーラー服に似た印象の黒いジャケットとミニスカート。そして、ニーソックスとコンバットブーツ。上着に、黒ロングヌスのコートを纏っている。

一見、普通の服に見えるそれらは、〈強化人間〉である彼女の肉体に備わる人外の身体能力を阻害しないよう、特別に用意された品だった。

「それにしてもずいぶんと寂れてますねー。誰かいないんでしょうか？」

碧いポニーテールをゆらゆらと揺らして、真壁翠がおのぼりさんのようにふらふらと周囲を見回す。

いろいろと軽そうな雰囲気振りまく彼女だが、伊那冠命神いささかのみことのかみという歴とした古き神の力を継ぐ〈大いなる者〉である。……とてもそうは見えないが。

服装は灯とは対照的に、何気に豊かな胸元に水色のリボンを配する清楚なデザインの白いロングワンピース。清純派を自称する彼女らしいチョイスだ。

「周囲に生体反応無し……どうやらただの廃墟ですね。ですが、フアー・ジ・アースと同等か、それ以上の文化を持っていると見て間違い無いようです」

〈人造人間〉——“ホムンクルス”特有の感知能力を駆使し、油断なく状況を把握、分析するのは、茶髪に青い瞳を持つ二十歳ほどの青年、大泉スルガ。

フアー・ジ・アースを守護するエリート集団“ロングヌス”に所属するウィザードで、上司であるくれはからくせ者ぞろいのメンバーのお目付役を仰せつかっていたりする。

「それで、これからどうするの、命？」

灯が振り向き、表情の乏しい面差しに隠しきれない親愛を浮かべ、最後の一人に問いかける。

「そうだね……とりあえず、エリスに連絡を入れてみよう。こっちに渡ったから繋がるはずだ」

黒髪黒眼、日本人らしい特徴の少年、真行寺命が答える。

見た目、頼りなさそうな彼もほかの三人と同じく一流のウィザードだ。服装は、シンプルなシャツの上におしゃれなジャケット、ジーンズというラフな格好。

なお、つい最近まで昏睡していたのに高校を無事に卒業できたのは、某下がる男並みの過密スケジュールをこなしたからだとか。

「わかったわ。さっそくO—P h o nで連絡を——」

「その必要はないよ」

灯のセリフを遮って、よく通る少年の声が響き渡る。

そして、塗り変わる“世界”。

「月匣——!？」

彼らの前方、開けた道路の中心に、学ラン風の黒い制服を纏った少年が紅い満月をバックに立っていた。

「ミッドチルダへようこそ、ウィザードの皆さん」

「君は、シャイマール！」

命が自らの“通り名”を呼ぶと、彼は飄々と底知れない笑みを浮かべた。

「ふっ、生憎だが。俺だけじゃないさ。ほら――」

少年が後ろを振り返る。

「つるーサイファー！」

因縁浅からぬスルガが、その名を強い口調で呼ぶ。

冷たい白銀の瞳で見下ろすのは、幻術で本来の姿を取り、真紅の豪華絢爛なドレスを身に纏った貴婦人、“金色の魔王”。鮮やかな紅が、裏界随一の美貌を彩る。

“誘惑者”が目立たぬよう主の陰に付き従っていた。

「ベールゼファー……」

幾度となく交戦した灯が、最大級の警戒心を露わにする。

“荒廃の魔王”と“秘密侯爵”を引き連れた“蠅の女王”が、妖しく艶やかな笑顔を零す。

本日の御召し物は、かわいらしい漆黒のパーティードレスと、いつものポンチョ。首もとの、紫のバラをあしらったチョーカーがチャームポイントだ。

「ば、パールクールさんまでいるんですかー!?」

理不尽な光景を前に、翠がとても情けない声を上げた。

しゅらんと鈴の音を鳴る。白と緋色の巫女服を身に着けた“東方王国の王女”が、尊大かつ傲慢に、その威厳を見せつける。

――裏界魔王、七柱揃い踏み。

まともなウィザードなら瞬時に死を覚悟し、この世を憐む強大な存在。命たちも例に漏れず、身を強ばらせる。

彼らの様子に、“皇帝”の息子を自称する少年は愉快そうに目を細め、口を三日月に歪めた。

「熱烈大歓迎だ。受け取ってくれ」

——空に浮かぶのは、血のように紅い月。

満ちる深き闇の象徴^{しるし}。太陽は熱を失い、鈍色の地平へ沈み、月門^{とびら}が開く。

耳を澄ませば、聞こえてくるだろう。あえかなる少女たちの囁きが。

それは甘い破滅に彩られた語らい。いずれ、“世界”に悪徳の華を咲かせる。

少女たちの名は、魔王——

そのしなやかな腕は命を摘み取るために。

その可憐な唇は死の接吻のために。

その美しい微笑は散りゆく愚者のために。

かくも、破壊と殺戮を愛するものたち。“世界”の裏側で、いつも機会を狙っている。

今宵もまた、紅い月が昇る。

そして、告げるのだ。

昏き祝宴の始まりと、死の舞踏の始まりを——

「俺たちに待ち伏せされていたことが不思議で仕方ない——、って顔をしてるな、アンタら」

予期せぬ襲来に戸惑い、狼狽するウィザードたちを嘲笑う黒髪の魔王。彼らを見やる瞳の冷たい蒼を変えないまま、ふと目の前の虚空を右手で掴み、握る。

「タネは簡単さ」

そこを起点として、徐々に姿を顕していく一振りの剣。

禍々しく波打った刃、魔の祝福と尽きない威光を意味するルーン文字の刻み込まれた刀身、鏢の中心にあしらわれた魔眼の意匠——そして、飛行機械としての内部構造を露わにしつつ、魔王の名を持つ“箒”——デモニックブルームが、主の手の中に顕現する。

「こちら（・・・）とあちら（・・・）を繋ぐ路を、始めに創ったのはどこの誰だと思ってる？　そこに誰が通るかなんて、把握しているに決まってるじゃないか」

「！！」

「通行料代わりと言っちゃなんだけど、創った路の入り口がどこに開くか決めるのも作者の特権だね。……この言葉の意味、わかるな？」

意味深に結尾を切り、少年はデモニックブルームを軽く振ると、

気だるそうに肩に担ぐ。

さらに、空いた左手をズボンのポケットに突っ込む姿は、とても柄が悪そうに見える。不良っぽい。

「じゃあ、私たちは……いえ、エリスは——」

「飛んで火にいる夏の虫、ってね。志宝エリスは……何処か、見知らぬ土地で野垂れ死んでるのかもな」

「ッ！」

血相を変え、珍しく激情を露わにした灯が月衣から身の丈ほどの黒い大砲、ガンナーズブルーム改——今では旧式となりオールドブルームと呼ばれる機種の改良型で、彼女の愛用品だ——を抜き出し、その砲門をくつくつと愉快そうに笑う少年へ突きつける。

真実を知り、直接エリスと見えてもいるルーは意地の悪すぎる煽り文句に呆れ、密かにため息を吐いた。

「あかりん、落ち着いて。まだそうと決まったわけじゃない。エリスを、仲間を信じよう」

我を忘れている灯の肩に手を置き、命は言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

彼の眼差しは、緋色の瞳を真っ直ぐ貫いていた。

「……そうね、命の言うとおり。ここを切り抜けたら私が作ったお弁当をあげるわ」

「うぐっ。そ、それはうれしいけど。あかりん、そのセリフはいろいろ死亡フラグだから」

「……ぽっ」

「いや、今の会話のどこに顔を赤らめる要素があったの？」

軽く夫婦漫才をしたあと、お互いの手を握り――ガンナーズブルームはどうした――、見つめあう。

ふたりの妙な雰囲気に触発されて、周囲には桃色の“げっこう”が形成されていた。

それはそれは強力な“げっこう”である。

（わわわっ、二人とも大胆ですっ）（ところかまかずイチャイチャと。目障りだわ）

翠とベルが甘ったるさに砂糖を吐いたり、

（次はどうなるのかしら？　ワクワクワクワク）（いいなあ。あたしも、ベルと……）

パールとアゼルが興味津々だったり、

（なるほど……これは興味深い）（仲がよろしいですね）

リオンとエイミーがあらあらうふふと見ていたり、

「……」 「……まったく」

スルガとルーが僅かに苦笑していたりするのは些細なこと。

「っち……」

それから、黒髪の少年がとても羨ましそうにしてたのも些細なことである。

「あー、こほん。……お二人さん、そろそろいいかな？　質問がな

いなら始めたいんだけど」

再起動を果たした少年が、ゆるーくなった空気を変えるように咳払いして促す。口調や声色が素に戻りかけているのは、命と灯ののろけにあてられたからだだろう。

「はじめるって、なにをですか？」

「そりゃあ勿論……、魔王とウィザードが遭遇して、やることなんて一つしかないさ」

首を傾げつつ発せられた翠の疑問に、何となしに気安かった少年の雰囲気は霧散。代わりに漂うのは濃密な殺気。

刹那、瞬時に練り上げられた魔力を足裏で爆発させ、耳をつんざく炸裂音を響かせて突進する。

鈍く光る白刃。

「ッ、あかりん！」危機を察知し、命が咄嗟に灯を突き飛ばした。

間一髪、入れ替わるように繰り出された袈裟懸けの斬撃と気休めに発動した防御魔装と衝突し、殺しきれなかった衝撃で命は大きく吹き飛ぶ。

「――殺し合いだよ」

十メートルはあるだろうか、わだかまる噴煙に視線を送りながら、少年が酷薄な言葉を吐き出した。

「命！――くっ！」

自分の目の前に降り立った黒衣の少年に、半ば反射的に魔砲を突きつける灯。引き金が引き絞られ、巨大な弾丸が吐き出される間際、もう一つの黒い影が躍り出た。

コツ、と軽快に着地し、ポンチョをはためかせる黒衣の少女。集中もなしに、左手から放たれる虚無の魔法。

灯は地面を蹴って大きく飛び上がり漆黒の矢を回避。くるりと宙返りして、三メートルほど後方に着地、ガンナーズブルームを構え直した。

「今回は君らの歓迎会だからね、少しだけ趣向を凝らしてみただ。古人曰く、郷に入っては、とも言うし――こちらの流儀とお約束に則って、一対一のサシで殺ろうじゃないか」

「あんたってほんと性悪よね」

「ほっとけ」

ベルの憎まれ口に、わずかに顔をしかめた少年の像がゆらりと歪み、そして消える。

〈空間転移〉。大いなる者の十八番、空間操作能力の応用だ。

ややあって、命が吹き飛ばされたと思われる辺りから激しく鋭い剣戟音が鳴り響く。どうやら彼は命にターゲットを絞ったようだった。

「ま、そういうワケだから。――ダンスのパートナーをお願いできるかしら、ミス？」

芝居がかった仕草とセリフ。ベルが小首を傾げ、右手を灯へと差し出す。滅多には見せない優雅で気品ある所作は、身に纏った典雅なドレスと相まって言葉の通りにまるで舞踏会的一幕のよう。

「……」

返答は砲撃。言葉の代わりに、青い魔法陣から吐き出される魔術処理が施された特殊合金製の砲弾。

「あら、手荒いお返事ね」半身になって軽々と避けるベル。

着弾した大質量の塊が地面を砕き、高々と噴煙を打ち上げる。

その隙に、灯がちらりと視線の端で仲間の様子を窺うと、スルガ、翠も自分と同様に魔王と一対一に持ち込まれてしまっていた。

分断された、と灯は内心で歯噛みする。これでは撤退もままならない。

「やっぱり仲間が心配かしら？」

「心配だけど、信頼してる。……それに、私があなたを倒して助けにいけないだけよ」

余裕を隠そうともしないベルに、灯は気後れも誇張もなく、心の内をただ淡々と告げる。

強化人間特有の合理的な思考と、さまざまなウィザードと共に戦ってきた経験を背負う彼女だからこそその発言。以前、昏睡状態だった命を守るためとはいえ、親友と仲間に砲口を向けたのは苦い記憶だ。

故に、灯は仲間を信じ、目の前の魔王を打ち倒すことで報いよう考える。

「あっそ。ま、あんならあの小娘よりは楽しませてくれるかもね」
「……？」

漆黒の炎に変じた魔力が渦をなし、巻き上がる。

好敵手の一人たる緋色の魔女を前にして、銀髪の女王がゆっくりと、悪魔のように美しく微笑んだ。

＊ ＊ ＊

「一対一……僕の相手はあなたですか、ルー||サイファ―」

パニエでふわりと広がる宮廷ドレスを摘み、裾を軽く引き上げたルーがスルガの前に悠然と降り立った。

同時に、彼の右腕を包むように現出する巨大な盾と鉄甲が一体となったガントレット、アイゼンブルグ。このような形をしているが、これも立派な“箒”だ。

感情を表に出さない冷徹な銀の瞳にその様子を写したルーは、ついつと視線をいずこかへとやる。

「……まったく、あれも無駄な氣を利かせよる。“シャイマール”の後継の一人とはとても思えぬな」

眼差しの先で戦闘中の、最近めつきり奔放で破天荒になってしまった弟にぼやくものの、その表情は穏やかで、母性のようなものすら漂わせていた。

それに気づいたルーは苦笑する。“本体”からあまりにも離れすぎているこちらでは、自らの性——本能が些か薄くなるらしい、と。

（まあ、あの子たちは特に気にしてないみたいだけど）

「テスラの身体を返してもらいます」

思い憂う大魔王の内心など知る由もない鋼の守護者は、無機質な青い瞳に信念の炎を燃やす。

「この躯が、ただの現し身だということくらいは理解しておろう？」
「ええ。ですが、あなたの現し身を倒し、力を削ぎ続ければ、いつの日かテスラを救うことが出来るかもしれない。——いえ、必ず救い出す……！！」

彼を造った錬金術師の孫であり、彼が救うと誓った少女の名を胸に刻み。仮初めの命を持つ魔法使いは、鋼の魂に静かな闘志と決然たる意志を宿して。

ルーが侮りを露わにして鼻を鳴らした。

「ふん。随分と気の長い話よな。……我が力、早々に削り切れると思うてか」

ゴッ、と威圧するかのごとく吹き出す黄金色の魔力。間欠泉のようなそれは、酩酊するほどに濃密な死の気配。だがそれすらも、裏界最強と謳われる彼女の力のひとかけらにしか過ぎない。

「……！」

魔王が垂れ流す圧倒的かつ暴力的なプレッシャーに、戦うため護るために生み出された人造人間であるはずのスルガの肌が、にわかに粟立つ。

「――アイン・ソフ・オウル」

ルーの足元に紅黒い七芒星の魔法陣が描かれた。

彼女を囲むように、内部の結晶に紅い光を明滅させた七枚の白き“羽根”が――破壊神たる象徴が、ずるりと抜け出した。

「その力がどれだけ強大だとしても、どれだけの時間がかかるとしても――、押し通すだけです。あなたとて、一度は討ち滅ぼされているのですから」

左腕の細胞を蠢かせ、音速の生体弾丸を発射する機構へブラッドブレットが展開される。その砲口の行く先は、最強の魔王。

ピクリ。ルーの端正な眉が揺れた。

「口が過ぎるぞ下郎。己の分を弁えろ」

自らの汚点を突かれたルーの美麗な容貌が怒りで染まり、覇気の籠もる言葉に空気がざわめく。

それを合図として、アイン・ソフ・オウルが一斉に、スルガへと撃ち出された。

＊ ＊ ＊

「うんと……命さんがシャイマールさんで、灯さんがベルさんで……」

一人残された翠が、指折り数えて状況を整理していた。

「スルガさんとルーさん……アゼルさんとリオンさんとエイミーさんは、観戦中」

彼女が挙げた魔王三人はやや上空に滞空してお菓子を片手に歓談、文字通り観戦している。魔王の余裕という奴だ。

全員を相手にすればそれだけで詰み、ゲームオーバーだった翠たちにしてみれば僥倖だろうが。

「……………。あれ？　じゃあ、あたしの相手って——」

しゃらん。不意に、澄んだ鈴の音が背後で鳴った。

ギギギ……、と油の切れたブリキの人形のように振り向く翠。さんした

「それはもっしろん。このパールちゃんに決まってるじゃない」

そこに居たのは、それなりな胸を尊大に張る巫女服の魔王。あほのこ

無邪気にして残虐な彼女の恐ろしさをよく知る翠は目を泳がせ、ダラダラと滝のような汗を流して狼狽した。

そして、恐る恐る口を開く。

「え、えーと、あたし、役割でいうと後衛なんですよね」

「うんうん」

「いわゆるひとつのキャスターというやつでして」

「うんうん」

「灯さんたちみたく、一人では戦えないというか……」

「うんうん、それでそれで？」

翠が矢継ぎ早に繰り出す言に、パールは楽しそうに何度も頷いて。

一拍、間。

「逃げて、いいですか？」

真壁翠、一世一代の懇願。

極貧生活を支えるためのアルバイトで鍛えたとびきりかわいい笑顔で、だ。

「うーん……」

人差し指を小振りな唇に当てて、パールは考える。

ゴクリ。緊張した面もちの翠がのどを鳴らす。

――月匣に天使が横切り、痛いほどの沈黙が訪れた。

たっぷり時間をとって、パールは翠に負けじととびきりかわいい笑顔で口を開き、

「だーめっ☆」

無慈悲な一言を言い放つ。

「や、やっぱりいいーっ!？」

涙目な翠の、悲痛な叫びが木霊した。

ヒトが造りし石塔の密林。打ち捨てられ、後は風化するのを待つだけの寂寥たる石碑群。

その谷間を舞台に、二人の魔法使いが己の力と信念を賭けて雌雄を決する。

“エミユレイターの勇者”という宿命を背負わされ、それを否定しウィザードとして侵魔と戦う真行寺命と。“シャイマール”の並行存在として生み出され、それを肯定し魔王として振る舞う■■■。

ある意味で表裏一体、コインの表と裏とも言える彼らの激突は必然だったのかもしれない。

「はああああッ!!」

国造りの神に捨てられた忌み子の名を冠する両刃の魔剣ヒルコ。ふたつに分かたれた一振り、光の貌を象徴する白い輝きが紅い闇を斬り裂く。

「ぐッ……、さすがに一流のウィザードは格が違うか——!!」

対するは長剣型“箒”デモニックブルーム。蒼白い光刃を刀身に付与させて、白き両刃剣を迎え撃つ。

甲高い太刀音を響かせて、二振りの長大な剣がその刃を合わせた。疾風怒濤の剣戟。

魔力が爆ぜ、刃が走り、剣が翔て——

オリハルコンプレード

数合、数十合と剣が打ち合ってオレンジ色の火花を咲かせる。
臂力の差か、はたまた得物の差か——デモニックブルームはヒルコに幾度となく弾かれていた。

「チ……」

たまらずバックステップで距離を取る黒髪の魔王は、接近戦での不利と見るや小さく舌打ちを漏らした。

しかしその表情はお気に入り玩具を前にした子どものように愉しげで、剣呑な光を灯した蒼い瞳は獲物を狙う猛禽にも似ている。
視線の先には長大な剣を振りかぶるウィザードの姿。

「まだだッ！」

命の“プラーナ”を喰ったヒルコが繰り出された斬撃を延ばす。
振り抜いた魔剣から延びた白い突風が、ビルの間を一瞬にして駆け抜ける。

「ぬ、ぐ……っ」少年は長剣を振るって何とか迎撃するが、強烈な衝撃に身体が硬直、体勢が開く。

その隙を突き、命が一気に勝負を決めようと地面を蹴り、疾駆した。

「ヒルコオオオオオッ！！」

裂帛の気合い。主の雄叫びに応え、白き“遺産”がその内に宿した古の力を解放した。

「ッ！」

一際まばゆい白の閃光を放つ魔剣が、居合いの要領で左下から右

上への軌道で斬り上がる。

咄嗟に放たれた斬撃——真逆の軌道、右上から左下へと袈裟斬りで落ちる蒼銀の光剣。

二本の剣が紫電の如き疾さで交錯した。

爆発じみた轟音が鳴り響き、真っ紅な飛沫が飛び散る。

ヒルコで斬り上げたままの格好で停止したウィザードと、よろよろと数歩下がって紅く染まった胸を押さえる魔王。

しゅんしゅんと風切り音を鳴らして“箒”が宙を舞う。命渾身の斬撃で、少年の手より弾かれたデモニックブルームが道端の瓦礫に突き立った。

そして——一転の静寂。

無音。透明。何も無い。その真っ白な音を、遠方で起こる散発的な爆音が汚していく。

間合いは一足一刀。

彼らの実力なら一息とかけずに詰められる程度の間だ。故に、どちらも動かない。動けない。

「……」

命はヒルコを青眼に構えなおしながら、だらりと両腕を垂らして一見すると隙だらけな——その実、体勢は下がりスタンスはやや広い……誘っているようにしか思えない、自分よりも年下らしい少年の思惑に考えを巡らせる。

この、目の前にいる魔王がひとときわ酔狂な変わり者だということを、命は知っている。直接戦うのは今回が初めてだが、噂くらいは耳にしていた。

いわく——

「力と知識を求めるものを好み、その望みに答える」

「自らは表に出ず裏で策動し、策の正否は問わず起こる混乱を楽しむ」

「時には自らの奸計を、人間に協力することで台無しにすることも多々ある」

などなど……。

まさしく悪魔の典型。気まぐれなトリックスターそのものだ。

遙か昔、神の楽園に住まうヒトを誘惑し、知恵の果実を与えたとされる“漆黒の蛇”らしいとも言える。

しかし、今回のように自らの姿を曝すようなタイプの魔王ではないはずだ。

——そして、命は目の前の少年に、以前から名証しがたい違和感を覚えていた。それこそ濃霧のように漠然としたものだったが、実際に対峙して、刃を交わしているうちに違和感は次第に強まってくる。

「……裏界の勇者の証たる魔剣、ヒルコか……」
「！」

ぽつりとこぼれた独白。

自らの宿業を揶揄されて命が動揺する。

「その剣で、緋室灯を突き貫いたんだったよな、アンタは」

「それは……！」

「アスモデートに軀を乗っ取られてたからだろ？ 知ってるよ」

命の剣幕に少年は苦笑する。

やれやれといった調子で肩をすくめ、宥めるような口調で二の句を告げた。

「どちらにせよ、恋人を殺しかけたっていう事実には違いはないさ。
……まったく罪作りな男だね、お互い」

ため息混じりの軽口に込められていたのは、からかいではなく自嘲。自らの不徳を嘲うシニカルな笑み。

そのあまりに人間くさい表情を見て、命の違和感確信に変わった。

「君は――」

「……？」

不意に発せられた呼びかけ。少年が訝しげに眉をひそめる。

「君は、本当は人間なんじゃないのか？」

睨み合いの中で投げかけられた疑問に少年の眉がぴくりと反応し、海原のような蒼い双眸がわずかに揺れる。

「エミュレーター側の存在だったことがある僕だからかもしれないけど、なんとなくわかる……君はただの侵魔じゃないって」

「……何故、そう思う？」

「気配、かな」

「気配？」

「気配があまりにも濁りすぎてるんだ。光でもなく闇でもない――どっちつかずの中途半端、まるで昔の僕みたい」

核心を突いた考察に、数瞬きよんととして、黒髪の魔王はふと、少年と青年の間らしい――“魔王”の仮面を取り払った、柔和で優しい素の表情を浮かべる。

獣じみた構えをゆっくりと解かれ、白い腕輪の巻きついた左手をポケットに突っ込み、空いた右手でボサボサの髪を軽く掻き上げた。

「そうだな、アンタの言う通り、確かに俺はヒトだよ。エミユレイター——裏界帝国の末席に身を置いているだけの、アンタらとは立ち位置が違うだけの、人間だ。……少なくとも俺自身はそう思っている」

「そうか……」

納得して、神妙な面持ちをして見せた命を、興味深そうに目を細め観察する少年。

「何故、裏界に与してる？とは聞かないんだな」
ファーサイド

「今更だよ、そんなこと。今までだって闇に、力に溺れた人間をたくさん見てきたし、倒してきた。……どうやら、君は彼らとは少し毛色が違うみたいだけど」

そりやどうも。どうでもよさそうに応える黒髪の少年は、右手を軽く地面にかざした。

するとそれに呼応して、彼の右脇に豪華な装飾が施された長剣が独りでに飛来して突き刺さる。

「せっかくの機会だ、俺もアンタに一つ問いたい」

「なんだい？」

「アンタは……、何だ（・・）？」

手元に戻ったデモニックブルームを逆手で引き抜きながら、黒髪の魔王が黒髪のウィザードに問う。

答えなど、端からわかりきっていた。

故にこれは戯れ言。

死闘の前の無意味で無価値な問答だ。

「僕は人間、真行寺命だ」

試すかのように自分を見据える蒼い瞳を、真っ直ぐ見返した命はまっさらな本心を言葉に乗せる。はつきりと迷いなく。それでいて決然と。

ただ飾りつけのない事実だけを口にして、命は燦然と白く輝くヒルコを正眼に構えた。

満足のいく返答に、少年がいたずらっ子のようにニヤリと口元を歪める。そして、赫耀たる蒼銀を纏う右手のデモニックブルームを逆手から順手に握り直し、そのまま何気なく下げた。

自然体でいながら、それでいて一分の隙もない独特の構え。

「結局、アイン・ソフ・オウルや魔法は使わないのかい？」

「男と男の真剣勝負に、小細工なんて無粋だろ？」

ふてぶてしく笑う奇妙な少年の、妙なこだわり苦笑を隠しきれない命は、気を取り直し表情を引き締める。

それは夜闇を纏い、夜闇を駆ける“魔法使い”の顔。眼前に立ちふさがる“魔王”を打ち倒す、戦士の姿だった。

* * *

「このっ、逃げるなーっ！」

「逃げるなっっていわれても逃げますっ！」

全長一メートルほどの魔法戦闘用杖型“箒”ウィザーズワンド――今回の任務にあたり支給された品である――に跨った翠は、火炎弾を乱舞させて追走するパールから必死な形相で逃げ惑っていた。

何気に遁走しながらも、ディストーションブラストできっちり応戦するあたり、翠もなかなか食えない。

「いいからちゃんとあたしと戦いなさいっ！ 痛くないからっ」

「戦ったら痛いじゃないですかっ!？」

「うーっ！ つべこべうるさーい、あんたはさっさとあたしに殺^やられてればいいのよっ！」

横暴なセリフと共にパールがぶん、と腕が振るう。三つの火球へファイアボールが逃げる翠に目掛けて撃ち出された。

「なうぐうおおっ、ひゅわああああっ!？」

愉快的悲鳴を上げた翠は“箒”を急加速、路地に逃げ込むことでそれらを回避。目標を見失った炎の塊が、ビルや瓦礫を粉碎して灼熱の海を生み出す。

「ちっ、三下のくせしてすばしっこい！ いい加減に——うん？」

悪態を吐きつつ、何の気なしに視線を踊らせたパール。つぶらな瞳が、ウィザードたちと小競り合いを続けるベルやルーの姿を捉えた。

どちらも裏界第一位を自負するパールにとっては忌々しく思う目の上のたんこぶ、おじやま虫だ。

“外の世界”なんてすぐく面白そうだし、ひとりだけ仲間外れにされるのは癪にさわるので黙って協力していたが、内心では寝首を掻いてやろうと虎視眈々と狙っていた。

——そう、パールはパールゼファールとルーサイファールが、目障りで目障りで仕方がないのだ。

「……ちゃんすっ」

ぞっとするほどかわいらしい小悪魔的な笑顔を浮かべ、慣性や物理法則を嘲笑うかのように急停止、振り袖をくるりと翻して方向転換。

明後日の方向へ飛び上がる。

「ひゃああああ——って、えっ、あれっ？」

急に向きを変えた追跡者の意図が読めず、ぽやつとしている翠をほっというパールはぐんぐんと上昇していく。

停止したのは遙か上空。

戦場を一望する位置で、巫女服の魔王は右手を力強く突き出した。ごっ、と噴き上がる魔力と“プラーナ”。

「————漆黒の空を穿たれよ、永久の深紅！！」

詠唱の声は鈴を転がしたように愛らしく。それは死の呼び声。

直径200——否、2,000メートル級の広大な魔法陣が廃棄都市一帯に広がる。

以前、コレがベルに回避されたことを根に持っていたパールは、現し身に宿した魔力と“プラーナ”をこれでもかといつぎ込んで、無理矢理に引き伸ばした無茶苦茶で非常識な超広域無差別殲滅魔法を紡ぎ出す。

灯と対峙していたベルが魔法の発動を察知して、「なあっ!？」とあんぐり口を開き、愕然とする。その間に、灯はちゃっかり退避スルガと激闘を繰り広げていたルーは「まったく……」と最近癖になってきた感のあるため息をこぼして、呆然とする対戦相手を余所にそそくさとその場を離脱。

命と鏢競り合いを演じていた少年は、目を白黒させてパールらし

い暴拳に心底呆れる。それから、啞然としていた命に「プラーナ
”使って防御しないと、死ぬぞ」と警告した後、これまた離脱した。
———巨大な魔法陣が、月匣に捕らわれた薄弱な精霊たちが、
にわかにざわめく。

「エターナルブレイズ・ザ・デストラクションっっっ！！！！」

パールの砲哮を引き金にして、紅の魔法陣が烈火のごとく燃えさ
かった。

「あはははっ！ みいーんなまとめて……爆ぜ消えろっ！！」

ぱちん。指が鳴る。

瞬間———世界が真っ白に染まった。

空間が悲鳴を上げ、猛烈な熱波が全てを焼き尽くす。ただ破壊の
ためだけに解放された魔力が、摩天楼を薙ぎ倒す。

あまりに巨大な魔力の奔流に、空間すら焼き尽くす極大の爆発に
強靱無比なはずの月匣がその構成を維持できず、粉々に砕け散った。

「強靱！ 無敵！ 最強っ！」

月匣が解除された廃棄都市。

その中心にほど近い位置、荒れ狂う余波で、木っ端微塵になったビルの残骸が山積する巨大なクレーターが広がっていた。

5メートルほどの柱らしき残骸に立つ、小さな人影。勝利の味に酔いしれて、喜色満面の大魔王パール・クルが、仁王立ちで片手を腰に当ててどこぞにビシッと指を指す。背後に、ドン！ とトウーンな書き文字が見えたとか。

[illegible]

パールのバカ笑い——もとい、高笑いが閑散とした瓦礫の海に響き渡る。

幾星霜、積もりに積もったベルとルーに対するライバル心を晴らせたパールの機嫌は、うなぎ登りに絶好調。それは過去例を見ないほどだった。

気まぐれで消し飛ばされた哀れな部下たちも草葉の陰で涙していることだろう。……主に無念的な意味で。

上空。よく晴れた青空。

観戦していた三魔王が、眼下の事態ににわかに騒ぎ立つ。

「ああ、ベルがつ……」

「あら、これは大変。あれだけの大魔法ですから……みんな、死んだりして」

涙目でベルのことを心配するアゼル。おたおたおろおろ、どうしていいのやらと狼狽しきり。

そんなアゼルを煽るようなリオンのセリフ。他人ごとですと言いたげに、いつもの澄ました微笑を湛えたままだ。

「!! たたた、助けにいかなきゃっ!」

「まあまあ、落ち着いて。あのベルのことですから、きっと大丈夫ですよ……たぶん」

「そ、そうかな?」

「そうですとも……たぶん」

泡を食い、今にも飛び出してしまいそうなアゼルを白々しく宥めるリオン。どちらもベルの部下、というか協力者のはずなのだが、その思惑は見事に対照的なようだ。

「お二人ともなにやら下で動きがあったようですよ、ほら」

主の実力を信じているのだろう、特に慌てることもなく、ニコニコ営業スマイルを浮かべて静観していたエイミーが、何かに気がついたように促した。

「やっぱりこの“東方王国の王女”たる、超公パールちゃんが世界で一番賢くて、いっちばんかわいくて、超☆最強なんだからっ!

——って、あれ?」

上機嫌に口上を述べていたパールがふと視線を落とす。

彼女のすぐ側、コンクリートの破片が折り重なった場所がもそも

ぞと蠢いた。

「――なーにが「超☆最強なんだからっ」、よっ！ げほげほ……」

瓦礫を押しつけて、真っ黒に煤けてくすんだ銀髪がひょっこり飛び出した。

「あ、ベル」

そう、灼滅の大魔法をどうにか凌ぎきったパールⅡゼファード。無事ではあったが黒のパーティードレスはボロボロ、見るに耐えない無残な姿をさらしている。ぶっちゃけ、顔まで真っ黒である。

ゴシゴシと、袖で顔の汚れを乱暴に拭うベル。金色の瞳がキツとつり上げ、間の抜けた表情で「私はがっかりしてますよー」と主張してはばからない金色ツインテールを睨みつけた。

「パール……っ、あんたねえっ、なにしてくれてんのよっ!? 一歩間違えたら死ぬところだったじゃないのっ!」

回避されぬよう無理矢理に拡大したしわ寄せで、パールの魔法は一面あたりの破壊力を大きく減退させていた。

その証拠に、命たちウィザードの面々も、ベル以上に被害を受けながらも何とか生存していた。

一番防御に秀でているスルガは平気な顔で、墜落して頭から瓦礫に埋まっている翠を引き抜いているし、持ち前の強運――悪運とも言えるが――でうまくやり過ごした灯は、命を助け起こしている。

ともかく、詰め甘いパールらしい結果だと言えよう。

「えー、殺ったと思ったのにい。パールちゃんつまない。あ、そうだ、今から死んで見せなさいよ、ベル」

パールのおんまりなセリフに、ベルのあまり長くない――むしろ極端に短い堪忍袋の緒がぷちっと切れた。

「このっ、バカパールっ！」

「ばっ!？　なんだとお！　バカって最初に言った方がバカなんだからねっ！」

「ふんっ、ならあんたはアホよ、アホの子よ、アホの子パールちゃんよ！」

「ぬうううっ、言うに事欠いて！　バーカバーカ、ベルのかーちやんでーべそっ！」

「あんたもあたしも、同じやつが創ったんでしょーがっ！」
「あ、そっか」

頭の悪そうな口論を繰り広げる二人の見た目少女、中身年齢不詳の元カミサマ。

そんな彼女らを少し離れた場所で見やるのは紅と蒼、二色の結晶を輝かせた計十四枚の白い“羽根”に護られている姉弟。背中合わせの格好でアイン・ソフ・オウルを球体状に展開、破壊の奔流をものともしていない。

姉――ルーは、頭痛を感じたようにこめかみに指を当て「あの子たちは……」と、ベルたちの醜態にため息をついている。弟の方とは言えば、ニヤニヤにやけるだけで止めるつもりはないようだ。

「ううっ、うるさいうるさい！　ここであつたが百年目っ、あんたとの因縁、決着つけてくれようぞっ！」

「……いいわ、あたしもあんたのことはつねづね目障りに思ってたのよ。覚悟なさい、パール嬢クール！」

威嚇のつもりなのか、大量の魔力を噴出し戦闘体勢に入る大魔王

二柱。どちらも額に青筋を立て、ひくひくと表情筋を引きつらせている。

「うわ、やば。——ほら二人とも、ちょっと待ってっ」

これは洒落にならんと、黒髪の少年が仲裁に入る。

後ろにいた金髪の魔王は、止めるなら早く行けばよかったのにと
思ったとか思わなかったとか。

大幅に戦力を落とした現し身とは言え、仮にも裏界魔王。潰し合
えば……まあ、結果は言うまでもないだろう。

「うるさい！ あんたはすっこんでろ！」

今にも爆発寸前にヒートアップした二人が同時に吼える。強烈な
プレッシャーに、少年が思わずたらりと額に汗を流した。

実は仲がいいんじゃないか？と益体のないことを頭の端に置きつ
つ、暴走中の魔王二柱をなだめすかすために無駄に高速な思考で言
葉を選び、紡ぎ出す。

「……ったく、みっともないったらないぞ、お前ら。それでも誇り
高い裏界魔王か？」

言いながら、スッと視線を逸らし、肩を貸しあい何とか立ち上
がり自分たちを見上げていた命と灯へと送る。

「ぐ……っ」「むー」

「みっともない」「誇り高い」という単語に釣られて鼻白む二人。
他人の目など気にしない天衣無縫唯我独尊な彼女らでも、こう言わ
れるとやはり少々堪えるらしい。魔王とは、総じてプライドが服を

着て高笑いしているようなものだから。

「でもでもっ、ベルがあたしの悪口言うんだよっ？」

「あんたが先に手え出してきたんでしょうがっ！」

懲りずに口論を始める美少女二人。フーッ！と猫のように毛を逆立てて威嚇し合う。

こいつらは……、と内心で呆れる少年は最後の手段にポケットから何かを取り出した。

「あー、わかったわかった。ほれ、飴玉やるから今は黙っとけ。――お客さんのお持て成しをしなくちゃならないからな」

「お客さんって」「誰よ？」

差し出された大粒の飴玉――レモンとハッカだった――を手に取りながら、ベルとパールが揃って首を傾げる。

上空に、鮮やかな空の色とよく似た青が輝いた。

光の出所は、虚空に描かれた六芒星の複雑な魔法陣。膨大な魔力と存在の力を内封した神秘そのものである魔王たちは、それが空間を疑似的に繋げるゲートであると即座に見抜く。

同じく、転送魔法だと判断したウィザードたち。主八界のものではない様式の魔法陣に、新たな敵がやって来たのかと身構えた。

――それは半分正解で、半分不正解だった。

ひととき眩く輝いた転送魔法から、二つの人影が現れる。

「時空管理局提督、クロノ・ハラオウンだ。大人しく――とはいかないだろうが、事情を聞かせてもらおうか」

白き魔導の杖を携え、漆黒のローブを纏う青年――クロノが、陰

しさと厳格さを感じさせる表情で、不敵に微笑する黒髪の魔王を睨む。

そして、クロノの傍らには白い外套を羽織る黄金の少女——フェイト。漆黒の戦斧を手に、じっと黒髪の少年を見つめていた。

「……………」

彼女は、ベルとパールに囲まれている少年の様子にひどく不愉快そうに眉をひそめている。

ある種の敵意のような視線を二人——とくに、親友たちを傷つけた原因であるベル——へ向けるフェイトに、その感情の意味をそれなりに理解していた少年は内心で苦笑した。

「アレがお客さん？ ふうん、こっちの“魔法使い”、か。……ねえアル、あたしがアレ、壊してもいい？」

自分に突き刺さる心地いい敵意——、パールの小ぶりな唇が吊り上がる。無邪気に残虐な声を合図に、戦意の昂揚によって漏れ出した魔力が、ジジジ……、と黒い雷となって空気を焼く。

新しい玩具を見つけた子どものみたいなりアクションをするパールに、「パール、あんたって子は……」と呆れたように感想を漏らすベル。彼女はフェイトの敵意を歯牙にもかけていないようだ。

「駄目だ。“アレ”は俺のでね——いくらパールでも、それは譲れない」

黄金色の少女を見上げ、少年が傲然と言う。

かなり大胆なセリフにぴくりとフェイトの肩が揺れ、陶器のような白い肌がやにわに紅潮する。大事に思っている義妹を“アレ”呼ばわりされ、本人も何故か満更ではないことにクロノが顔をしかめ

た。

「それってえ、あたしが他人のモノを奪うのが好きって知ってて言ってるのかなあ？」

「ああ、勿論」

即答にパールは一瞬きよとし、次いで「……ま、いっか」とらしくなく素直に矛を収めた。

ただの思いつきだったのか、それとも少年の本気を感じ取り、刃を交えることを避けたのかは定かではない。

「相談は終わったか？　なら、こちらに投降して――」

「ベル、パール、お前たちは上の三人と一緒に退け。こちらのお相手は“俺たち”がする」

「――……話は最後までちゃんと聞いてほしいんだが」

しかめた顔を崩せないクロノが眉間に皺を寄せ、ぽつりと呟いた。

「そう。まあ、あたしもこんなナリじゃやる気にならないし、とつとと帰るわ」

「じゃあ、パールちゃん、レンタルしてきた怪獣王のDVDでも見ーよおっと。今日は平成シリーズフルマラソンだからねっ！」

思い思いのセリフを残し、ベルとパールが空間を歪めて消え去る。上空で成り行きを見守っていた三人も用は終わりと、後を追って転移していった。

残されたのは、二組の“きょうだい”。

「だから、人の話は最後まで聞けと……！」

「に、兄さん……」

ことごとく自分のセリフを無視されて憤りを隠せないクロノを、フェイトがおたおたとだめる。

そんな微笑ましい兄妹を目にやる少年。「ハイそうですかと簡単に捕まってやるわけにはいかないんですよ、提督殿？」とおどけてみせて、蒼白く燃える焰風のベールを創り出した。

翻って戦意を見せた魔王に、フェイトとクロノはそれぞれの愛杖を構える。もとよりこの場に乱入した時点で、戦いは避けられないとわかっていたのだ、覚悟はしていた。

突き出し、振り抜かれた鉤爪に断ち切られ、焰が四散する。

ヒルコによって斬り裂かれた――肉体の傷はすでに癒やされ、塞がっている――黒い制服は、濃紺群青のロングコートへと再構成されていた。

「さて“姉さん”、どっちとやる？」

不敵に口角をつり上げ、右手で蒼のネクタイを軽くいじって締め直し、傍らに上昇してきた“姉”に問いかける。

「まったく、しょうのない子ね」

「姉さん」と呼びかけられ、それ相応の表情と口調に変えたルーは、自由奔放な“弟”の有り様に本日何度目かのため息をこぼし、「育て方、間違ったかしら？」と内心でぼやく。

「……なら、私はあの子を相手にしましょう。あなたが見初めた娘がどれ程のものなのか、前から（・・・）興味があったの」

「さいですか」

「――！」

「来るか……！」

黄金の貴婦人の挑戦的な瞳が金色の少女を射抜き、漆黒の少年と青年の視線が交わる。

ミッドチルダ廃棄都市群を舞台とした闘争の第二幕――、その火蓋が唐突に切って落とされた。

「灯ちゃん、翠ちゃん！」

「エリス……！？」

パールの置き土産のダメージで軽く流血した命の頭に包帯を巻いていた灯が、聞き慣れた親友の声に顔を上げた。

木の柄に藁の穂という一見ただの掃除用具に見える“箒”——実際には、航空力学などの最先端技術が詰め込まれた高機動を誇る名機である——テンペストに跨ったエリスが一足遅れて現場に降り立つ。

やや足をもつれさせながら、仲間たちの下に一目散に駆け寄っていった。

「よかった……みんな無事で。魔王と戦ってるって聞いて、飛んできたんだよ」

懐かしい——といっても、こちらに来てから半月ほどしか経っていなかったが——仲間たちに会えたことで、緊張の糸が切れたエリスの翠緑の瞳がにわかに揺れる。

責任感の特別強い彼女だが、やはり異世界にひとりというのは心細かったようで感極まって、自然と涙を浮かべてしまう。

「えっ、と、エリスちゃん？ シャイマールさんが……あれ？」

まさかこんなにも早くエリスと再会できるなど、露とも思ってい

なかった翠は目を白黒させて驚いている。

「どうやら魔王の戯言を真に受けていたようだ。脳天気な翠らしいと言えbraしいが。」

「エリスも、無事でよかった。遅くなつてごめんなさい……ひとり
で頑張つたのね」

「うん……っ」

相変わらずの無表情で――だが、親しいものならわかるくらいほんのわずかに微笑んだ灯が、親友の苦勞を思つて勞う。

エリスのつぶらな瞳からぽつりと小さな滴が落ちた。

「ご無事で何よりです、エリスさん。――それはともかく灯さん、
命さんが苦しんでいます。早急に救出したほうがいいかと」

「……え？」

スルガの指摘に包帯片手の灯がきょとんと首を傾げ、視線を追つて手元を見る。

「あ、命」

「モゴモゴ、モゴっ！」

包帯でミイラのようにぐるぐる巻きになつた命の姿があつた。

息が苦しいのだろう、包帯を外そうと必死にもがいているが、い
つこうに外れない。強化人間の並外れたパワーできつく絞められて
いるのだから当然だ。

エリスとの再会に気もそぞろだつたにもかかわらず、灯の手は器
用に命の治療を続けていたようだ。違う意味で悪化させて、命にト
ドメを指す寸前だつたりするが。

一息ついて。

「……エリス、あの人たちは、何？」

上空——二柱の魔王と激闘を繰り広げるこの世界の“魔法使い”たちを見上げながら、灯が事情に通じているであろうエリスに問う。エリスは軽く微笑み、少しだけ胸を張ると、誇らしげに口を開いた。

「私たちの心強い味方だよ、灯ちゃん」

＊ ＊ ＊

光速の砲撃が迸り、誘導弾が乱舞する。そのどちらも濃さこそ違うものの、同じく“あお”——鮮やかな蒼空そらと同じ色だ。

三日月に似た鋭い光刃と、燃えたぎる灼熱の炎弾が交差。操る者の髪の色と同様に輝く黄金が炸裂し、美麗な華のように彩る。

色合いの違う二種類四色の光は時折相手を変えて、激しく激突していた。

「——あかん、ふたりとも押されとる。あーもうっ、クロノ君、男なんやからもっとガツンといったれっ！ほんと、焦れたいわ。……私らからも援護できればいいんやけど」

「乱戦すぎてムリっばいな。私たちベルカ騎士は、一対一には強いけど乱戦には向かねえんだ」

「ううー、たしかに私も細かいコントロールは苦手や……」

「マイスターはやての場合、それ以前の問題だと思うですう」

美しくも儚い闘争の光を、やや離れた場所で騎士たちと共に見守っていたはやて。ヴィータの意見に同意を示し、彼女の帽子の上のラインフォース？に睨みを利かせた。

本局上層部直々の通達により、正体不明の魔力反応が確認されたというミッドチルダ廃棄都市区に急行したはやてたち一行。しかし許可の出た転送魔法で一足早く到着したクロノと、付近にいたフェイトに遅れること数分、エリスと共にやって来たはやてたちだったが、時すでに遅く、乱戦模様に出せないでいた。

「……」

ふと、はやての思考に何かが引つかかる。

まるで喉に残った魚の小骨のような、どうにもちぐはぐですつきりとしなない違和感。難しい顔で顎に手を当て、薄曇った違和感を晴らすべく思惟を巡らした。

「――なあシグナム、どう思う？」

「どう、とは？」

主から投げかけられた主語のない問いかけに、シグナムが怪訝に首をひねる。

「質問に質問で返したらあかんで……というお約束はさておき、ヴォルケンリッターの将としてお偉いさんの思惑をどう見る？」

“上”の思惑、ですか」

「せや。なんでか知らへんけど、地上本部はこの騒動に関与しようせえへんで静観してるんや。そのくせ周辺区域の封鎖だけはやけに早い……てか早すぎる。

その上、私ら――というか、アースラを呼び寄せたんも“りく”から要請を本局が受けたかららしいし。これっておかしい？」

「……そうですね、それは私も不自然に思っていました。利害の一致、というだけにしてはあまりにも正直すぎる。不可解です」

「だよな。あの“オッサン”がわざわざ本局に助けを求めるなんて

ありえねーし」

自らの考えをまとめるかのようなはやての言に、シグナムとヴィータが賛同した。

本局と地上本部が仲が悪いなどという表現では生易しいほど犬猿なことは、管理局員にとっては暗黙の了解だ。改めて説明するまでもない。

その原因は様々あるだろうが、とにかく縄張り争いをうっちゃって手を取り合うような生温い関係ではないことは確かだった。

「あの“うみ”嫌いの中将さんが本局に手柄譲って……、あまつさえ同調してるような動きを見せるなんて、シャルの料理が百発百中で成功するくらいあり得へんわ」

「むっ。それはちよつと言い過ぎなんじゃないかしら、はやてちゃん」

タカ派で有名なミッドチルダ地上本部の某中将と、うつかりで失敗する某軍師を引き合いに出して事態の不自然さを語るはやて。

自分を比喩の材料にされた件の軍師は、心外そうに頬を膨らませて抗議した。

「だってシャル、打率三割きってるやん」

「それくらいならじゅうぶんレギュラー取れると思うわっ！」

「肝心なところで凡退では使い物にならないな」

「むしろゲツツーじゃねえの？ 失敗のレベル的に」

はやてたちからの容赦のない評価に涙目のシャル。しゅんと肩を落として「私だって、お料理できるもん」と呻いている。

「エルフィこの前、お砂糖じゃなくてお塩のクッキー食べさせられ

たですっ」

「それはわりと普通やで」

「ええっ、そうなんですか？」

ヴィータの帽子の上に乗ったりインフォース？がきょとんと小首を傾げた。

「談笑しているところ悪いが――」

脱線に脱線を重ねた会話を咎めるように燻し銀な渋い声が響く。
腕を組み、巖のように口を閉ざして戦況を睨んでいたザフィーラが、視線で家族を促した。

「戦闘が終わりそうだぞ」

＊ ＊ ＊

無数にばら撒かれた爆炎の弾幕を潜り抜け、金色の閃光が魔王に肉薄する。

「疾さはたいしたものね、誇っていいわよ」

斜めに大きく振り抜かれた雷撃のごとき斬撃。

「だけど――」

「鉄扇!？」

しかしそれは、閉じたままの扇によって易々と阻まれた。
キンッ、とさながら鉄と鉄が打ち合ったような甲高い金属音が鳴り響く。

「動きが素直すぎるわ。あの子と並び立つには悪くないけど、もう少し虚動と残心を意識なさい」

「……っ」

まるで諭すような言葉。魔力刃が弾き返され、金色の扇が優雅に開かれる。

開いた面に豪華な装飾の施され、先には純白のファーがあしらわれた扇――裏界最強にして最上の美貌を持つ彼女に相応しい格調高い逸品が、舞い踊るように空を斬った。

迸る金色の輝きが、体勢を崩し、身体が開いたままのフェイトを襲う。

「う……っ!」

咄嗟に張られた魔力障壁を犠牲にして斬撃を相殺。濃さの違う、二色の金色が霧散した。

優美な仕草で扇で口元を隠したルーが瞳を細め、体勢をどうにか立て直す淡いストレートのブロンドが愛らしい少女を見やる。

「まあでも、変にスレてないお嬢さんっぽいところは可愛らしくて好印象かしら」

「え……、えと、ありがとうございます?」

「ふふっ、礼儀正しいのね。そういう娘、お姉さん好きよ?」

にこりと微笑んだルー。妖艶で、しかしどこかやさしげな眼差しを向けられ、大いに照れたフェイトはタジタジで、「あう……」と顔を真っ赤にした。

母性愛を見え隠れさせる艶やかな麗しいブロンドの美女に、“母”の面影を重ねたのかもしれない。

「なに和んでんのさ、姉さん」

そんな声を空から落としつつ、黒髪の少年が音もなくルーの背後へと降り立つ。

ネイビーブルーのバリアジャケットが一部損傷している。どうやらクロノに手酷くしっぺ返しを食らったらしい。

「あら、普通にお話してただけよ？」

「俺にはコナかけてるようにはしか見えないんだけど」

「男の子の嫉妬は見苦しいわ」

「うぐっ……。それはともかく、充分遊んだしそろそろお暇しない？」

「劣勢だからって撤退？　ちょっと情けないわね」

さんざん茶化された弟がとうとう拗ねてしまい、姉はクスクスと楽しそうに笑う。姉弟のじゃれ合いというだけでなく、いろいろと振り回されていることへの幾ばくかの意趣返しも含まれていた。

端で姉弟のやり取りを見ていたフェイトは、彼の子どもっぽいリアクションに「……かわいい、かも」と密かに感想をこぼした。

「そうじゃないよ、あまり時間をかけ過ぎると“抑え”が効かなくなるって話。まだ、完全に掌握しきったわけじゃないからね」

「そうね、片手間じゃ上の方を唆すので手一杯だったし」

手勢を使えば楽なんだけど。やや疲労感を滲ませて言葉を切る。

「と、いうわけで、また――」

「――逃がす訳にはいかない。フェイト、そこから離れてくれ！」

空間に開いた幾つもの亀裂を通して撃ち出される、蒼白い砲撃の嵐を巧みに回避し切ったクロノが叫ぶ。

次いで真白に輝くデュランダル。周囲の空気に含まれた水分が熱を失っていく。

「兄さん？ わかったっ」クロノの意図を汲み取ったフェイトがやにわに回避距離を取る。これから来る“魔法”の範囲の広大さを知っていたから。

「氷結魔法、俺たちを拘束するつもりか」

「なら、私の出番ね」

りん、と涼やかな音を立てて黄金の七芒星が閃く。

眩いばかりの金色に囲まれて、金色の魔王がその威容を誇る。発露する力はわずかに一端。しかし、“世界”を揺るがすには十二分の力だ。

「悠久なる凍土、凍て付く棺の内にて、永遠の眠りを与えよ！」

「遙か空に響け、久遠たる奇跡の祈り、その胸に灯せ永遠の炎！」

空に巨大な氷河が――デュランダルの真骨頂、“闇”すらも封じる完全凍結魔法が生まれ出でる。

空に巨大な魔法陣が――パールの力任せとは違う、完全無欠に制御された空間爆砕魔法が広がる。

「「エターナル！」」

同音同意の祝詞。

氷河が蠢き、法陣が輝く。

「コフィン!!」 「ブレイズ!!」

あらゆるものを凍てつかせる絶対零度の青と、あらゆるものを焼き尽くす煉獄灼熱の金が同時に炸裂した。

天地を揺るがす巨大な魔法の激突。凍てつく大地を一瞬にして炎が融解させ、再び氷結する。

そして――――

凍結魔法と爆碎魔法がぶつかり合って発生した大量の水蒸気が晴れていく。

そこに、黒髪と金髪の魔王の姿はない。

「……逃げられちゃったね、兄さん」

悔しさをにじませた兄の横に、金砂の髪をなびかせた少女が浮遊する。

魔王たちを逃がしてしまったというのに、その表情はどこかにこやかで、鈴を転がしたような声には彼女の胸の内側――魂に刻まれた“何か”が、ほのかな喜色となって込められていた。

「ああ……。だが、手掛かりがなくなった訳じゃない」

妹の言葉を受け、眼下の来訪者たちに視線を送ったクロノは、さざ波立った感情を抑えるべく、厳格さと強い責任感の帯びた瞳をゆっくと閉じた。

6 - 3

6 「リコリス」

地上本部関連の医療施設——ユーノの入院先とは別だ——の一角、休憩室。

エリスの仲間だという四人は、みんなケガをしていたのでこちらに移送した。

今は治療も終わり、エリスを囲んで再会を喜んでいる。

つもる話もあるだろうからと、私とはやては離れたところでその様子を見守っていた。折を見て、兄さんから任された事情聴取について切り出そうと思う。

みんなとは、もう自己紹介をすませてる。

緋色の髪がきれいで不思議な感じがする人が灯で、碧いポニーが

よく似合ってる元気な人が翠。それから、柔和なんだけどなんだか頼りなさそうな人が命、背が高くてちよつと近寄りがたい感じがする人がスルガだ。

女性二人はそれぞれ違った美人だし、男性二人もかっこいい。

「……な、なんや、めっちゃけしからんもんが四つも並んどるつ。まさにパラダイスやっ」

はやてがわなわなと震えながらそんな女の子らしくないことを言った。なんか両手をわきわきさせてるし。

……まあ、たしかに灯も翠もかなり大きい——シグナムよりあるかも？——とは思うけど。

放っておくとそのまま突撃してしまいそうなので、たしなめよう。

「だめだよはやて、ちよつと空気読もう」

「のうあつ！？ フェイトちゃんにそんなこと言われる日が来るとは、夢にも思わなかったわ」

「……それってどういう意味？」

なんかバカにされた気がするんだけど。

ジト目で睨んでみると、はやてがあははと快活に笑った。

「フェイトちゃんはおぼこでかわいらしなあ、って意味やで」

「そ、そうかなあ」

「そうやそうや」

につこり笑うはやてにつられて私の表情も緩む。

かわいって言われて、うれしくならない女の子なんていないよね。……そういえば、あのブロンドのすごく美人な女性——ひとルー||サイファーだっけ——もかわいらしいって言ってくれたけど、どう

してそんなに私に好感を持ってるんだろう？　もうあんまり違和感を感じなくなってきた私自身の気持ちも不思議だけれど。

……うん？　って、あれ、私ごまかされた？

「はやて、今――」

ごまかしたでしょ？　と追求しかけたとき、ゾクツと得体の知れない悪寒が背筋に走る。肌がぞわりと粟立った。

はやてもなにかを感じたのだろうか、バツとほとんど同時に振り向いた。

「な、なんやあれ……」

エリスの座っている方から毒々しい紫色の煙が、もわもわと立ち上っている。

うっ、すごい異臭……。

「あわわわっ、今回ののはいつもよりパワーアップしてますよっ!？」

「――命さん、申し訳ありません。僕は撤退させてもらいます」

「ちよっ、裏切り者っ!」

「すみません。まだ、死ぬわけにはいきませんから……」

「シリアスな顔で洒落にならないセリフ言わないでくれるかな!？」

あっちはとても慌ただし。

興味をひかれたはやてがててっと近寄ったので、私もおっかなびっくりついていく。

「なんや楽しそやなあ。なに騒いでるん?」

「あ、はやてさん、えーと……」

困ったように苦笑うエリス。

若干及び腰になっているみんなの顔は、灯以外、一様に引きつっていた。とくに命なんか青ざめて脂汗をだらだらと流してたりして、その中心には、テーブルにでんと置かれた強烈な存在感を醸し出す異様な物体。

「私の手作り弁当よ」

「……お弁、当？」

これ、が？ ……なんていえばいいんだろう、銀色の容器に紫だか緑だか赤だかのよくわからないものがいっぱい詰まっている。ポコポコと不気味に泡立って、うごめいてるようにも見えるし…
…ほんとに食べ物？

「あ、灯ちゃん、料理がちょっとニガテというか……。し、失敗しちゃったんだよね？ ね？」

「そんなことない。これが私の全力全壊」

抑揚の欠けた声。

私のちよっとトラウマなセリフに、思わずびくりと身構えてしまった。……ごめん、なのは。

「漢字が違いますよっ!？」

「それはメタやで」

「意味合い的にはむしろ正解のような気もしますが」

軽快なかけあい。

——というか、会話に何気なく混じって違和感のないはやてはいったいなんなんだろう。数年来の親友だけど、近ごろのテンションにはついていけない。

「というわけだから約束通り、あーん」
「うぐっ」

灯が食べ物にはけして見えないナニカをスプーンでよそって、命の口元に差し出す。

彼女の瞳はどこか艶やかに潤んでいて、同性の私でもドキッとしてしまうほどだった。こんな状況じゃなかったら、だけど。

「ぐ、ぐぐっ……あ、あーん」

うわあ……、ほんとに食べちゃった。

「おいしい？」

「おっ、おい、しい……よ、あかりん」

ぷるぷる震えながら、命がぎこちない笑顔を浮かべた。
すごい。こういったら失礼かもだけど、あんなものを食べて笑えるなんてちよつと尊敬。

横ではやてが「世の中にはあんな恐ろしいもんがあるんやなあ……シャマルイジるのやめとこ」なんて言ってる。

「よかった。もつとあるから食べて」

「くうっ……いつ、いただきますっ!!」

すごいね。すごくガッツがあると思うよ。

「灯ちゃんと命君は、恋人同士なんですよ」

「この間、やっと一緒にいれるようになったんですよ。長かったんです……、ほんとうに」

「人に歴史あり、愛の力やねえ」

青……じゃなく、土気色の顔でガツガツとやけくそ気味に、お弁当——らしき物体をかき込む命を見ながら、はやてがしみじみと感想をこぼした。

「恋人……、か」

ひとり、呟く。とても甘くて、きれいなコトバ。

それがゆっくり胸に染み渡ると、奥の方にずきり鈍い痛みが走った気がした。悲しくて、苦しくて、辛くって、寂しくて、切なくて……そんな痛みだ。

心の奥の奥——すごく深いところがざわざわとざわめいて、私になにかをしきりに訴えかける。

忘れてしまつて、けれど、忘れちゃいけなかったはずのたいせつな——

「フエイトちゃん、ぼけーっとしちゃってどうしたん？」

「えっ？ あ……、ううん、なんでもないよ」

心配そうなのはやての顔が視界いっぱいにあつてびっくり。慌てて取り繕う。

はやては「ふうん……」と目を細めて、ワルそうににやりと笑い、

「私はてっきり、彼氏ほしいなあ、とか思ってたんかと」

なんて言つてのけた。

どうしてだかわからないけど、なんだかすごく恥ずかしくて。かああっと頭に血が上る。

こんなところでそんなこと言わないでよっ。

ああ、ほら、みんな生暖かい目で私を見てるしっ！

「ちがつ、違うよっ！ はやて、なに言ってるのっ!？」

「ふふん、せやろなあ。フェイトちゃん、私らの中で一番興味なさそうなタイプやし。いや、興味ないふりして避けてるんかな？」

「……そ、そんなこと――」

返す言葉が思いつかなくて、口をつぐむ。

ケラケラと楽しそうな笑顔をするはやてを、恨めしく見つめてみても柳に風で。このままじやいようにイジられるだけだ。

どうしよう、なんとかしなきゃ……。

まごまご悩んでいると、ぷしっと空気の抜ける音を立てて談話室の自動ドアが開いた。

「あ、兄さんにエイミィ」

「……ああ、フェイト」

入ってきたのは兄さんとエイミィ。なんてタイミング、これは天の助けだ。

……って、あれ？ クロノなんだか眉間にしわを寄せちゃって難しい顔してる。エイミィも、若干拳動不審な感じだ。

「どうしたの、ふたりとも」

「少し、いいだろうか。一つ聞きたいことがあるんだが」

私の問いには答えず、兄さんはエリスに声をかける。その声色はどこか深刻だった。

「はい、なんででしょう？」

愛想のいい面差しでエリスが続きを促す。

言いづらそうに一拍間をおいて、兄さんが口を開いた。

「君たちは本当に人間か？」

「！！」

「兄さん、なにを――！」

灯とスルガを見ながら発せられた不可解な言葉。私は目の前が真っ赤に沸騰するのを感じた。

「フェイトちゃん、そんなに興奮しないで。クロノ君も、理由なしに言ってるわけじゃないんだよ」

「でも……っ」

エイミイになだめられても、とうに私の手を放れ、暴走する感情はどうにもできない。

「すまない。君たちを簡易的にだが検査させてもらった」

「担当官からの報告なんだけど、二人とも人間には思えないって。灯ちゃんは人間の身体にはない化学物質がたくさんで、スルガ君に至っては構造自体が別物だって……」

「検査って……」

エリスが不快そうに表情をゆがめた。翠と、それからいつの間にか復活した命が二人をかばうように前に出る。

「本当にすまないと思ってる。立場上、簡単に流すわけには訳にはいかなかったんだ」

「ごめんなさい」

兄さんとエイミーが揃って深々と頭を下げ、謝罪の言葉を口にした。

「いえ、そう言ったことも配慮しておく必要がありましたし、こちらの手落ちですから。……その通り、僕は所謂人造人間——生体兵器です」

「私は、薬物やインプラントで強化された人間よ。“キリングマシン”と呼ぶ人もいるわ」

腕を銃器みたいに変えて見せるスルガと、どこか機械的に抑揚なく答える灯。どちらも、ただの事実と言うように包み隠さず自分の生まれを淡々と語っていた。

———人造、人間……。

ふと視線を落とすと、両手が小刻みに震えていた。

……私、動揺、してる？

「人造人間……。君たちの“世界”では一般的なことなのか？」

「ええ。少なくとも、ウィザードとしては珍しくないわ」

「僕のように自分の意志で武装組織の一員として平和のために戦う者もいれば、学生に混じって普通に生活する人もいます。もちろん、そうでない人もいますが……それはごく一部です」

一度自覚すると、どす黒い濁った感情が底からドロドロと止めどなくあふれてきて。

「あの……」

理性は押し流され、代わりに首をもたげる疑問。

「ふたりは、自分の生まれのこととか、どうも思っていないの？」

私の事情を知る、兄さんやエイミィ、はやてが息をのむ気配を感じる。

自分でも、とても不躰な質問だったと思う。だけど、訊かずにはいられなかった。

「僕は、この造られた命に誇りを持っています。誰かを守り、誰かを救う——そう造られたからじゃない、僕が僕自身に科した生きる意味です」

「この力のおかげで、命やエリスに出逢えた。これは私の一部、感謝することならあっても疎むことはないわ」

答えは真っ直ぐで、淀みない。迷いもない。

私には、なぜかふたりがとてもまぶしく見えて。直視してられないほどまぶしくて——

「あかり人もスルガも、僕らの大切な仲間です。もしも、危害を加えるつもりでしたら……」

じり……、と後退しながら命は警戒感を露わにして兄さんを軽く睨む。

高まる緊張。今にも戦いがはじまってしまいそうな雰囲気だ。

強い眼光をじっと見返して、それから兄さんが静かにため息をもらした。

「……そう身構えないでくれ。心配なくていい、管理局はそれほど傲慢な組織じゃないんだ。この件は僕の胸にだけ仕舞っておく」

部屋いっぱいに充満していた痛いほどピリピリした空気が、ゆっくりと拡散する。

兄さんと命の睨み合いを見守っていた私たちは、みんなほっと胸をなで下ろした。

「クロノ君、成長したねー。えらいえらい」

「エイミィ、いい加減子ども扱いするのはやめてくれないか」

おどけたようになでなでとなでるエイミィと、なでられてぶすつとしてるお兄ちゃん。

最近はある見なくなった光景だ。……なんでかは知らないけど。

「こほん。……それで君たちは、こちらの味方——、助っ人と思っ
ていいんだな？」

「はい、もちろん」

命が爽やかに微笑んで手を差し出す。兄さんは一瞬ためらって、それから「よろしく頼む」と握り返した。

「……」

そうして話し合いはたぶん、丸く収まった。

でも——

私の心は暗く曇って晴れない。それはまるで鈍色の雲が覆い隠した冷たい冬の雨空のように、陰鬱なままだった。

どこからともなくやってきたぶ厚い灰色の雲の壁が、青かった空を覆い隠している。雨は降らないと天気予報で言ってたけど、実際のところはどうかかわからない。

一抱えはある花束を二つ抱えて、私はきちんと掃除の行き届いた真っ白な石畳を一步一步確かめるように歩く。

服装は執務官用の黒い上下。“この場所”には、これが一番ふさわしいと思うから。

——前触れもなく訪れた強い風。

私は立ち止まり、あおられる前髪を右手で押さえつけ、手に持った花束を抱え込む。

その間にも気まぐれな風は好き勝手に吹き荒れて、ざざあ……つ、と匂い立つくらいに青々とした芝生のカーペットを手荒に撫でていく。

遠くで、針葉樹の防風林が幹と枝をしならせて大きく揺らいでいた。

いたずらな風が過ぎ去る。

手元の花束がどうにもなってないことを確認して、ほっと安堵した。

白いセロファンで束ねられた花束には、華やかな色のものがほとんどない。あまり派手な色合いのものはふさわしくもないと思ったから、選ばなかった。

どの花も質素で、慎ましやかで、奥ゆかしくて……でも、それでいて誘うような甘い蜜の香りを忘れない。ひとつのことでもいいっばい、不器用な私にはマネのできない——そんな花たち。

歩みを再開する。

視線の先に、上の部分が緩いカーブを描く白い石碑が、規則正しく並んだ光景が見えはじめた。芝生の青と、木々の緑と、石の白と——一見、きれいに整ったコントラストはどこかもの悲しくて。どうしても、寂寞としたものを感じとってしまつて。

——きつとそう感じるのは、私自身の心境が影響しているんだと思う。

場所はクラナガン近郊、小さな……ほんとうに小さな墓地。

——ここは“母さん”と、“私”が眠る場所だ。

あのあと、私は兄さんたちに断りもせず、逃げるようにして施設を抜け出した。

逃げ出したのは、灯とスルガを見ているのが辛かったから。

自分とは違うんだって——、弱くて、情けなくて、甘ったれで、いくじなしだってまざまざと突きつけられているようで、いたたまれなくなったからだ。

そうして、私はプレシア母さんとアリシアの眠る場所にやってきた。

悲しいこと、悔しいこと、辛いこと、苦しいことがあったとき——心が折れてしまいそうなとき、私は決まってここを訪れる。

時の庭園が虚数空間へと崩落するとき、プレシア母さんが遺していった言葉を思い出すために。諦めかけてしまう気持ちを叱咤して、無様でもあがき続けるために。諦めないために。

そして、ひとりでもがんばれるって自分自身に証明するために。

……ほんとは生まれ故郷——と言えるかどうかは定かじゃないけど——のアルトセイムに二人のお墓を置きたかったのだけれど、あそこはミッドチルダの辺境でこうして訪れるにはちよつと不便だったからここにしてもらった。

いつか、いろいろと落ち着いたときに移すつもりだった。

……でも、その日が来るのはいつのことになるのだろうか。だって、こうして今日も女々しく縋りに来てしまうんだから。

「……」

墓地の奥まったところにひっそりと立つ、母さんとアリシアの……中身のない空っぽなお墓が見えてきた。

「あれ……？」

進む先、ふたつ寄り添うように立ち並んだ小さな石碑の前に、先客の姿がある。

あれは背が高い――、男性？

黒革のジャケットの襟から覗くコバルトブルーのフードに、クリム色のカーゴパンツというラフな格好。

ややうつむき加減の後ろ姿から、黙祷しているの、かな。

「私以外の人がお参りなんて、誰だろう……？」　「そういぶかしむ私の胸が、不意に高鳴った。」

近づく気配に気づいたのだろう、“彼”がゆっくりと振り向く。

「――やあ、“魔導師”のお嬢さん。奇遇だね」

強烈なデジャヴ。深い夜闇のように黒く、艶やなくて毛の髪を緩やかな風に流し、真っ蒼な海原を思わせる凜とした瞳は濁りなく澄んでいて。

男性と男の子の境目をたゆたう面差しはふてぶてしく、それでいて繊細に見えた。

「あ……」

自分でもびっくりするくらいに色っぽい声がつく。
う……、顔がほてってる。

頭の中は混乱してるのに、私の視線はきれいなプラネットブルーの眼差しから離せない。

「ッ！」

“彼”とは敵対している関係なんだと我に返って、待機状態のバルディッシュをスーツの内ポケットから取り出す。
魔力を一気に練り上げて、セットアップ——

「ここで戦うつもりか？ この墓には、君の大切な人たちが眠っているんだろう？」

「——っ」

そうだ、そうだった。

母さんとアリシアが眠るところで、戦えるわけがない。戦意が急速にしおれていくのを感じる。

けどこちらが戦えなくても、“彼”はそうじゃない。
そうじゃないんだけど……——

「心配するな。眠れる死者の魂を——命を冒瀆するような真似、嫌いなんだ。今更な綺麗事、だけどな」

心の懸念を読んだみたい——顔に出ていたただけかもしれない——
“彼”が言う。付け足されたシニカルな言葉は自嘲、なのだろうか。

「どうして、ここに？」

「俺は神出鬼没が信条でね」

捕らえどころのない笑み。でも、はぐらかされたようには感じなかった。

だって、神出鬼没って言葉の響きが“彼”のイメージにピッタリだったから。「ああ……、そうなんだ」って納得してしまう説得力があった。

「君を待っていたのかもしれないし、ただ墓参りに来ただけかも知れない」

相変わらずの要領を得ないあやふやな物言いに、知らず知らずのうちに眉間に力が入ってしまう。

今度ははぐらかしてる。何度か接触して、会話しているうちになんとなくコツがわかってきた。

「それ、答えになってないよ」

「俺のことはいいじゃないか。それより、ここへ何をしに来たのか思い出してみるといい」

「……あっ」

はたと気づいて、足元のお墓に視線を向ける。

母さんとアリシアの名前が刻まれた白い石碑に手向けられた、放射状のスカーレットとピュアホワイトの花弁を咲かせる小さな花々があった。

リコリス——彼岸花。この品種としては珍しい、白い色ものまであった。

花言葉はたしか……“悲しい思い出”、“また会う日を楽しみに”。それから——“想うのはあなた一人”。

「……手向けの花、これくらいしか思いつかなくてね。不作法だと

は思うけど、許してほしい」

「そんなこと……」

ないよって否定すると、“彼”がほのかに苦笑した。

やっぱり男の子だから、お花とかのことにはあまり詳しくないのかもしれない。

それがなんだかおかしくて。

「……？」

自然と頬をほころばせたら、不思議そうに首を傾げた“彼”は、すっと何気ない動作でお墓の前から数歩下がった。

場所を空けてくれたのだとわかったので、ちよつとあわて気味に開いたスペースに進み出る。

膝を屈めて、抱えていた花束をリコリスの隣りにそっと手向けた。

「……母さん、アリシア……また、来ちゃった」

届くはずのない言葉で呼びかけて、黙祷する。

——私は、私が考えている以上に生まれのことを引きずっていたみたいだ。だから、あんな失礼なことを聞いてしまった。

人造人間、強化人間——人造魔導師として生を受けた“フェイト・テストロッサ”に近い存在。けれど、彼らは“望まれて”生まれた。

私とは、違う。

……正確に言えば私も“望まれた”のだろう。でも私は、母さんの期待には添えなかった。

私が出来損ないの欠陥品だから。アリシアの思い出を、踏みにじる存在だったから。

……振り切ったつもりだったのに、割り切ったつもりだったのに

——私が“彼女”になれるわけないのに。

自分と似た生い立ちの、弟みたいに思っている“あの子”を気にかけて、後先考えずに保護責任者を買って出でてみたり。身よりのない子たちを何くれとなく世話を焼いてみたりしたのも、今ではただの代替行為にしか思えない。

“代替物”にすらなりきれずに捨てられた人形が、生みの親の“代替物”を求めてるなんてどんな皮肉だろう。出来の悪い喜劇だ。コメディ

私、ばかだ。誰も“母さん”の代わりになるわけないのに。

もちろん、リンディ母さんのこともたいせつだって、家族だって想ってる。想ってるけど——

「うう……っ」

嗚咽がもれる。

全身から力が抜けて、ぺたりとへたり込む。

「う、あ……」

堰を切ったみたいに涙があふれてくる。

両手で顔を覆って抑えようとしても、それはぜんぜんできなくて。

「ふえ、えっ、ひっぐ……」

あとから、あとから、途切れることなく涙がこぼれる。

——寒い。

ココロが寒い。カラダが震える。

奥のほうから音を立てて凍っていくみたいだ。

————寒い、よ……。

目の前が、真っ暗になる。負の感情が広がって、暗くて黒い暗闇
闇を作っていく。光なんて、どこにもない。

だれか……、たすけて……。

「あ……」

不意に、大きな手のひらの感触を頭上に感じた。

まぶたを開いて、顔を上げる。

目の前には片膝を突いて、目線の高さを同じにした黒髪の……敵
対しているはずなのに、敵だとは思えない不思議な男の子がいた。
そのひとがやさしく、すごくやさしく笑ってた。

「——がんばったんだな」

ただ一言。

たったそれだけで、私のココロを長い間覆っていた暗雲は吹き飛
び、寒々として震えていたカラダの芯からあったかくなる。

それはまるで春の雪解けみたいに、私の気持ちを穏やかにしてい
く。

「——っ！」

私は、胸の奥からわき上がる鋭い衝動に任せて“彼”の胸に飛び
込んだ。

「つと……つたく、しょうがないな」

呆れたような、でもどこか嬉しそうな声。少しだけためらうよう
して、背中に両手がかけられた。

そして、ぎゅっと強く――、大胆に“彼”の胸の中に抱き寄せられて。

見た目よりもずっと厚い“彼”の胸板と、私の身体に挟まれたネックレスの宝石がとくと脈打って熱を帯びる。

その瞬間――、私の中のなにかがカチリと組み変わった。

……うん、違う。

元に戻った（……）んだ。

欠落していた記憶に刻まれた、たくさんの想いがこみ上げる。あふれ出して止まらない。

あったかくて心地いい、言葉にできない想いで胸がいっぱいになる。

切なくて、苦しくて、うれしくて、恋しくて――

失くしていた間の時間、そのすべてに価値なんてないって思えてしまいうくらい、愛しい。

愛しくて、愛しくて、愛しくて――

――ああ……そっか、そうなんだ。

子どもの頃からちっとも変わらないボサボサの黒い髪と、冷たいように見えて、ほんとはとっても暖かい蒼い瞳も。

成長して、ちよっとだけ男らしくなった――でも、いたずらっこみたいな子どもっぽさも残した面立ちも。

ぜんぶが、懐かしい。

一目見て、何度も出逢ううちに惹かれていったのも、当然だ。

名前を呼んでももらえなくてイライラしたことも、どうしてか理解できる。

第22管理世界で出逢ったとき、“フェイト・テストロッサ”とだけ名乗ってしまった理由も、いまならわかる。

私は“彼”を――、「愛してる」って言い残して消えてしまった“彼”を、無意識のうちに求めてたんだ。ずっと、ずっと。

でも、もうそれも終わり。もうなにかも、ぜんぶ思い出した。
取り戻した。

ああ、そうだ……、このひとは、私の――――

「え……、ふえ……」

「……え？」

「ふええ……、ええええん、うええええん」

「ちよっ！？ ほ、ほら、もう大丈夫だから。泣かないで」

「ぐすっ……う、うええええん」

「……まいったな」

「ふええええええん、うわああああん」

愛しい温もりと懐かしい匂いに包まれて、私は六年間、溜めに溜めていた気持ちを吐き出すように、心ゆくまでめいっばい、子どものように泣きじゃくった。

――けれど、この涙は悲しいから流してるんじゃない。
うれしくて、泣いてるんだ。

「落ち着いた？」

「……うん、ごめんね、その……、ありがとう」

分厚い曇天の下、金色の少女と黒色の少年が向かい合っている。時空管理局に籍を置く魔導師と、異界より来訪した魔王——今は敵対する間柄であるというのに、二人の間に流れる空気は驚くほど穏やかだ。

先ほどの醜態を思い返し、少女が頬を赤らめて恥ずかしそうにもじもじと身を縮めれば。あの雨の夜のように、感情に身を任せてしまったことを悔いる少年が、ばつが悪そうに頬を掻いて目を泳がせる。

「……」 「……」

緩やかな沈黙。対照的な二色の双眸が絡み合う。

少年は、自らに送られる紅玉の眼差しに込められた感情の質が、今までと違ってすることに気がついていた。

戸惑いではなく理解。警戒ではなく恋慕。——神話の女神にも見劣りしないほど美しく成長した容貌は、純粹でひたむきな愛情で満ち溢れている。

やっと思い出してくれたのか、と密かに胸を熱くした少年だったが、当初の予定通りこれ以上自ら歩み寄る気はない。今までも、意味深な言葉を吐いてちょっかいを出す程度で自制していたのだ。

豪放磊落に見える彼だが、公私をきっちりわかる分別も持ち合わ

せている。それを一時的に曲げて涙する少女を慰めたのは、それだけ彼女の心を心から大切に想う故だった。

——居心地のいい静寂。

崩してしまうのはもったいないけれど。少女は胸中で決心し、意識して硬い表情を作り口を開く。

「あなたたちは、冥魔を倒すために動いているかもしれないって、エリスが言ってた。それは、本当？」

長い間引きずっていた暗鬱とした雰囲気拭い去り、内に秘めた凜とした美しさを開花させた少女は、管理局の執務官として、治安維持の公僕として、不敵に微笑む少年へ疑問を投げかけた。

彼女にも、少なからず意地がある。言いたいことぜんぶ言うまで甘えてあげないんだもん、とつんつん澄まして健気に振る舞っている。

本心は、今すぐ首根っこに飛びついて思い切り甘えたい。だが、それを我慢できるくらいには少女も成長していた。

向き合う二人の気持ちは同じ——まだ全て終わったわけじゃない、と。

「ああ、その通りだ。……志宝エリスを引き合わせたのは正解だったな。うまく踊ってくれているようで安心したよ」

人身を弄ぶ魔王の片鱗を見せつけ、少年は不敵に肯定する。

戦わずに済む未来を見つけ、ぱあっと少女の表情が明るくなった。

「なら、みんなでいっしょに力を合わせて——」

だがそれも、長くは続かない。

「無理だな」

「ど、どうして？」

「大層なものじゃないが、俺たちにも譲れないものがある。君なら、わかるだろう？」

「っでも……」

「君はこの“世界”を守る管理局に所属する執務官。そして、俺はこの“世界”を侵略しようとしている悪い大魔王——お互い、闘争以外に道はないのさ」

持って回った、それでいて茶化したような言い回しに隠された確固たる意志をくみ取り、少女は説得は無理だと悟る。形のいい眉目が悲しみにしゅんと落ちた。

極めて冷たく——あくまでも彼女の主観では、だが——振る舞っている、やはり少年と敵対するのは辛い。自分の半身を切り分けるように。

「それに——……ち」

何かを言い掛けた少年が一転、厳しい顔をして小さく舌打ちした。

「え……？」

突然、二人の周囲を取り囲むようにどす黒い瘴気の柱が大地を割って吹き出す。

「！！」

「俺の話はまだ終わってないってのに無粋だな。場所を弁えろよ、阿呆共——といっても無駄か。だからお前らは嫌いなんだ」

そんなぼやきを合図に、瘴気の中からずるりと異形の軍勢が姿を

現した。

原形質の頭部を持つヒトガタの結晶体に、複数の頭を持つ無機質の蛇。無数の触手を生やす無機質の身体で構成された魚のようなバケモノ。うねうねと粘着質の身体を粘つかせるスライム状の物体。

巨大な粘性の身体を蠢かせ、人の手足にも似た腕を持つ怪物。瞳のない、黒い煙を吹き出す四足獣。結晶質の体内に、脳髓のようなモノを持つ巨大なヒトガタ。

多種多様、いずれも常人なら吐き気を催し卒倒しかねないほどに醜悪な姿の存在。生きとし生けるものを怨み、憎み、嫉み、滅ぼさんとする破滅の尖兵。

「こ、これって……」

数え切れないほどに溢れ出したバケモノのあまりの醜さに、少女が身体をわずかに強ばらせる。

「冥魔だよ。雑多な雑魚の群れに、よどみの沼、無明の獣魔と闇黒晶魔——大物まで揃えて俺を潰しに来たみたいだな。まったくご苦労なことだ」

きん、と音を立てて紅^{あか}の結界が広がり、冥魔を現実空間から隔離する。

蒼銀に光る風を巻き起こし、紺青の戦装束を身に纏う。ぱさりとコート裾をはためかせ、少年は身を翻した。

「君は下がって見ているといい」

左手でネクタイを軽く弄り、右手で側の空間に広がった小さな波紋——月衣から“箒”を引き抜いた少年は肩口から背後を窺う。

そこには金色の雷光を迸らせ、漆黒の軍服と純白の外套を纏う少

女の姿があった。

「……何のつもりだ。まさか、一緒に戦うだなんて言わないだろうな」

「そうだよ」

「俺と君は敵対しているというのに？」

「うん」

「確かに、俺たちは戦うことになるんだぞ？」

「それでも、だよ。あなたが敵だとしても——、いっしょに戦うって決めたんだ」

金色の戦鎌を油断なく肩に担いだ少女は、少年に背を向けたまま、はつきりとした口調で言葉を紡ぐ。

それはいつか彼が“母”と交わした問答。会話の細部は違うものの、少女の出した答えは彼と同じだった。

「——私自身が、あなたを護りたいと思った。理由は、それだけで十分だ」

背中合わせの背中越し、少女は笑みの気配を感じた。

待ちきれないと異形のバケモノどもが怖気をふるような唸り声を上げる。

——“目障りな魔王め、その五臓六腑を抉り出し、八つ裂きにしよう！”

——“小娘、お前の柔らかな血肉を蹂躪し、陵辱し、喰い尽くしてくれ！”

——あるいは、ヒトには理解できぬ言葉で、冥魔が盛んに吼

え猛った。

「フツ……、なら、足手纏いにはなってくれるなよ」

「あなたこそ、遅れないでね」

互いを煽るように軽口を叩き合い、二人は同時に踏み切る。

——別かたれていた翼が今、再び大空を舞う。

＊ ＊ ＊

魚類に似た冥魔——闇魚が、稲妻のごとき斬撃に寸断され、細斬れになって霧散する。

無数の頭かしらをうねらせる蛇の冥魔——闇蛇が、蒼銀の光芒に巻き込まれ、ダース単位で消し飛ぶ。

魔力を込められて長大化した金色の大剣が、奇形の四足獣——無明の獣魔を一刀の下に斬り裂いた。

銀色の雨を降らせて対抗するスライム状の巨大な冥魔——よどみの沼とお供のスライムは、天から降り注ぐ裁きの光によって瞬く間に浄化された。

金色の魔導師と黒髪の魔法使いはお互いを庇い合い、フォローし、時には息を合わせた絶妙なコンビネーションを魅せる。

獅子奮迅。冥魔の軍勢は急速にその数を減らしていく。

蘇る愛の力を武器に、縦横無尽に天翔る一对の比翼を滅ぼさんと、冥魔たちが各々が備える魔法を撃ちかける。

しかし七枚の“羽根”が組み合わさって完成した白亜の大楯が赤い光を纏い、魔法全てを完全に遮断した。

「トライデント！」

楯の奥から、何かが稼働する機械音と可憐な美声が飛ぶ。弾かれ

るように、少年が分離した“羽根”を連れて離脱していく。
大楯に隠れていた少女の突き出す左手を基点として、金の魔法陣が広がる。

「スマッシュャーッ!!」

円状魔法陣の中心から一本、続いて上下に枝分かれして三叉槍状に発射された光芒が、ひととき大きな結晶体のヒトガター―闇黒晶魔の胴体を突き穿つ。三叉槍が結合、反応し、猛烈な雷撃を伴う大爆発を引き起こした。

わだかまる爆炎の中から進み出た闇黒晶魔が、大きく損傷した透明な軀を激しく明滅させ、お返しとばかりに閃光の魔弾を少女に撃ちかけようと腕を掲げる。

少女は技後硬直で咄嗟に動けない。だが、その表情に恐怖はなかった。

なぜなら、彼女はひとり戦っているわけではないから。“彼”と供に在る自分が、負けるはずなどないのだから。

その期待通り、横合いから紺青の影が遮るように躍り出る。たったそれだけで、冥魔の動きが止まった。

「邪魔だ」

無慈悲な一言。蒼白い光が走ったと思うと、まもなく闇黒晶魔の体躯が斜めにズレる。

太刀筋すら見えない魔技とも呼べるまで昇華された恐るべき早業で、闇黒晶魔の巨体は真っ二つに両断され、上半身と下半身は見事泣き別れとなった。

黒い砂と化して消滅する冥魔には目もくれず、少年はとんと、と軽い足取りで大地を蹴って飛び上がり、空中で大立ち回りを繰り広げる少女と背中合わせになる位置で停止する。

周囲と眼下には未だ勢いの衰えない無数の冥魔が蠢いていた。

「一気に蹴散らす！ 行くぞ！」

「うんっ！」

少年のいささか強引な指示に応え、少女が楽しそうに破顔した。ほぼ同時に二人の魔力が練り上げられる。黄金に輝く光の剣が天空に掲げられ、蒼銀のルーンが煌めく刀身が大地を指し示す。りん、と涼やかな音が鳴り、二色の魔法陣が彼らの足下に描き出された。

闇よりなお暗き漆黒の塊が刃先に発生。混沌を司るマイナスエネルギーを広げ、圧倒的な重圧で敵を圧殺する闇黒魔法が――灰色の雲が俄かにざわめく。雷鳴轟き、多数の稲光が迸る。元となった儀礼術式を簡略化、範囲を限定した召雷魔法が――

「ダーク！！」「サンダー！！」

その力を、解放する。

暗闇の塊が爆発的に拡大し、幾条もの雷光が空から落下する。着弾の時を待っただけの冥魔たちに逃げる術などない。

「「フオーーールツッ！！！！」」

少年と少女の叫びが一つに重なり、重力と雷撃の嵐が落ちてくる。超重力の闇黒が大地を覆い隠して冥魔の全てを押し潰し、高電圧の稲妻が天空から降り注ぎ冥魔の全てを撃ち貫く。

断末魔の悲鳴を上げ、混沌の軍勢は数分も経たぬ間に塵芥へと還っていった。

* * *

月の匣は解かれ、墓地は再び静寂に包まれる。

少年の左手が長剣の刃に残った露を払う。少女が漆黒の戦斧を軽く抱きしめた。

そっと吹いた微風が、沈黙し、向かい合ったふたりの頬を優しく撫でた。

「やっぱり、協力しよう？ その……なのはとユーノのこととか、あるけど……、あなたと私ならできるよ、ね？」

やや上目遣いで、少女が懇願する。

「残念だけど手遅れだ」

「え……？」

遠くに見える超高層ビルを見やり、少年が心から残念そうに瞳を閉じた。

刹那、遠雷のような地響きが大地を揺るがす。

「……！」

「ベルの奴、始めたか」

「はじめた、って……？」

意図がわからず、少女がぼやっと首を傾げる。

「この“世界”の中心——あらゆる感情が集まる場所であるこの次元宇宙を、根付いてしまった冥魔の親玉ごと破壊する。それで連中も大人しくなるだろう」

「っそ、そんなんっ！！」

それを肯定するように、彼女を呼び出す念話が届く。
正体不明の光の柱がクラナガンに現れた、と。

「ちまちま病巣を切り取る対処療法じゃ埒が明かない。それに、俺の連れは気が短い連中ばかりでね」

血相を変える少女へ、少年はポーカーフェイスでさもどうでもいいと言いつつ放った。

「ッ——」

形のいい薄紅の唇が強く噛みしめ、少女はその紅の瞳をキツと鋭くさせる。

彼女の内心では、理性と愛情が複雑に入り乱れている。だが、激しく渦巻く寂寞の想いをねじ伏せて、少女は酷薄に笑む“魔王”と真っ直ぐ向き合った。

大切な人が間違えたなら、正さなきゃいけない——そう、少女は思う。たとえどれだけ辛くとも、間違いは間違いだと言える毅然さを彼女は持っているのだから。

「場所を変えよう。君だって、いろいろと言いたいこともあるだろう？俺たちらしい（……）やり方で——決着、付けようじゃないか」

清々しいほどに一直線なピジョン・ブラッドの瞳を一身で受け止めて、魔王は飄々と、気品ある悪魔のように微笑んだ。

クラナガン近郊の総合病院、とある一室。

薄く開いた窓の外は生憎の曇り空。時刻は宵の時。すでに太陽は、地平線の向こうへと隠れ失せてしまっていることだろう。

背もたれのない丸イスに座ったなのはが、フェイトの置いていった資料を精彩を欠いた空虚な瞳で読んでいる。自慢のサイドテールの髪も今はどこかくすんで見えた。

細い指がページをめくり、紙と紙が擦れる音が静々と鳴る。

印刷された文だけではなく、蛍光ペンを用いた手書きの注釈が丁寧に書き込まれたレポートは、制作者である親友らしい心配りの現れ。

すぐ近くのボードには、折り紙で折られた花と紅玉のネックレス——解析を終えて返却されたレイジングハートが静かに座して、主を見守っていた。

「……」

冊子に記された文字を一心不乱に拾う瞳の周りには、おどろおどろしいほどに深い隈が刻まれている。

彼女は、フェイトが訪れた後もほとんど寝ていない。巡回に訪れた看護師にやんわりと注意されても、愛想笑いを浮かべてごまかすだけだった。

今のなのはの興味は、未だ目覚めないこの部屋の主の安否と、資料の内容——とくに、自分が墮され、嵌められた件の“魔王”の情報にのみに注がれていた。

けして薄くはないレポートを、穴が開くほど必死の形相で読み込む姿は、温厚篤実が取り柄の——ごく普通の少女とは思えないほど鬼気迫るものがある。

それほどなのはの後悔と焦燥は強烈だったのだ。

「——」「——」「——」

ふと、なのはが冊子から視線を上げた。

「……？」

何やら外が騒がしい。

不思議そうに小首を傾げ、なのはが席を立つ。白い引き戸を開けると、電灯のついた廊下に顔をひよこっと出した。

キョロキョロと、小動物のようにしきりに首を回して辺りの様子を窺う。

遠くで話し声や、ざわざわとたくさんの人が動いているような喧噪のようなざわめきが耳朵に届いた。

「なんだろう……？」

すると廊下の先から、パタパタパタ……、とスリッパでリノニウムの床を叩いて女性の看護師が慌ただしく駆けてくる。目的地はなのはの居る病室のようだ。

「ああ、よかった」

息を切らせた二十代前半ほどの年若い看護師が、なのはの姿を確認するとほっと胸をなで下ろしたよう見えた。

「あ、あの……どうかしたんですか？」

「それが、詳しい事情はわからないんですけど政府から避難勧告が出ていて、いま患者さんの移送をしているんです」

「避難……」

オウム返しをしたなのはやや困惑顔だ。看護師も同じく少し困惑したように頷いた。

「ええ、パニックを起こさないように各病棟順番で。それで、この階が最後になっているので、いつでも動けるように準備しておいてもらえますか？」

「あ、はい、わかりました」

看護師は答えに満足して、愛想良く微笑んだあとパタパタと駆けていった。おそらく、ここはなのはに任せて他の病室の準備に向かったのだろう。

彼女を見送り、んーっと強張った身体を伸ばしたなのは。真剣に資料を読みふけていたせいで、体中の筋肉はガチガチに凝り固まっていた。

その時――

「きゃっ」

突如、地震のような激しい地鳴りがなのはを襲う。足を取られ、軽くもつれさせて小さく悲鳴を上げる。

「な、なんなの――ッ」

強い――いや、そんな陳腐な表現など生易しいほどに巨大な魔力の波動を感じ取り、なのはの肌がやにわに粟立つ。

——この禍々しい魔力を、知っている（・・・）。

弾かれたように病室へ取って返すと、なのは彼女にしてはいささか乱暴すぎる手つきで窓を大きく開け放つ。ぐんと窓枠の外へと身を乗り出した。

遙か視線の先、高層建築が建ち並ぶ都心部の彼方に、雲を割り、天を突き、成層圏を超え、宇宙まで届かんとするほどに巨大な紅い光の柱が伸びている。

それを護るように浮遊するのは漆黒——

砲戦魔導師としての必須スキルとも言える——実戦ではデバイスの補助があるとしても、だ——魔力で視力を水増したアメジストの瞳がそれ（・・・）の姿を捉えた。

「ベール、ゼファー……！！」

黒煙の空に座す“蠅の女王”。煌々と燃え盛る爆炎に照らされて、女王の冠るティアラのごとき見事な銀髪が妖しく揺らめいていた。

なのはは、ぎゅっと唇を強く噛み締めると、ボードの上のレイジングハートを手に取る。

この紅い貴石は、ベッドで眠り続ける少年との思い出の証。そして、“魔法”と出会った後のなのはの全てだった。

「ごめんね、ユーノくん。……私、行かなくちゃ」

悲壮な表情で、悲痛な声で、呼びかける。応えはない。

瞳を閉じて、レイジングハートを握りしめた両手を胸に抱いたなのはを包み込むように桜色の光が溢れ出し、部屋いっぱい渦巻いた。

謹慎中の身である自分がこんなことをすれば、今度こそただではすまないだろう。管理局をクビになるかもしれない。

だが、それでも。“彼女”との決着は、自分の手でつけないければ。

そう堅く決心し、純白のドレスを纏った少女は大空へと飛び出した。
——そして、なのはの去った病室。
開けっ放しの窓から吹き込んだ冷たい風が、レースのカーテンを
虚しくも物悲しく煽る。

「……………」

尽きない微睡みの底に墜ちていた少年の、堅く閉じられていた瞼
がピクリと揺れる。

透明な呼吸器に包まれた口がわずかに開いた。

「……………なの、は」

#7 「再誕 祝福の風が吹くとき」

灰色の夜空を四騎の“箒”が翔る。

先陣を切るのはテンペスト、騎手はエリス。タンデムしたはやて——彼女自身が飛ぶよりも遙かに速いため、相乗りとなった——と同じく、帽子が吹き飛ばされないように片手でしかと押さえていた。小柄な女性はいえ二人の人間を乗せてなお、速度を維持している点はさすが高機動型の面目躍如といったところか。

少し遅れて灯と命を乗せた飛行形態へストライクモードのガンナーズブルームが、後部に展開した機構から箒条のブラストを吹き出して飛翔し、同じく飛行形態となったそれぞれの“箒”に跨る翠とスルガが追従していた。

「はわわっ、速すぎですっ」

「エルフィ、危ないから顔出さんというてな」

好奇心に駆られ、主の帽子の中からひょっこり顔を出したリインフォース？が、どこかの巫女さんぽい鳴き声をあげて引っ込んだ。彼女らは、突如としてクラナガン中央部を囲むように現れた四本の光の柱の内の一本に向け、急行していた。

天文学的魔力を有するそれらは次元震の予兆を伴って鎮座しており、一時間もすれば極大の次元震となってこの世界を覆うだろう。そうなれば大惨事は免れない。

なお、フェイトはすでに交戦を開始してしまっている。折り悪く、クロノが本局に召還されてしまっていたのも痛い。

そして、ヴォルケンリッターの四人もまた別の柱へと向かっている。戦力を分散して両面作戦を採った、というよりも、単純に彼女らでは“箒”の速力に追いつけなかったからだ。

歴戦の騎士といえども、ファー・ジ・アースの英知の結晶“箒”の飛行能力にはかなわないようだった。

「すごい圧力ですね、“アレ”。……魔法の使えない私でも、危険だってわかります」

「まったく、なんてせつかちなやつちゃで。魔王ってみんなそうなん？」

クラナガン市内に正四角形を描く光柱から放たれる異様な威圧感を肌で感じ、エリスに応じるはやての言は軽々しいが、表情は硬い。

「少なくともベールⅡゼファーは気の長い方ではないわね」

灯が言えば、

「そうですよ。どうせ、「あたしには小細工って合わないのよっ！」とか言っちゃったりなんかしてるんですっ！」

翠がベルの声真似をして混ぜっ返す。

「ともかく、あれを放置していたら大変なことになっちゃいます。なんとかしないと！」

「セオリー通りなら、どれかを停止することで阻止できるはずですよ。もっとも、魔王の妨害が予想されますが」

「場合によっては全て停止させなきゃ駄目かもしれないね。くっ、時間が足りないな……」

エリス、スルガ、命が各々意見を述べ――

「まさしく“世界の危機”、やな」

はやてが締めくくった。

そうこうしてる内、“箒”は日の落ちた夜空を裂き、ぐんぐんと光の柱が近づいていく。

「見えた……!」

一キロほど先、光の柱の前にたゆたう魔王の姿を確認し、狙撃体勢に入ろうと灯がガンナーズブルームのグリップに手をかける。

相乗り中の命は前傾姿勢になった彼女の腰に軽く抱きついている。若干、情けない。

「ッあかりん、避けてっ!」

ふと頭上を見上げた命の警告。それを灯が認識した刹那――突如として積層した雲を切り裂き、紅黒い光柱が七条、天から真っ直ぐに降り注ぐ。

皆の顔が一瞬にして青ざめる。すぐさまの散開、ギリギリのタイミングでの回避運動。光条の端が、ガンナーズブルームのスタビライザーを掠めた。

「くっ!」「うわあっ!?!」

小さな爆発。黒煙を吹き、“箒”が推力を失う。

「灯ちゃん! 命くん!」

エリスの呼び声虚しく、二人は重力の腕に捕まって物理法則に従い墜落していく。

彼らもウィザードであるからには常人を越える身体能力なり、月衣による限定的な物理法則遮断なりで切り抜けるとわかっていても、心配してしまうのが人情と言うものだ。

「いったい、誰や――」

はやてが呟く。

消し飛んだ雲の合間——ミッドナイトブルーの空をバックに、閉じた純白の“羽根”が悠然と降臨する。

下々の者に偉容をまざまざと見せつけ、“羽根”が開く。無数の白い羽の幻影がゆらゆらと舞い散った。

「ルー||サイファ―！」

七枚の“羽根”が構成した一対の大きな翼。その中心に抱かれていたのは、白いワンピースを纏う小柄な少女——テスラ||陽炎||フラメル姿のままの、ルー||サイファ―であった。

「それ以上の進入は罷り通らぬ」

魔王の魔王たる所以、莫大な魔力を笠に着た超大な重圧をエリスたちにぶつけ、尊大にルーが言い放つ。

「今度はひとりなん？ 私らもずいぶんとなめられたもんやな」

「フン。たかが人間の群れ、我独りで事足りるわ。それに——パールたちなら、今頃そちの騎士とやらの相手をしているやもしれぬな」
「なんやて!？」

挑発的な軽口をしたたかに言い返され、はやては“箒”の上から落ちてしまいそうなほど動揺する。

安定を欠き、ガクンと揺れる“箒”を「ちょ、はやてさん、暴れないでくださいっ」とエリスが慌てて立て直した。

そして、魔王に問い質す。

「なにが目的なんですか、ルー||サイファ―」

「知れたこと。目障りな冥魔諸共この宇宙を破壊する。奴らがこの

“世界”を喰らい、力を付けられては困るのでな」

にわか一同の顔色が変わる。“世界の危機”が現実味を帯びてきたのだ、無理もない。

「我とベル、パール……、そしてシャイマール、四者の魔力を流し込んだ“楔”を大地に穿ち、それらを共振させ、この星——ひいては次元そのものを打ち砕く」

不吉に輝く紅い巨大な“楔”が煌々と、灰色の夜闇を照らす。

「あの柱——“楔”が最低二つ健在なれば我らの勝利……、臨界までに我らへ致命の傷を与えられればそちらの勝利。ベルではないが、簡単なゲームであろう？」

可憐な容貌を妖艶に彩り、黄金の魔王が微笑を浮かべる。

“ゲーム”のルールと難易度に皆の表情が引きつった。

「ゲーム、なあ……。そら好都合や」

「何……？」

そんな中、ひとりはやてはニヤリと不敵に笑みを零し、“箒”から降りて自らの翼で浮遊する。

「なんせ——」

展開した剣十字の錫杖——シュベルトクロイツをルーへと突きつけ、言い放った。

「私の悪運は最強や！ エルファイ！」

「はいですっ」

いつの間にか帽子から這いだしていたリインフォース？が、元氣よく応答し、自らの分身たる真新しい装丁の蒼い魔導書——蒼天の書を開く。

そして、はやての開いた豪華な装丁の施された紅茶けた書物——
夜天の魔導書の頁が、白銀に輝いた。

「あかりん、怪我はない？」

「ええ、ありがとう」

アスファルトの地面に強かに打ちつけた背中をさすりつつ、命は珍しく尻餅を突いて座り込んでいた灯に手を差し伸べ、助け起こした。

“箒”ごと墜落した二人は、ぐずる“箒”を宥めすかしてどうかこうにか滑空させていたが、結局踏ん張りきれずに地上へと落下はやてたちと分断されてしまった。

上空では幾つもの爆発が起き、幾本もの光の筋が交錯している。はやてたちとルー||サイファアの戦闘が始まったのだろう。

「でも、この子はもう飛べないわ。武器としてならまだ使えそうだけど」

言いながら、灯は飛行ユニットからスパークと黒煙を上げるガンナーズブルームを拾い上げる。故障した愛機の惨状に、どこか悲しそうに眉を下げた。

もともと内部構造が比較的単純で頑丈に造られている機種ではあるのだが、さすがにあの光に接触は拙かった。砲身などは歪んでいないので灯はそのまま使用するつもりでいるが、もしもの時は代わりの武器を使うことになるかもしれない、と内心で考える。

「困ったな……上のおみんなには合流できそうにないし」

少し頼りない声を出して、命が空を見上げた。

月衣の力で浮遊くらいは出来るが、それと空中での戦いが可能かは別の問題だ。“箒”の補助なしに空戦を熟せるウィザードなどそうは居ない。

まあ、とある魔剣使いの男くらいにもなれば、倒れる鉄塔を駆け上って空中へ飛び出すくらいのことはやってのけるのだが。

ともあれ、自分たちの行動を苦慮する命は困り顔で戦いの光を見つめる。

ドン、と爆轟を響かせ、一際大きな爆炎が巻き起こる。金色の炎が小さな太陽となって闇を照らした。

点いたままのネオンが、灯の美麗な造形の横顔を暗闇の中から映し出す。それに気づいた命は、やにわに顔を赤らめて、魅入ってしまう。

「……なら、あの子——フェイトと合流しましょう」

「——え？」

「命、どうしたの？」

「あっと、フェイト、っていうと……あの金髪の子？」

一瞬凝固した命。不思議そうに小首を傾げる灯の姿に、さらに動揺を重ねるが何とか精神を再構築して、取り繕う言葉を何とか紡ぎ出す。

そんな醜態を知ってか知らずか、いつもの無表情で灯は首肯する。

「ええ。どうやら地上で、それも独りきりでシャイマールと戦っているそうだから」

「シャイマール、か……わかった、そうしよう」

二人は頷き合うと、禍々しい光を放つ紅い“楔”の一つへ向かっ

て走り出した。

＊ ＊ ＊

灼熱を帯びた剣閃が走る。

しゃらん、と澄んだ鈴音が鳴り、金の尻尾をなびかせる白い影が鋭利な一閃の隙間を掻い潜った。

懷に飛び込み放たれた鉄拳が、紅蓮に燃え盛る炎を纏う。

刹那よりも速く展開した鞘が、鉄拳を迎え撃った。

鈍い激突音が響く。

間髪入れず長剣が閃いた。内部機構に込められたカートリッジが炸裂し、紫電の速度で斬り返される。

達人の、研鑽し尽くされた妙技により繰り出された斬撃は空間を斬り裂くかのごとく鋭く、それでいて美しい。

しかし、必殺と思われた斬撃は身を反らすことで紙一重に躲される。白刃に触れた金糸の髪が数本弾け飛び、宙を舞った。

緋袴の裾がひらりと揺らめき、純白のニーソックスに包まれたか細い脚が弓のようにたわむ。

崩れた体制から無理矢理に放たれた蹴撃が、がら空きの脇腹に突き刺さる。

蹴りの反動で、両者の間合いは大きく離れた。

紅い火の粉が散る中、相對するのは白の陣羽織と紫の甲冑姿の“烈火の将”と、白の振り袖に緋袴を纏う“東方王国の王女”。

「ふ、はっ、あははははっ！」

ミッドチルダを破壊せんとして穿たれた四柱の“楔”を守護する四柱の魔王——その一人、パールクールが無邪気に哄笑する。

その黒くつぶらな瞳は、愛剣レヴァンティンを青眼に構えながら、まんじりとも動かないシグナムへと送られていた。

周囲ではヴィータ、ザフィーラ、シヤマルのヴォルケンリッター三騎とアゼル、エイミィ、リオンの魔王三柱が激しい火花を散らして激突している。

ヴォルケンリッターと裏界魔王による遭遇戦。リオンⅡグンタお得意の“書物”を用いて先読みした魔王側の待ち伏せ、というべき形で始まった激闘は早くも最高潮を迎え。大地に穿たれた柱を巡る攻防は集団戦の様相を呈していた。

「あんた、結構やるじゃん。ルー程度に負けたって聞いてたから期待してなかったんだけど」

弱体化したとはいえ、未だ裏界最強を誇るルーを“程度”扱いすると、死と硝煙の匂い香る戦場に血がたぎり昂揚したのか、パールの可憐な面差しは喜色満面、嬉々として輝く。

彼女ら魔王の本性は、闘争と破壊、背徳と快楽、欲望と――造物主に反逆し、“悪”の烙印を押された墮落した存在である。

普段の頭の軽い言動や可憐な姿から一見人間味や親近感を感じられても、根元的なところは人外――ヒトではないのだ。

そんな人外の狂気を充てられても、シグナムは不動のままだった。

「なあに、黙りしちゃってノリ悪い。問答無用ってわけなの？
パールちゃん、そういうのイケないと思いまーすっ」

リアクションがないことにぶーたれるパールをシグナムは切れ長の伶俐な瞳で一瞥すると、突然反転。弾かれるようにぐんと上昇した。

「って、ちょっと！ あたしを無視する――」
「ラテーケン！」

直上から戦槌に取り付けられたロケットブースターを噴かせて、小柄な深紅——ヴィータが、シグナムと入れ替わるようにして、急速落下してくる。

「ハンマアアアアッ!!」

推進器の加速に、落下の重力が加算された速度でヴィータが特攻。雄叫びを上げながら、鉄槌が振り下ろされた。

「くっ!」

咄嗟に張られた障壁が、ハンマーヘッドのスパイクを弾き返す。そこらの雑魚魔王ならばバリアごと粉碎したであろう強烈な攻撃はしかし、“楔”の維持による減退を感じさせないパールの大魔力——ベルいわく馬鹿魔力——により創り出された付与魔法により、簡単に逸らされてしまった。

渾身の一撃が容易く弾かれた。ヴィータは飛び退きながら内心で戦慄を覚え、「ちっ、これでもダメか」と舌打ちする。

「おまえらみんなして頑丈すぎんだよ。なんなんだ、その装甲!」
「知るか、ちびっこ! アゼルっ、ちゃんと足止めしとかなきゃだめじゃない。殺すよっ!?!」

上空でぼやっと滞空していたアゼルがその剣幕にびくりと身を竦め、「ごめんね——」と済まなそうに手を合わせる。
しれっと吐かれた暴言に、ヴィータが「ちびっこ言うなー!」と激して気炎を上げた。

「おまえだって私とほとんど変わらないじゃん!」
「ふんっ、あんたの目は節穴? どこに目えつけてるのよ」

さりげに豊満な胸を強調するように堂々と張り、パールがヴィータを挑発した。

ヴィータはついっとう頭を垂れて、自分の首から下を見やる。

はやてデザインのゴシック調の紅い騎士服が真っ直ぐ延びている。視界はそのまま、眼下のビルへと届いた。

頭を鉄槌で打たれたようなショックを受けたヴィータが「——う、ううっ！ 私は八歳相当で造られてるんだからこれでいいんだよ！」と、血涙を流さんほどの勢いで吠える。

「知らんく。そんなにちびっこがイヤならぺたん子よ。おお、これ名案っ。よし、あんたのあだ名、ぺたん子でけてーい」

「ぬあっ！？ て、てめえ、もう許さないからなっ」

精神年齢が近いだろうか、ギャーギャーと、傍目にはじゃれ合いにしか見えないやり取りをする同朋に、密かに呆れ顔をしたシグナム。そんな彼女の行く先は、分厚い書物を開いて戦況を見下ろす青いドレスの魔王——リオン。いつもの内心が見えない微笑で書物を紐解き、時折味方に指示を出している。

リオンが敵集団の頭脳だと見抜いたシグナムは、彼女を討ち取ること形勢を引き寄せようという腹積もりだった。

カートリッジを炸裂させ、蛇腹状の連刃剣となったレヴァンティンが蜷局を巻く。〈飛竜一閃〉——シグナムの決め技が、その名の通り天翔る竜のように夜空に唸る

「覚悟！」

「なるほど、先ずは私を討つと。悪くない判断ですが——」

紫色の魔力光を巻き上げて眼前に迫る連結刃。だが、リオンの澄まし顔はぴくりとも動かない。

当然だ。彼女はシグナムの思惑などとうに知っている（……）
）のだから。

「それも……、この書物にある通り」

「やらせないっ！」

尖端とリオンの間を塞ぐべく、アゼルが腿のブースターを激しく
噴かせ、躍り出た。

横薙ぎに払われたアゼルの槍が、飛竜一閃を叩き落とす。
グライディングスラッシュフォーム

続けて、槍を持たない左手を突き出すと、腕の中に仕込まれた四
本のボルトが皮膚から突き出て、巻きついた帯ごと展開。青白い輝
きを発する電気エネルギーが、そこに帯電する。

「!?!」

派手な音とともにボルトから放たれた幾条もの電撃が、硬直して
動けないシグナムに襲いかかった。

「ぐ、ああああああっ！」

〈パニッシャー〉。腕に内蔵した機構から、生体電気を増幅した
高圧電流を放って相手を感じ電させる生体兵器である。
バイオオーガン

強烈な――それも魔法的な付加効果を持つ――電撃により麻痺し
て動けないシグナムを見やり、リオンは目の前に魔法陣を発生させ
る。その中心に孕んだ闇の塊が圧縮されていく。

〈ヴォーテックスランス〉。形成された黒き槍の先端、捻くれた
切っ先が真っ直ぐシグナムに向いていた。

おもむろに頭の上へと持ち上がる右手。

「はらわたを、ブチマケろッ！ ……なーんて」

おどけたセリフと同時に白魚のような指先が、烈火の騎士を指し示す。それを合図に、ヴォーテックスランスが射出された。

シグナムは未だ動けない。麻痺した身体でもがき、苦痛の表情で美貌を穢す。

阻むものがない空を、漆黒の槍が飛翔する。
標的に到達する刹那――

「シグナムは」「やらせませんっ!」

ザファイラとシャマルが庇い出て、青磁と藍白の魔法障壁を張り巡らす。

着弾。解放された闇が黒い球体となり障壁に喰らいつく。しかし、多重多層のそれを貫くことは出来ず、魔力の残滓となつて霧散した。「あら」自分の魔法を防がれたに対し、リオンがさして残念そうでもない感想を漏らした。

「……なかなかのコンビネーションです。流石、と言うべきでしょうか」

「く――っ、不覚をとった……! すまない、シャマル、ザファイラ」

「気にするな。元より俺の役目は仲間の盾になることだからな」

「困ったときはお互い様よ」

麻痺が解け、持ち直したシグナムは仲間に礼を言い、愛剣を構え直してリオンを見据える。

護衛のために進み出たアゼルの影で、“秘密伯爵”が妖艶な笑みを浮かべた。

「ですが、こちらもう一人居るのをお忘れですか?」

膨大な魔力の奔流――

意味深に笑みの真意を悟り、シグナムたちが天を仰ぐ。

皆よりもやや上空に座したエイミーの指先が、複雑な紅いルーンを宙に描き出していた。

「逆巻け風よ！」

両手が天に差し上げられ、その中心に七芒星の巨大な魔法陣が発生。

頭上の魔法陣はぐんぐん上昇し、限りなく広がるように見える雲の天蓋に張りつく。

「ハリケーン！！」

灰色の暗雲に幾つもの渦が巻く。そして、渦が大地に向かってゆっくりと伸び、高速で回転する螺旋の柱が――極太の竜巻が降りてくる。

上空の雲を引き連れて、巨大な竜巻が戦場を敵味方お構いなしに貫いた。

空域一帯を包み込んだ凍えるような冷気を、一息に吹き払う灼熱の嵐。火球の弾幕が凍てつく飛礫の群れを一瞬にして蒸発させる。

間髪入れず剣十字を模した錫杖が横薙ぎに払われ、発生した不可視の刃が大気を斬り裂く。しかし音速で滑る空気の刃は、七枚の白い盾が組み合わさって構成された大楯に弾かれ、霧散した。

空気の振動が収まらぬ中、ぱきんと澄んだ音を鳴らして白亜の大楯が分離、三枚を主の側に残して射出される。

標的は氷結と烈風を操る黒翼の魔導師――八神はやて。彼女の空色の瞳は普段よりも色合いが濃く鮮やかに、栗色のセミロングは煌めくプラチナブロンドに染まっていた。

ユニゾンデバイス
融合騎たるリインフォース？との“ユニゾン”――、膨大な魔力を持つが故に、微細な制御を苦手とするはやての戦闘形態である。

「――っく、しゅっこいなあ！」

紅い尾を引いて突進してくる白い“羽根”。迫り来る脅威に思わず吐き捨てたはやてはリインフォース？に魔力障壁の展開を指示、自らは回避運動に努める。

しかし、元より空戦機動など門外漢。簡単に追いつかれ、障壁を叩かれる。

すると、紅い弾丸が“羽根”にぶち当たり軌道を変えた。

左腕から砲身を生やしたスルガが生体弾を乱射して、はやてをフオローしたのだ。

「ありがとな」

軽く礼を言い、はやてが目配せする。頷いたスルガは、生体弾をルーへ乱射する。

はやても同調して、一メートルはあろうかという氷柱の槍を撃ち放った。

攻撃は最大の防御。回復役が貧弱な――はやてと翠は一応使えるものの、本職ではないのでいささか心許ない――パーティーでの長期戦は不利と判断。最大火力で畳み掛け、一気に勝負を決めようと熾烈な攻勢を仕掛ける。

しかし、相手は“金色の魔王”ルー＝サイファ。如何に“楔”の維持によるリソースの低下と、未だ癒えぬ傷によって全盛よりも力を減退させているとはいえ、易々と倒されてくれるような存在ではない。

「受けよ、ドラゴンフレイム!!」

回転する炎の円環が辺りを焼き払い、巨竜の息吹にも似た灼熱が吹き荒ぶ。

繰り広げられる激闘を、離れた場所で見ていることしかできないエリスは、悔しそうに唇を噛む。力がなくても世界は救えるけれども、仲間を助けることはできない、と自分の無力さを改めて噛み締めて。

搭乗状態のまま前方に大楯を展開したアイゼンブルグ。スルガが、熱風を受け止める。

その背後から、機を窺っていた翠が、ウィザーズワンドに跨って飛び出した。

「タンブリング、ダウン!」

「ぬ……!」

指先から延びる冥闇の侵蝕。レジストし切れずに意識の一部を刈り取られ、一瞬だけルーがぐらりと体勢を崩す。わずかな隙。だが、それは格好のタイミング。

「穿てッ！」

『ブラッディダガーっ！』

うわずり気味の声を合図に十本の短剣が、朱色の光を引いて追撃する。

十の短剣が着弾し、十の炸裂を引き起こした。

爆発。爆炎。

咄嗟に割って入った三基のアイン・ソフ・オウルを引き連れて、ルーが噴煙を切り裂く。

「ち……、鬱陶しい羽虫共め。先ずはそちらから消えてもらおうとしようか、真壁翠！」

苛立ったようにルーは、両手の親指と人差し指で作った三角を、標準に見立てて翠に合わせた。

指で作られた三角形の中に開く異界の扉――

「ま、また私ですかー！？」

自身がウィザードとして覚醒することとなった一件、“合わせ鏡の神子事件”の最終局面で、ルーから貰った即死級の一撃を思い出し、青くなる翠。

〈ワールドゲイト砲〉。前世の記憶を受け継ぎ戦う〈転生者〉と呼ばれるものたちが用いる、必殺必中絶対不回避の一撃である。

眩いばかりの金色が、天地を揺るがすほどの莫大な魔力が“世界

門”から溢れ出した。

ルーの眼前に発生する五つの円から成る七芒星の複雑な魔法陣。光が臨界を越える。

逃れ得ぬ死の気配を前に、翠はぎゅっと瞳を閉じた。

「きゃあああっ……って、あれ？」

いつまでたってもやってこない痛みに、不信を感じた翠が恐る恐る瞼を上げる。そこには、アイゼンブルグを飛行形態からガントレットに切り替え、その全身を覆い隠すほど巨大な盾を眼前に翳す、スルガの大きな背中。

“箒”に増装された対魔・対物複合式のバリアシステムがフルパワーで起動。淡い虹色の幕を発生させて、必滅の光を軽減する。

「ぐー、ア……ッ」

圧倒的なワールドゲイト砲の威力を、その一身で引き受けるスルガ。恒星の灼熱もかくやという光の奔流が彼の全身を。

避けられないのなら、受けきればいい。身を挺して仲間を護ることを自らの存在意義とするスルガは、ワールドゲイト砲の想像を絶する威力を苦悶の表情で耐え忍ぶ。

アイゼンブルグ最大の特徴、積層構造シールドが悲鳴のような軋みを上げた。

ようやく霧散する光。全身から煙を立ち上らせるスルガは、仁王立ちのまま、巖のように微動だにしていなかった。

「スルガさん！」

「ぼ、僕は、だい、じょうぶ……です……」

息も絶え絶えなスルガの姿にはやては怯んだ表情を見せる。しか

し、未だ健在な“魔王”の存在を思い出すと思考を切り替え、ルーに錫杖の尖端を向けた。

夜天の魔導書が白銀に強く輝いた。

「ッ、汝、美の祝福賜らば、我その至宝、紫苑の鎖に繋ぎ止めん！」
『いくですっ！ アブソリュート——、ゼロ！！』

はやての詠唱とリインフォース？のかけ声を引き金に、大気中の水分が凝固し、ルーを封印してしまうかのような白く儚い氷の棺桶が生まれる。

絶対零度の名を冠した大魔法。常人であるならば、これ一撃で地に沈むことだろう。

だが——

砕けた氷塊の中から現れたのはほぼ無傷な金色の少女。黄金色の巻き髪に残った氷が虚しく散った。

『そんな、うそですっ』

「アレ喰らって、無傷かいな……！！」

「この程度で我を滅ぼそうなど、笑止」

渾身の魔法が効果をなさなかったことに動揺する魔導師を鼻で笑い、上昇したルーがトドメを刺そうと魔力を高める。

発露した金色の輝き——それが、深紅に染まっていく。

「身の程を知らぬ愚か者共め。裁きの時は来た——、存分に報いを受けるがいい……！！」

七枚のアイン・ソフ・オウルが連結し、一対の翼を形成する。純白の装甲に挟まれた紅い結晶が、激しい閃光を放った。

「受けよ、極光の洗礼！」

以前、力に飲まれたエリスが暴走し、木星を囲む衛星の一つ、パンドラを分断したのと同種の“光”。中途半端な覚醒だったその時ですら、天体を断ち切るほどの破壊力を持っていた。

ならば、正当後継者たるルー||サイファーがそれを放てば、どうなるか――

「全てを滅ぼす破滅の光――！！！」

透明な声を引き金に、滅びを呼ぶ極大の光が天から降り注いだ。

世界を覆う真紅の極光。

大地に突き刺さった光は、建築物を次々に粉碎、跡形もなく消滅させる。作り出された光景はまさに煉獄を思わせるような劫火の海だった。

「ほう……、我が光を受けてまだ息があるか。存外しぶとらしい」

感心したように、しかしどこか侮るようにルーは妖艶な笑みを浮かべる。

直撃したわけでもないというのに、皆は檻樓切れのように疲弊し息も絶え絶えだ。はやての帽子は吹き飛び、ユニゾンが解け、翠は“箒”の上で力なくうなだれ、スルガに至っては致命傷に近い。

すでに敗北は寸前、打つ手はない。

「その目、気に入らぬな」

「……ッ！」

だというのに、自らを毅然として睨み続けるはやてに、ルーは不愉快そうに眉をひそめる。

彼女の手の中には、くたりと力なくなだれるリインフォース？
が庇われていた。

「力の差は歴然、余力はもう無かろうに。大人しく諦めて、滅びを
享受したらどうだ？ 死と滅びは、誰しにも分け隔てなく訪れる唯
一平等の安らぎぞ」

尊大に、傲慢に――それは誘惑。幻想的な死をいざなう、甘い呼
び声。

「諦めへん！ 諦めたらそこでなんもおしまいや！」

冷たい白銀の眼孔を見返すのは青空のような双眸。そこには、強
大な絶望を前にしても消えることのない熱くたぎる炎が爛々と灯っ
ていた。

「私は――、私はこの子に、お姉ちゃんと会わせてたるって！」

「はやて、ちゃん……」

はやての胸の中で、疲弊し、朦朧とするリインフォース？が譫言
のように呟く。

六年前、クリスマスの日、はやては眠りにつく“彼女”と約束を
した。

壊れたところを治してあげる、と。ずっとひとりぼっちで泣いて
いた“彼女”に、どれだけの時間がかかろうとも、必ず家族を、幸
せをあげると約束した。

「――もう一度……、笑顔で逢おうって、誓ったんや！ そしたら、
みんな笑顔で、完全無欠なハッピーエンドやって！」

再びまみえるその時まで、倒れるわけにはいかない。

それがはやての戦う意味。武器を執る理由。大切な家族と共に歩み、共に生きると誓った彼女の“希望”だった。

「そちの事情など知ったことか。どれだけ叫ぼうとも、これで終わりという厳然たる事実が動かぬ」

血を吐くような魂からの叫びを冷酷に切り捨てて、ルーは小さな掌に光明を集める。

〈フラッシュエンド〉。高密度の灼光により、対象を焼き尽くす攻性魔法。彼女の“弟”が近接戦で変則的に放つのは違う、本来の使い方。

「さようなら？」

黄金の少女が、見た目相応に稚い仕草で小首を傾げ、無邪気な死をもたらす。

「く……っ」

真っ白な輝きが、はやてを焼き尽くさんと放たれた。

——約束守れんで、ごめんな。

瞳を見開いたまま、心の中で謝って。はやては、せめてこの子だけでも、と小さな末っ子を抱き庇う。

刹那——、夜天の魔導書が強く煌めいた。

「何だと……！」

夜空に一陣の風が吹く。

余裕綽々の表情を取り払い、ルーは驚愕に目を見開いた。

満天に煌めく星々を抱き、流麗な月が静かにたゆたう夜空のように深い“紺青”の光が、破滅の閃光を遮断した。

漆黒の羽が、ふわりと軽やかに舞い踊る。

はやての前に立ち塞がり、灼光を退けた黒衣を纏う長身の女性が、三対の黒翼をはためかせ、ゆっくりと振り返る。

「リイン、フォース……？」

どこか夢見心地ではやては、その名前を呼ぶ。

「遅くなって、申し訳ありません」

ふと夜風が流れ、銀色の綺麗な髪を優しく撫でる。

それは旅立ちの風。

旅路の最初、惑う旅人の背中をそっと押す、はじまりの風——
いつか別れた、きつとまた出逢えると笑い合った優しい祝福の風。

「夜天の魔導書管制人格リインフォース、只今、帰還しました。……大きく成られましたね、主はやて」

万感の想いを言葉に込めて、彼女——リインフォースは、愛しい主の名を呼ぶ。

「っほんとや……、リインは寝坊助さん、やなあ」

「すみません……」

懐かしい声、懐かしい姿。

ずっと逢いたかった家族——、はやては、ぼろぼろと止め処ない

大粒の涙と、透き通るように屈託のない笑顔をこぼす。六年間の悲願が成就したことで感極まったのだった。

「お姉、ちゃん……ですか……?」

「そうですよ、エルフィ。後は私が引き継ぎます。ですから、あなたはゆっくりおやすみなさい。起きたらたくさんお話をしましょう、ね?」

「……は、い」

優しく諭す姉の言葉に、安心したように微笑み、妹は目を閉じる。

「せやな、感動の再会にはまだ早やかっただわ」

ぐいっと袖で涙を乱暴に拭い、はやては顔を上げた。

彼女の眼差しの中には白い羽根を侍らす“金色の魔王”。苛立ちを露わにし、強大な魔力を発露させていた。

「行けるな、リイン!」

「はい」

従者の淀みない答えに頷いき、若き王は金色の錫杖を天高く差し向ける。

りん、と白銀の魔法陣が輝いた。

「夜天の光よ、この手に集えっ!」

祝福するかのように降り注ぐ、季節外れの真白な粉雪。

高らかに、祝詞が天に響く。

「祝福の風、リインフォース! セーット、アップツ!!」

悠久の時を経て――、ここに“夜天の王”が再誕した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6983w/>

魔法大戦リリカルなのはWizarS 2nd

2011年10月10日13時09分発行